
春日部市

浅間下遺跡

首都圏氾濫区域堤防強化対策（幸手市外）事業地内
埋蔵文化財発掘調査報告

2016

国土交通省 関東地方整備局
公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



1 遺跡遠景



2 第48号小竪穴状遺構遺物出土状況



1 第48号小豎穴状遺構出土遺物



2 第48号小豎穴状遺構出土遺物展開写真(1)(第75図34)



3 第48号小豎穴状遺構出土遺物展開写真(2)(第74図33)

序

埼玉県は関東平野の中央にあり、県域の東半分が荒川と利根川という二大河川にはさまれております。また、首都東京に隣接し、いくつもの河川が県内を流れて東京湾へと注ぎ、水災害の多い県でした。

このような河川の一つである江戸川は、17世紀に先人達により開削され、水上交通、治水といったさまざまな側面から、四百年間にわたって、流域の生活を支えてきました。

しかし、近年のゲリラ豪雨を始めとする特異な気象は、各地で水害をもたらしております。江戸川右岸の堤防がひとたび決壊すれば、埼玉県内だけではなく、東京を始めとする首都圏の多くに深刻な被害が及ぶおそれがあります。

このような被害が発生するおそれのある堤防区間では、安全性を確保し、人々の生活を守るために、拡幅による堤防強化が実施されています。

堤防強化対策事業地内には、周知の埋蔵文化財包蔵地が多数存在しています。今回発掘調査を実施した浅間下遺跡もその一つです。発掘調査は、堤防強化事業に伴う事前調査であり、国土交通省関東地方整備局の委託を受け、当事業団が実施いたしました。

発掘調査の結果、縄文時代早期から後期にかけての竪穴住居跡や小竪穴と呼ばれる施設などに加え、奈良時代から平安時代にかけての生活の跡も残されていることがわかりました。

本書は、これらの発掘調査成果をまとめたものです。埋蔵文化財の保護並びに普及・啓発の資料として、また学術研究の基礎資料として、多くの方々に活用していただければ幸いです。

最後に、本書の刊行にあたり、発掘調査の諸調整に御尽力いただきました埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課をはじめ、国土交通省関東地方整備局、春日部市教育委員会並びに地元関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

平成28年2月

公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理 事 長 樋 田 明 男

例 言

1. 本書は春日部市に所在する浅間下遺跡（第4次調査）の発掘調査報告書である。
2. 遺跡の略号と代表地番、発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。
浅間下遺跡（AMS）
春日部市西親野井字浅間下149-1番地他
平成23年12月26日付け 教生文第2-71号
3. 発掘調査は、首都圏氾濫区域堤防強化対策（幸手市外）事業にともなう埋蔵文化財記録保存のための事前調査である。浅間下遺跡の調査は、埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課が調整し、国土交通省の委託を受け、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団（当時）が実施した。
4. 各事業の委託事業名は、下記のとおりである。
発掘調査事業（平成23年度 第4次）
「首都圏氾濫区域堤防強化対策（春日部市）に伴う埋蔵文化財発掘調査」
整理報告書作成事業（平成27年度）
「首都圏氾濫区域堤防強化対策（幸手市外）における平成27年度埋蔵文化財発掘調査（整理）」
5. 発掘調査・整理報告書作成事業はI-3に示した組織により実施した。
浅間下遺跡第4次の発掘調査は、平成24年1月4日から平成24年3月31日まで実施し、瀧瀬芳之、岩瀬 譲が担当した。
整理報告書作成事業は、平成27年4月9日か

ら平成27年12月31日まで実施し、大屋道則が担当した。

平成28年2月22日に埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第418集として印刷・刊行した。

6. 浅間下遺跡の発掘調査における基準点測量は、株式会社埼玉コンサルタントに委託した。

空中写真撮影は、株式会社東京航業研究所に委託した。

巻頭図版の遺物写真撮影は、小川忠博氏に委託した。

7. 発掘調査における写真撮影は瀧瀬、岩瀬が行い、出土遺物の写真撮影は大屋が行った。
8. 出土品の整理・図版作成は整理担当者が行った。
9. 本書の執筆は、I-1を埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課、縄文土器、土製品、まとめのそれぞれ一部を上野真由美、土偶を小野美代子、陶磁器を村山卓が行い、その他を大屋が行った。
10. 本書の編集は大屋が行った。
11. 本書にかかる諸資料は平成28年3月以降、埼玉県教育委員会が管理、保管する。
12. 発掘調査や本書の作成にあたり、下記の機関から御教示、御協力を賜った。記して感謝いたします（敬称略）。
春日部市教育委員会

凡 例

1. 浅間下遺跡第4次調査におけるX・Yの座標は、世界測地系国土標準平面直角座標第IX系(原点北緯36° 00' 00"、東経139° 50' 00")に基づく座標値を示す。また、各挿図に記した方位は、全て座標北を指す。

E-8グリッド北西杭の座標は、X=4040.000m、Y=-1930.000m、北緯36° 02' 11.08127"、東経139° 48' 42.89699"である。

2. グリッドの設定は10×10mの基本グリッドを設定した。表記は、北西隅を基点として、北から南方向にアルファベット(A、B、C…)、西から東方向に数字(1、2、3…)を付した。
3. 本書の本文、挿図、表、写真図版に記した遺構の略号は、以下のとおりである。

S J…住居跡 S D…溝跡 S K…土壌、小
竪穴状遺構 P…ピット

4. 本書における挿図の縮尺は、以下のとおりである。例外は図中に縮尺とスケールを示した。

全体図 1:700 遺構配置図 1:250 遺構
図 1:30 1:60 1:80 1:100 土器拓影図
1:3 土器実測図 1:4 土製品 1:1
1:2 2:3 1:4 土偶 1:2 陶磁器
1:3 大型石器 1:3 小型石器 2:3

5. 住居跡の規模は、竪跡、出入口施設などが明瞭なものは、主軸と副軸で表示し、それ以外については、長軸、短軸で表示した。
6. 遺物実測図の表記方法は以下のとおりである。
赤彩:網10% 煤、被熱、焼土:網20% 炭化物:網30% 研磨範囲:平行線 使用痕範囲:
「↑」

7. 観察表中の石材名は以下のとおりである。

曜:黒曜石 黒:黒色頁岩 珪:珪質頁岩
頁:その他の頁岩 泥:緑泥片岩 雲:雲母片岩
絹:絹雲母片岩 片:その他の片岩 砂:砂岩
安:安山岩 緑:緑色岩 閃:閃緑岩 ホ:ホル
ンフェルス チ:チャート 軽:軽石 石:石英
滑:滑石 玉:玉髄

8. 遺構断面図に表記した水準数値は、すべて海拔標高(単位m)で示した。

9. 遺物観察表の表記方法は以下のとおりである。
法量の単位はcm、()の数値は推定値、[]の数値は現存値、それ以外は計測値を示す。
胎土は土器中に含まれる鉱物等のうち、特徴的なものを記号で示した。

A-赤色粒子 B-白色粒子 C-長石
D-角閃石 E-石英 F-雲母
G-黒色粒子 H-白色針状物質
I-砂粒子 J-片岩 K-小礫

残存率は図示した器形に対する大まかな遺存程度を%で示した。

10. 本書に使用した地形図は、国土地理院発行の1/50000地形図、1/25000地形図、春日部市都市計画図を編集・使用した。
11. 本書に掲載した遺構番号は、原則として調査時のものを採用した。ただし調査時の土壌については、その一部を小竪穴状遺構と変更したが、番号は変更しなかった。変更内容は本文70頁の第19表に示した。

目 次

巻頭図版

序

例言

凡例

目次

I 発掘調査の概要	1
1. 発掘調査に至る経過	1
2. 発掘調査・報告書作成の経過	2
(1) 発掘調査	2
(2) 整理・報告書の作成	2
3. 発掘調査・報告書作成の組織	2
II 遺跡の立地と環境	3
1. 地理的環境	3
2. 歴史的環境	5
(1) 旧石器時代	5
(2) 縄文時代	5
(3) 弥生、古墳時代	7
(4) 奈良、平安時代以降	7
III 遺跡の概要	8

1. 浅間下遺跡の概要	8
2. 調査区の概要	10
3. 浅間下遺跡の基本順序	13
IV 遺構と遺物	14
1. 縄文時代の遺構と遺物	14
(1) 住居跡	14
(2) 灰跡	67
(3) 埋甕	68
(4) 小竪穴状遺構	69
(5) 土城	123
(6) ビット	129
(7) グリッド出土土器	130
(8) グリッド出土石器	134
2. 古代の遺構と遺物	137
(1) 住居跡	137
3. 中近世の遺構と遺物	138
(1) 遺物	138
V 調査のまとめ	139
写真図版	

挿 図 目 次

第1図 埼玉県の地形	3
第2図 遺跡周辺の地形区分	4
第3図 周辺の遺跡	6
第4図 浅間下遺跡の範囲と各調査区	9
第5図 第4次調査全体図	10
第6図 第4次調査A区遺構配置図	11
第7図 第4次調査B区遺構配置図	12
第8図 基本順序	13
第9図 縄文時代の遺構全体図	14
第10図 第1号住居跡	16
第11図 第1号住居跡遺物出土状況	17
第12図 第1号住居跡出土遺物 (1)	18
第13図 第1号住居跡出土遺物 (2)	19

第14図 第1号住居跡出土遺物 (3)	20
第15図 第1号住居跡出土遺物 (4)	21
第16図 第1号住居跡出土遺物 (5)	22
第17図 第1号住居跡出土遺物 (6)	23
第18図 第2号住居跡、遺物出土状況	24
第19図 第2号住居跡出土遺物	25
第20図 第1号、2号住居跡出土遺物 (1)	26
第21図 第1号、2号住居跡出土遺物 (2)	27
第22図 第3号住居跡、遺物出土状況	29
第23図 第3号住居跡出土遺物 (1)	30
第24図 第3号住居跡出土遺物 (2)	31
第25図 第3号住居跡出土遺物 (3)	32
第26図 第3号住居跡出土遺物 (4)	33

第27図	第3号住居跡出土遺物 (5)	34	第64図	縄文時代の小竪穴状遺構と土壌 (8)	78
第28図	第4号住居跡	35	第65図	縄文時代の小竪穴状遺構と土壌 (9)	79
第29図	第4号住居跡出土遺物 (1)	36	第66図	縄文時代の小竪穴状遺構と土壌 (10)	80
第30図	第4号住居跡出土遺物 (2)	37	第67図	小竪穴状遺構の出土遺物 (1)	82
第31図	第4号住居跡出土遺物 (3)	38	第68図	小竪穴状遺構の出土遺物 (2)	83
第32図	第4号住居跡出土遺物 (4)	39	第69図	小竪穴状遺構の出土遺物 (3)	84
第33図	第4号住居跡出土遺物 (5)	40	第70図	小竪穴状遺構の出土遺物 (4)	85
第34図	第5号住居跡	41	第71図	小竪穴状遺構の出土遺物 (5)	86
第35図	第5号住居跡出土遺物	42	第72図	小竪穴状遺構の出土遺物 (6)	87
第36図	第6号住居跡、遺物出土状況	43	第73図	小竪穴状遺構の出土遺物 (7)	88
第37図	第6号住居跡出土遺物 (1)	47	第74図	小竪穴状遺構の出土遺物 (8)	89
第38図	第6号住居跡出土遺物 (2)	48	第75図	小竪穴状遺構の出土遺物 (9)	90
第39図	第6号住居跡出土遺物 (3)	49	第76図	小竪穴状遺構の出土遺物 (10)	91
第40図	第6号住居跡出土遺物 (4)	50	第77図	小竪穴状遺構の出土遺物 (11)	92
第41図	第6号住居跡出土遺物 (5)	51	第78図	小竪穴状遺構の出土遺物 (12)	93
第42図	第6号住居跡出土遺物 (6)	52	第79図	小竪穴状遺構の出土遺物 (13)	94
第43図	第6号住居跡出土遺物 (7)	53	第80図	小竪穴状遺構の出土遺物 (14)	95
第44図	第6号住居跡出土遺物 (8)	54	第81図	小竪穴状遺構の出土遺物 (15)	96
第45図	第7号住居跡、遺物出土状況	55	第82図	小竪穴状遺構の出土遺物 (16)	97
第46図	第7号住居跡出土遺物 (1)	56	第83図	小竪穴状遺構の出土遺物 (17)	98
第47図	第7号住居跡出土遺物 (2)	57	第84図	小竪穴状遺構の出土遺物 (18)	99
第48図	第7号住居跡出土遺物 (3)	58	第85図	小竪穴状遺構の出土遺物 (19)	100
第49図	第7号住居跡出土遺物 (4)	60	第86図	小竪穴状遺構の出土遺物 (20)	101
第50図	第9号住居跡、遺物出土状況	61	第87図	小竪穴状遺構の出土遺物 (21)	102
第51図	第9号住居跡出土遺物 (1)	63	第88図	小竪穴状遺構の出土遺物 (22)	103
第52図	第9号住居跡出土遺物 (2)	64	第89図	小竪穴状遺構の出土遺物 (23)	104
第53図	第9号住居跡出土遺物 (3)	65	第90図	小竪穴状遺構の出土遺物 (24)	105
第54図	第9号住居跡出土遺物 (4)	66	第91図	小竪穴状遺構の出土遺物 (25)	106
第55図	第1、2号跡、出土遺物	67	第92図	小竪穴状遺構の出土遺物 (26)	107
第56図	第1号埋壺、出土遺物	68	第93図	小竪穴状遺構の出土遺物 (27)	108
第57図	縄文時代の小竪穴状遺構と土壌 (1)	71	第94図	小竪穴状遺構の出土遺物 (28)	109
第58図	縄文時代の小竪穴状遺構と土壌 (2)	72	第95図	小竪穴状遺構の出土遺物 (29)	110
第59図	縄文時代の小竪穴状遺構と土壌 (3)	73	第96図	小竪穴状遺構の出土遺物 (30)	111
第60図	縄文時代の小竪穴状遺構と土壌 (4)	74	第97図	小竪穴状遺構の出土遺物 (31)	112
第61図	縄文時代の小竪穴状遺構と土壌 (5)	75	第98図	小竪穴状遺構の出土遺物 (32)	121
第62図	縄文時代の小竪穴状遺構と土壌 (6)	76	第99図	小竪穴状遺構の出土遺物 (33)	122
第63図	縄文時代の小竪穴状遺構と土壌 (7)	77	第100図	土壌の出土遺物 (1)	124

	8	第3号住居跡1 (南東から)	2	第24号小竪穴状遺構 (東から)
図版3	1	第3号住居跡跡 (東から)	3	第25号小竪穴状遺構 (東から)
	2	第3号住居跡遺物出土状況 (東から)	4	第26、27号小竪穴状遺構 (東から)
	3	第3号住居跡遺物出土状況 (北から)	5	第28、29号小竪穴状遺構 (南東から)
	4	第4号住居跡 (南東から)	6	第30号小竪穴状遺構 (北から)
	5	第4号住居跡遺物出土状況	7	第30号小竪穴状遺構覆土遺物出土状況
	6	第5号住居跡、第4号小竪穴状遺構 (西から)	8	第30号小竪穴状遺構覆土遺物出土状況
	7	第6号住居跡、第19、20号土壌	図版8	1 第31号土壌遺物出土状況 (西から)
	8	第6号住居跡跡 (東から)	2	第32号土壌、44号小竪穴状遺構
図版4	1	第7号住居跡、第14、16号小竪穴状遺構	3	第33、34、43a号土壌 (北から)
	2	第8号住居跡 (南から)	4	第35号小竪穴状遺構 (南から)
	3	第8号住居跡カマド (南から)	5	第36、43b号小竪穴状遺構 (北西から)
	4	第8号住居跡貯蔵穴 (南から)	6	第37号小竪穴状遺構 (北西から)
	5	第9号住居跡 (南から)	7	第37号小竪穴状遺構遺物出土状況
	6	第1号土壌 (東から)	8	第38号小竪穴状遺構 (東から)
	7	第1号土壌遺物出土状況 (南東から)	図版9	1 第39、40号小竪穴状遺構 (北から)
	8	第2号土壌 (東から)	2	第39号小竪穴状遺構遺物出土状況
図版5	1	第3号小竪穴状遺構遺物出土状況	3	第41号小竪穴状遺構 (北西から)
	2	第4号小竪穴状遺構 (東から)	4	第48号小竪穴状遺構遺物出土状況
	3	第5号土壌 (東から)	5	第1号埋壺 (北西から)
	4	第6a、6b号小竪穴状遺構 (西から)	6	第1号埋壺遺物出土状況 (西から)
	5	第7、8号小竪穴状遺構 (西から)	7	第1号跡 (北から)
	6	第9号小竪穴状遺構 (北東から)	8	第1号跡跡体土器 (南東から)
	7	第10、11号小竪穴状遺構 (北東から)	図版10	1 第1号跡跡体土器 (南東から)
	8	第12号小竪穴状遺構 (南東から)	2	第1号跡跡体土器 (北から)
図版6	1	第13号小竪穴状遺構 (東から)	3	第1号跡跡体土器 (北から)
	2	第15号小竪穴状遺構 (東から)	4	第2号跡 (北西から)
	3	第15号小竪穴状遺構遺物出土状況	5	第2号跡跡体土器 (北西から)
	4	第17、18号小竪穴状遺構 (北西から)	6	第2号跡跡体土器 (北西から)
	5	第21号小竪穴状遺構 (東から)	7	第2号跡跡体土器 (北西から)
	6	第22号小竪穴状遺構 (北東から)	8	H-10グリッドピット検出状況
	7	第22号小竪穴状遺構ピット2遺物出土状況 (北東から)	図版11	1 第1号住居跡出土土器 (第12図1)
	8	第23号小竪穴状遺構 (北東から)	2	第1号住居跡出土土器 (第12図2)
図版7	1	第23号小竪穴状遺構遺物出土状況	3	第1号住居跡出土土器 (第12図3)
			4	第1号住居跡出土土器 (第12図4)
			5	第1、2号住居跡出土土器 (第20図1)

	6	第2号住居跡出土土器 (第19図1)	(第67図4)
	7	第1、2号住居跡出土土器 (第20図2)	11 第9号小豎穴状遺構出土土器 (第67図5)
	8	第1、2号住居跡出土土器 (第20図3)	12 第12号小豎穴状遺構出土土器 (第67図6)
	9	第1、2号住居跡出土土器 (第20図4)	13 第15号小豎穴状遺構出土土器 (第68図8)
	10	第3号住居跡出土土器 (第23図1)	図版14 1 第15号小豎穴状遺構出土土器 (第68図7)
	11	第3号住居跡出土土器 (第23図2)	2 第22号小豎穴状遺構出土土器 (第68図9)
	12	第4号住居跡出土土器 (第29図1)	3 第22号小豎穴状遺構出土土器 (第68図10)
	13	第4号住居跡出土土器 (第29図2)	4 第23号小豎穴状遺構出土土器 (第69図11)
図版12	14	第4号住居跡出土土器 (第29図4)	5 第23号小豎穴状遺構出土土器 (第69図12)
	1	第4号住居跡出土土器 (第29図3)	6 第23号小豎穴状遺構出土土器 (第69図13)
	2	第6号住居跡出土土器 (第37図1)	7 第24号小豎穴状遺構出土土器 (第69図14)
	3	第6号住居跡出土土器 (第37図2)	8 第26、27号小豎穴状遺構出土土器 (第70図16)
	4	第6号住居跡出土土器 (第37図5)	9 第25号小豎穴状遺構出土土器 (第69図15)
	5	第6号住居跡出土土器 (第37図3)	10 第26、27号小豎穴状遺構出土土器 (第70図17)
	6	第6号住居跡出土土器 (第37図4)	11 第28号小豎穴状遺構出土土器 (第70図18)
	7	第6号住居跡出土土器 (第38図6)	12 第30号小豎穴状遺構出土土器 (第70図20)
	8	第6号住居跡出土土器 (第38図7)	図版15 1 第30号小豎穴状遺構出土土器 (第71図21)
	9	第6号住居跡出土土器 (第38図8)	2 第30号小豎穴状遺構出土土器 (第71図22)
	10	第6号住居跡出土土器 (第38図9)	3 第35号小豎穴状遺構出土土器 (第71図23)
	11	第6号住居跡出土土器 (第38図10)	
図版13	12	第7号住居跡出土土器 (第46図1)	
	1	第7号住居跡出土土器 (第46図2)	
	2	第7号住居跡出土土器 (第46図3)	
	3	第7号住居跡出土土器 (第46図4)	
	4	第2号炉跡出土土器 (第55図2)	
	5	第1号炉跡出土土器 (第55図1)	
	6	第1号埋甕 (第56図1)	
	7	第3号小豎穴状遺構出土土器 (第67図1)	
	8	第6号小豎穴状遺構出土土器 (第67図2)	
	9	第7号小豎穴状遺構出土土器 (第67図3)	
	10	第8号小豎穴状遺構出土土器	

	4	第36、43号小豎穴状遺構出土土器 (第71図25)	図版19	2	第1号住居跡出土土器(4)(第14図)
	5	第36、43号小豎穴状遺構出土土器 (第71図24)		1	第1号住居跡出土土器(5)(第15図)
	6	第37号小豎穴状遺構出土土器 (第72図26)	図版20	2	第1号住居跡(第15~17図)、第2 号住居跡出土土器(第19図)
	7	第37、38号小豎穴状遺構出土土器 (第73図27)		1	第1、2号住居跡出土土器(1) (第20、21図)
	8	第44号小豎穴状遺構出土土器 (第73図30)	図版21	2	第1、2号住居跡出土土器(第21図)
	9	第39号小豎穴状遺構出土土器 (第73図28)	図版22	1	第3号住居跡出土土器(1)(第24図)
	10	第44号小豎穴状遺構出土土器 (第73図29)	図版23	2	第3号住居跡出土土器(2)(第24図)
	11	第30、43b、44号小豎穴状遺構、31~ 34、42、43a号土壇出土土器(第73図31)	図版24	1	第3号住居跡出土土器(3)(第25図)
図版16	12	第48号小豎穴状遺構(第74図33)		2	第3号住居跡出土土器(4)(第25図)
	1	第30、43b、44号小豎穴状遺構、31~ 34、42、43a号土壇出土土器(第73図32)	図版25	1	第3号住居跡出土土器(5)(第26図)
	2	第48号小豎穴状遺構出土土器 (第75図34)	図版26	2	第3号住居跡出土土器(6)(第26図)
	3	第1号土壇出土土器(第100図1)	図版27	1	第4号住居跡出土土器(1)(第30図)
	4	第1号土壇出土土器(第100図2)		2	第4号住居跡出土土器(2)(第30図)
	5	第1号土壇出土土器(第100図3)	図版28	1	第4号住居跡出土土器(3)(第31図)
	6	第1号土壇出土土器(第100図4)	図版29	2	第4号住居跡出土土器(4)(第31図)
	7	第2号土壇出土土器(第100図5)		1	第4号住居跡出土土器(5)(第32図)
	8	第2号土壇出土土器(第100図6)	図版30	2	第4号住居跡出土土器(6) (第32、33図)
	9	第2号土壇出土土器(第100図7)		1	第5号住居跡出土土器(第35図)
	10	第19号土壇出土土器(第101図8)	図版31	2	第6号住居跡出土土器(1)(第39図)
	11	第31号土壇出土土器(第101図9)		1	第6号住居跡出土土器(2)(第39図)
	12	第31号土壇出土土器(第101図10)	図版32	2	第6号住居跡出土土器(3)(第40図)
	13	グリッド出土土偶(第109図67)		1	第6号住居跡出土土器(4)(第40図)
	14	グリッド出土近世陶器 (第113図2、3)	図版33	2	第6号住居跡出土土器(5)(第41図)
	図版17	1	図版34	1	第6号住居跡出土土器(6)(第41図)
	2	第1号住居跡出土土器(1)(第13図)		2	第6号住居跡出土土器(7)(第42図)
	図版18	1	図版35	1	第6号住居跡出土土器(8)(第42図)
	2	第1号住居跡出土土器(2)(第13図)		2	第6号住居跡出土土器(9)(第43図)
	1	第1号住居跡出土土器(3)(第14図)		1	第6号住居跡出土土器(10)(第43図)
				2	第7号住居跡出土土器(1)(第47図)
				2	第7号住居跡出土土器(2)(第47図)
				1	第7号住居跡出土土器(3)(第48図)
				2	第7号住居跡出土土器(4)(第48図)
				1	第7号住居跡出土土器(5)(第49図)
				2	第7号住居跡出土土器(6)(第49図)
				1	第9号住居跡出土土器(1)(第51図)
				2	第9号住居跡出土土器(2)(第51図)

	2	第9号住居跡出土土器(2)(第51図)	図版46	1	第30号小竪穴状遺構出土土器
図版36	1	第9号住居跡出土土器(3)(第52図)			(第92図)
	2	第9号住居跡出土土器(4)(第52図)		2	第35~37、43号小竪穴状遺構出土土器
図版37	1	第9号住居跡出土土器(5)(第53図)			(第93図)
	2	第9号住居跡出土土器(6)(第53図)	図版47	1	第38、39号小竪穴状遺構出土土器
図版38	1	第3、6号小竪穴状遺構出土土器			(第94図)
		(第76図)		2	第40、41、43号小竪穴状遺構出土土器
	2	第7号小竪穴状遺構出土土器			(第95図)
		(第77図)	図版48	1	第44号小竪穴状遺構出土土器
図版39	1	第8号小竪穴状遺構出土土器			(第96図)
		(第78図)		2	第30、43b、44号小竪穴状遺構、31~
	2	第9号小竪穴状遺構出土土器			34、42、43a号土壇出土土器(第97図)
		(第79図)	図版49	1	第1号土壇出土土器(第102図)
図版40	1	第10、11号小竪穴状遺構出土土器		2	第2号土壇出土土器(第103図)
		(第80図)	図版50	1	第31、32、34、42号土壇出土土器
	2	第12、13号小竪穴状遺構出土土器			(第104図)
		(第81図)		2	グリッド出土土器(1)(第107図)
図版41	1	第14号小竪穴状遺構出土土器	図版51	1	グリッド出土土器(2)(第109図)
		(第82図)		2	第8号住居跡出土土器(第112図)
	2	第15号小竪穴状遺構出土土器		3	グリッド出土近世陶磁器(第113図)
		(第83図)	図版52	1	第1号住居跡出土土器(第17図163)
図版42	1	第15、16号小竪穴状遺構出土土器		2	第1号住居跡出土土器(第17図164)
		(第84図)		3	第1号住居跡出土土器(第17図165)
	2	第17、18号小竪穴状遺構出土土器		4	第1号住居跡出土土器(第17図167)
		(第85図)		5	第3号住居跡出土土器(第27図156)
図版43	1	第21号小竪穴状遺構出土土器		6	第3号住居跡出土土器(第27図157)
		(第86図)		7	第3号住居跡出土土器(第27図158)
	2	第21、22号小竪穴状遺構出土土器		8	第4号住居跡出土土器(第33図127)
		(第87図)		9	第4号住居跡出土土器(第33図128)
図版44	1	第22、23号小竪穴状遺構出土土器		10	第5号住居跡出土土器(第35図38)
		(第88図)		11	第6号住居跡出土土器(第44図189)
	2	第24、25号小竪穴状遺構出土土器		12	第6号住居跡出土土器(第44図190)
		(第89図)		13	第6号住居跡出土土器(第44図191)
図版45	1	第26、27号小竪穴状遺構出土土器		14	第6号住居跡出土土器(第44図192)
		(第90図)		15	第6号住居跡出土土器(第44図193)
	2	第28、29号小竪穴状遺構出土土器		16	第6号住居跡出土土器(第44図194)
		(第91図)		17	第6号住居跡出土土器(第44図195)

18	第6号住居跡出土石器 (第44図196)	16	第30～32、42～44号小竪穴状遺構出土石器 (第99図17)
19	第7号住居跡出土石器 (第49図120)	17	第24号小竪穴状遺構出土石器 (第99図18)
20	第7号住居跡出土石器 (第49図121)	18	第14号小竪穴状遺構出土石器 (第99図19)
21	第9号住居跡出土石器 (第54図129)	19	第11号小竪穴状遺構出土石器 (第99図20)
22	第9号住居跡出土石器 (第54図130)	20	ビット出土石器 (第105図1)
23	第9号住居跡出土石器 (第54図131)	21	ビット出土石器 (第105図2)
24	第9号住居跡出土石器 (第54図132)	22	グリッド出土石器 (第110図1)
図版53	1 第14号小竪穴状遺構出土石器 (第98図1)	23	グリッド出土石器 (第110図2)
	2 第38号小竪穴状遺構出土石器 (第98図2)	24	グリッド出土石器 (第110図3)
	3 第30号小竪穴状遺構出土石器 (第98図3)	図版54	1 グリッド出土石器 (第110図4)
	4 第9号小竪穴状遺構出土石器 (第98図4)		2 グリッド出土石器 (第110図5)
	5 第39号小竪穴状遺構出土石器 (第98図5)		3 グリッド出土石器 (第110図6)
	6 第8号小竪穴状遺構出土石器 (第98図6)		4 グリッド出土石器 (第110図7)
	7 第24号小竪穴状遺構出土石器 (第98図7)		5 グリッド出土石器 (第110図8)
	8 第28号小竪穴状遺構出土石器 (第98図9)		6 グリッド出土石器 (第110図9)
	9 第24号小竪穴状遺構出土石器 (第98図10)		7 グリッド出土石器 (第110図10)
	10 第24号小竪穴状遺構出土石器 (第98図11)		8 グリッド出土石器 (第110図11)
	11 第24号小竪穴状遺構出土石器 (第98図12)		9 グリッド出土石器 (第110図12)
	12 第44号小竪穴状遺構出土石器 (第98図13)		10 グリッド出土石器 (第110図13)
	13 第4号小竪穴状遺構出土石器 (第98図14)		11 グリッド出土石器 (第110図14)
	14 第30号小竪穴状遺構出土石器 (第99図15)		12 グリッド出土石器 (第110図15)
	15 第29号小竪穴状遺構出土石器 (第99図16)		13 グリッド出土石器 (第111図16)
			14 グリッド出土石器 (第111図17)
			15 グリッド出土石器 (第111図18)
			16 グリッド出土石器 (第111図19)
			17 グリッド出土石器 (第111図20)
			18 グリッド出土石器 (第111図21)
			19 グリッド出土石器 (第111図22)
			20 グリッド出土石器 (第111図23)
			21 グリッド出土石器 (第111図25)
			22 グリッド出土石器 (第111図26)
			23 グリッド出土石器 (第113図13)
			24 グリッド出土石器 (第113図14)

I 発掘調査の概要

1. 発掘調査に至る経過

国土交通省関東地方整備局江戸川河川事務所（以下、江戸川河川事務所）は、幸手市域から杉戸町域にかけての江戸川右岸地域において、江戸川堤防強化対策事業を実施している。

埼玉県教育庁市町村支援部生涯学習文化財課では、このような施策の推進に伴う文化財の保護について、従前より関係機関との事前協議を重ね、調整を図ってきたところである。

江戸川堤防強化対策事業については、工事に先立ち、江戸川河川事務所長から平成20年3月27日付け江沼第65号で、埋蔵文化財の所在の有無及び取り扱いについて、埼玉県教育委員会教育長あて照会があった。

これに対して県教育委員会は、工事計画の進捗に応じて、平成21年11月24・25日及び平成22年1月25日に、遺跡の所在及び範囲確認のための試掘調査を実施した。その結果、埋蔵文化財の所在が確認されたことから、平成22年3月29日付け教生文第2408号で、埋蔵文化財の有無及び取り扱いについて、以下のとおり回答を行った。

1 埋蔵文化財の所在

名称	種別	時代	所在地
浅間下遺跡 (No.91-005)	貝塚 集落跡	縄文 奈良	春日部市西親野 井地内

2 取り扱い

工事計画上やむを得ず現状を変更する場合には、記録保存のための発掘調査を実施してください。

その後、江戸川河川事務所と県教育委員会はその取り扱いについて協議を重ねたが、現状保存が困難であることから、記録保存の措置を講ずることになった。

江戸川河川事務所長からの文化財保護法第94条第1項の規定に基づく発掘通知に対し、県教育委員会教育長から勧告を行った。財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団（当時）理事長からの法第92条第1項の規定に基づく発掘調査届に対する県教育委員会教育長からの指示通知は次のとおりである。

発掘調査届に対する指示通知

平成23年12月26日付け 教生文第2-71号
(生涯学習文化財課)

2. 発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

浅間下遺跡は、平成23年度に発掘調査を行った。平成24年1月4日から平成24年3月31日まで、調査面積は2,006㎡である。

調査の経過は以下の通りである。

平成24年1月上旬に発掘調査事務所を設置し、1月中旬に重機による表土の掘削を実施し、同時に人力による遺構の確認作業に入った。2月上旬からは遺構精査を行い、2月中旬からは記録等の作成を行った。

3月上旬には空中写真撮影を行い、3月下旬には作業を終了した。

(2) 整理・報告書の作成

整理報告書作成作業は、平成27年4月9日から、平成27年12月31日まで実施した。

4月中旬から出土遺物の水洗、注記を行い、順次、接合、復元作業に着手した。接合、復元が終了した遺物は5月中旬から順次抽出を行い、拓本、

実測作業を開始した。遺物の機械実測には3スペース、オルソイメージャーなどを利用した。6月中旬からは遺物実測図のトレースを開始し、8月上旬には遺物版下図の作成に着手した。

遺構図の整理は、遺物の作業と並行して4月中旬から行った。図面照合と修正を経て第二原図を作成し、6月初旬からは画像ソフトを用いて遺構図のトレース、土層説明等のデータを組み込んで編集作業を実施し、遺構挿入図の版下を作成した。

これらの作業と並行して、9月からは原稿執筆を開始した。11月中旬には、遺物写真撮影、遺構写真図版作成などを実施した。12月中旬には印刷起案を作成し、12月下旬に印刷業者に入稿し、整理作業の終了した遺構図、遺物実測図、写真データ、遺物などの整理仮収納を行った。

報告書は、1月上旬から2月上旬にかけて3回の校正を経て印刷を行い、2月末に事業団報告書第418集「浅間下遺跡」として刊行した。

3. 発掘調査・報告書作成の組織

平成23年度（発掘調査）

理 事 長	藤 野 龍 宏
常務理事兼総務部長	根 本 勝
総務部	
総 務 部 副 部 長	金 子 直 行
総 務 課 長	矢 島 将 和

調査部

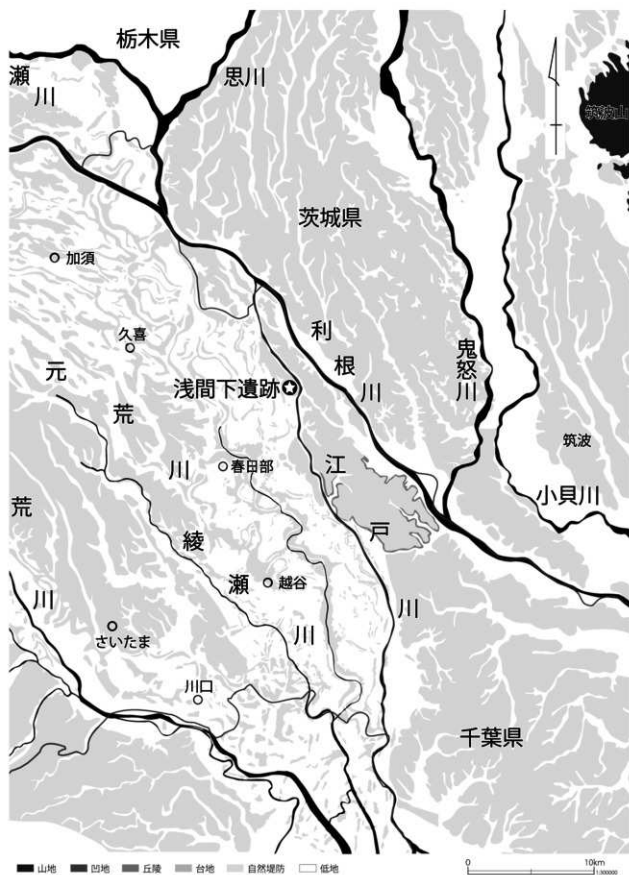
調 査 部 長	小 野 美 代 子
調 査 部 副 部 長	剣 持 和 夫
主 幹 兼 調 査 第 二 課 長	瀧 瀬 芳 之
主 査	岩 瀬 譲

平成27年度（報告書作成）

理 事 長	樋 田 明 男
常務理事兼総務部長	木 村 博 昭
総務部	
総 務 部 副 部 長	瀧 瀬 芳 之
総 務 課 長	安 田 孝 行

調査部

調 査 部 長	金 子 直 行
調 査 部 副 部 長	細 田 勝
調査監兼整理第一課長	黒 坂 禎 二
主 査	大 屋 道 則



第2図 遺跡周辺の地形区分

2. 歴史的環境

浅間下遺跡(第2図、第3図1)の位置する宝珠花支台周辺では、台地上を中心として、旧石器時代から、縄文時代に至る数多くの遺跡が濃密に分布している。

(1) 旧石器時代

浅間下遺跡の周辺地域では、旧石器時代の遺物はさほど多くは見つかっていない。ただし、地理的には下総台地の縁辺部が含まれているため、台地上にはいくらかの遺物が見られる。

学史上著名な春日部市の米島貝塚で細石器などが出土している。また、同市の風早遺跡(田中1979)では、局部磨製石斧や細石器が出土している。千葉県域では、野田市に所在する岡田山ノ内遺跡(52)や同市に所在する下根貝塚(65)から、槍先形尖頭器などが見つかっている。

(2) 縄文時代

縄文時代草創期の遺跡は極めて少なく、やや遠方になるが、宮代町前原遺跡での微隆起線文土器や表裏縄文土器の出土があげられる。

縄文時代早期でも遺跡はさほど増加せず、わずかに、鳥通遺跡(20)、向代遺跡(21)、砂南南遺跡(64)などがあげられるに過ぎない。低地に面した台地の縁辺部という環境は、縄文時代草創期、早期の生活にはあまり好適ではなかったと考えられるが、近年の調査では、幸手市植野地北遺跡(2)で燃糸文期から条痕文期の遺構、遺物が比較的良好に検出されており、注目される。

縄文時代前期になると、海進の影響によって居住環境は一変する。縄文海進最高潮期には、篠山貝塚の存在により、栃木市藤岡町付近まで海が進入したことが想定されており、中川低地が広く奥東京湾に取り込まれ、これを挟んで大宮台地と下総台地が地形的に対峙し、台地の縁辺部が浅海性の海洋資源に依存した生活に最適の場となっていたと考えられる。

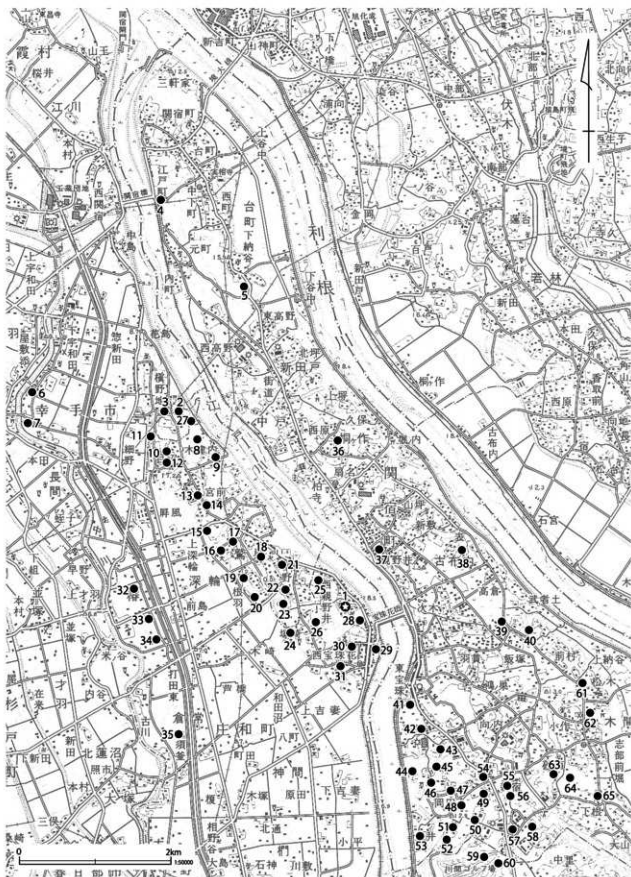
関山期から黒浜期にかけての地点貝塚は数多く

存在しており、茨城県坂東市(旧岩井市)下根貝塚(65)、埼玉県杉戸町鷺巣貝塚、同町鷺巣前原遺跡(18)、春日部市貝の内貝塚(30)、同市宮前遺跡、同市原遺跡、同市風早遺跡、同市吉岡遺跡、同市尾ヶ崎遺跡、千葉県野田市(旧関宿町)飯塚貝塚(40)、同市横の内遺跡、同市東金野井貝塚などが挙げられる。

これに対して、海退に転じた前期後半では、遺跡数が激減する。貝塚の検出例が少ないことから、海退に伴って海洋資源の利用が困難になったための影響が顕著に表れたと観ることができる。近年調査された植野地原遺跡(27)では、諸磯b式並行期の住居跡が4軒検出されており注目される。この時期は浮島系統や興津系統などの貝殻文で施文された東関東系土器の出土傾向が強くなる。

中期前半でもこの傾向は継続するが、中期後半の加曾利E式期には、一転して増加傾向に転じる。加曾利E I式期やE II式期の大規模な遺跡は、丘陵地帯などの比較的奥まった地域に見られるが、加曾利E III式に至ると、台地上でも低地に面した標高の低い地域への進出が顕著となる。浅間下遺跡でも、加曾利E III式期の遺構が主体を占めており、この傾向が確認できる。

縄文時代後晩期では、再び遺跡数は激減する。春日部市神明貝塚(25)、同市浅間下遺跡(1)、千葉県野田市(旧関宿町)内町貝塚(4)、同市岡田山ノ内貝塚(51)、同市岡田山ノ内遺跡(52)、同市中新宿C遺跡(55)、同市香取原貝塚(60)、同市木間ヶ瀬中学校裏遺跡(61)、同市砂南南遺跡(64)、茨城県坂東市(旧岩井市)福寿院南貝塚(53)、同市下根貝塚(65)などが挙げられる。低地内に存在している微高地については、沖積作用によって比較的深く埋没しているため調査事例が少なく、今後、遺跡数が増加する可能性も考えられる。



第3図 周辺の遺跡

第1表 周辺の遺跡一覧表(第3回)

No.	遺跡名	時期	No.	遺跡名	時期
1	浅間下遺跡	縄文(前・中・後)・奈良	33	中橋遺跡	古墳
2	植野地北遺跡	古墳	34	下橋遺跡	古墳・奈良・平安
3	植野地西遺跡	古墳	35	須釜遺跡	弥生・奈良・平安
4	内町貝塚	縄文(中・晩)	36	桐ヶ作貝塚	縄文(前・中)
5	飯塚貝塚	縄文(前・中)・古墳(前)	37	親野井古墳	古墳(後)
6	幸手市№17	奈良・平安・近世	38	古布内貝塚	縄文(前・中)
7	幸手市№18	奈良・平安・近世	39	武者上貝塚	貝塚
8	向山遺跡	縄文(前・中)	40	飯塚貝塚・木所前遺跡	縄文(前・中)・古墳(前)
9	本沼内貝塚	縄文(前・中)・奈良	41	相耕地B遺跡	縄文(中)
10	目沼古墳群	古墳(前・後)	42	相耕地A遺跡	縄文(中)
11	目沼古墳群14号墳	古墳(後)	43	下春日遺跡	縄文(中)
12	目沼古墳群15号墳	古墳(後)	44	相田B遺跡	縄文(中)
13	目沼第1貝塚・宮前遺跡	縄文(前)・平安	45	相田A遺跡	縄文(中)
14	宮前原遺跡	縄文(前・中)	46	八幡前遺跡	縄文(中)・奈良・平安
15	登戸遺跡	縄文(前・中)	47	岡田上原坪遺跡	縄文(中・後)
16	登戸南遺跡	縄文(前・中)・古墳(前・後)	48	西橋遺跡	縄文(中)
17	中原遺跡	縄文(前)・奈良	49	下橋遺跡	縄文(中)
18	鷺巣原前遺跡	縄文(前)	50	上橋遺跡	縄文(中)
19	宮の腰遺跡	縄文(前)・古墳(後)	51	岡田山ノ内貝塚	縄文時代(前・中・後)
20	島通遺跡	縄文(早・中)	52	岡田山ノ内遺跡	旧石器・縄文(中・後)
21	向台遺跡	縄文(早・前)・奈良	53	福寿院南貝塚	縄文(中・後)・奈良・平安
22	湊遺跡	縄文(前・中)	54	新宿貝塚	縄文(前・中)
23	本野川古墳群	古墳(後)	55	中新宿C遺跡	縄文(前・中・後)
24	野添北遺跡	縄文(前)	56	中新宿A遺跡	縄文・奈良・平安
25	神明貝塚	縄文(前・後)	57	下新宿B遺跡	縄文(中)・奈良・平安
26	塚崎遺跡	縄文(前)	58	下新宿A遺跡	縄文(中)
27	植野地原遺跡	縄文(前・中・後)・奈良	59	香取原古墳群	古墳
28	天神前遺跡	縄文(前)・古墳(後)	60	香取原貝塚	縄文(後)
29	町通中遺跡	縄文(前・中)	61	木間ヶ瀬中学校裏遺跡	縄文(中・後)
30	貝の内遺跡	縄文(前・中)・古墳(後)・奈良・平安	62	松の本遺跡	縄文(前・中)
31	陣屋遺跡	縄文(前・中)・古墳(後)・奈良・平安	63	砂東遺跡	縄文
32	上橋遺跡	古墳・奈良・平安	64	砂南遺跡	縄文(早・前・中・後)
			65	下根貝塚	旧石器・縄文(中・後)

(3) 弥生、古墳時代

弥生時代も確認されている遺跡は少ないが、春日部市須釜遺跡(35)の中期中葉の再葬墓など、中川低地に存在する自然堤防の微高地上には、遺跡の存在が明らかとなりつつある。したがって、中川低地でも大規模河川に比較的近い微高地上では、縄文時代後晩期同様に、今後の調査の進展によって遺跡数が増加すると考えられる。

古墳時代では、前期、中期、後期と数多くの遺跡が中川低地の自然堤防上にみられるようになる。弥生時代には、大規模河川の縁辺部で水を制御する技術はまだ獲得されていないと考えられるが、古墳時代を通じて土木技術が大きく進歩し、低地部へ進出するようになる。

古墳時代前期では、ある程度の土木、治水技術によって、大規模河川周辺でも微高地を中心とした畑作が可能な状況にあり、古墳時代後期に至っ

ては、大規模河川周辺での稲作も可能になったと考えられる。杉戸町の豊明神社古墳や目沼古墳群、本野川古墳群などの古墳も周辺地域の隆盛と共に築造されるようになる。この時期では、台地上の集落と低地に進出した集落との関連性が興味深い。

(4) 奈良、平安時代以降

奈良、平安時代になると更に技術は進歩し、一人当たりの可耕地面積も飛躍的に増加するので、相対的に集落数は減少し、散在するようになる。

浅間下遺跡では、今回の調査で平安時代の集落が初めて検出されている。

中近世の景観は、現在同様に中川低地の自然堤防上に点々と住居が見られるものであったと考えられる。17世紀の江戸川開削に関連した痕跡も、治水史、交通史、開発史の観点から、今後、検討される必要があろう。特に低地の開発史に関しては、古墳時代から近年まで不明な点が多い。

Ⅲ 遺跡の概要

1. 浅間下遺跡の概要

江戸川的首都圏氾濫区域域防強化対策（幸手市外）事業地内に所在する浅間下遺跡の発掘調査は、平成23年度に当事業団が実施した。

本遺跡は、これまで3回にわたり、旧庄和町（現春日部市）によって発掘調査が実施されており、縄文時代早期の土器群、縄文時代中期から後期にかけての時代を中心とした竪穴住居跡、中、近世の土壌、溝跡、縄文時代から中、近世の遺物包含層などが検出されている。

第1次調査は、1986年9月から11月にかけて、県道西宝珠花屏風線建設に伴う事前調査として、庄和町浅間下遺跡調査会によって遺跡の北西部分で実施された。調査はA～C区の三地点である（第4図）。

A区で検出された遺構は、中、近世の土壌17基、溝状遺構2条である。陶磁器類が出土した。また、調査区の北西部では近世に貝塚から掘削され二次的に集積されたヤマトシジミの貝層が検出された。包含層からは、縄文時代中期から後期の土器片、石器、中、近世の陶磁器類が出土した。

B区で検出された遺構は、称名寺式期から堀之内式期の住居跡が3軒、時期不詳の溝状遺構が6条、近世の煉瓦製肥溜が1基、縄文時代中期から後期にかけての包含層などである。

C区で検出された遺構は、時期不詳の土壌1基、ビット群、溝状遺構2条、縄文時代中期から後期

の土器と近世陶磁器を含む包含層などである。

第2次調査は、1987年8月から9月にかけて、第1次調査と同様に県道西宝珠花屏風線建設に伴う事前調査として、庄和町浅間下遺跡調査会によって遺跡の北西部分で実施された。第1次調査地点から500m南側であり、調査地点はA、Bの二地点である。

A区で検出された遺構は、加曽利EⅢ式期の住居跡2軒、時期不詳の土壌2基、中、近世の溝状遺構1条、縄文時代中期と中、近世の陶磁器類を含む包含層などである。

B区で検出された遺構は、加曽利EⅢ式期の住居跡1軒、時期不詳の土壌9基、時期不詳と中、近世の溝状遺構3条、縄文土器を出土するビット群、縄文時代中期の土器と中、近世陶磁器が含まれる包含層などである。

第3次調査は、1989年5月に個人の宅地造成に伴う事前調査として、庄和町教育委員会によって遺跡範囲の南端部分で実施された。

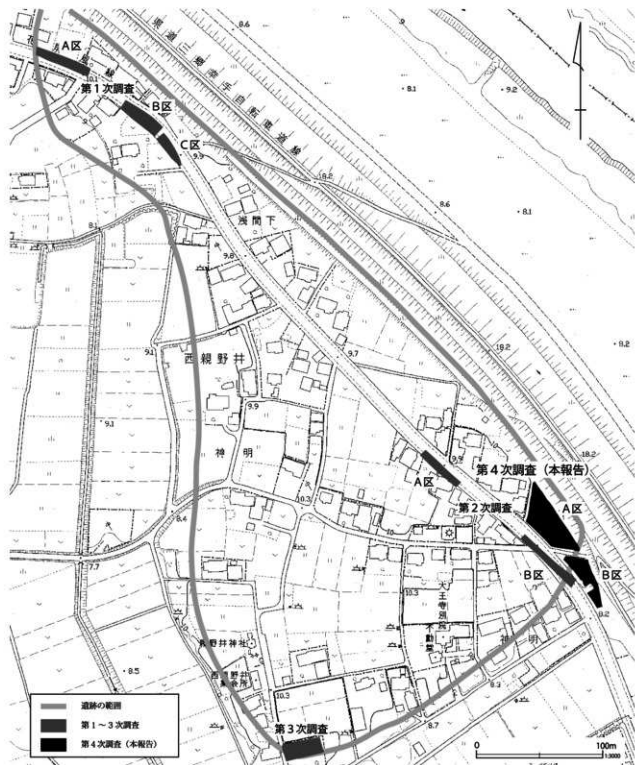
遺構は、溝跡1条と包含層が検出された。溝跡は出土遺物が少なかったため、時期不詳であった。包含層からは、縄文時代早期の燃糸文土器、前期前半の黒浜式、前期後半の諸磯式と浮島式、前期末から中期初頭の土器群、中期の阿玉台式、勝坂式末から加曽利E式、後期の堀之内式、加曽利B式などが検出され、近世の泥メンコも出土した。

第2表 浅間下遺跡の調査履歴（第4図）

次数	第1次	第2次	第3次	第4次
主体	調査会	調査会	庄和町教委	埋文
年月	1986年9～11月	1987年8～9月	1989年5月	2012年1～3月
地点	第1地点A区、B区、C区	第2地点A区、B区	第3地点	A区、B区
特徴	縄文時代後期住居跡、縄文中期～後期包含層、中、近世土壌、溝状遺構、ビット群、二次的に集積した貝層、煉瓦製肥溜縄文時代中期、後期土器、石器、中、近世陶磁器	縄文時代中期住居跡、縄文時代ビット群、縄文時代～中、近世包含層、中、近世溝状遺構、時期不詳土壌、縄文時代中期～後期土器、中、近世陶磁器	時期不詳溝状包含層、縄文早期、前期、中期、後期土器、近世泥メンコ	縄文時代中期住居跡、か跡、埋文、小型穴状遺構、土壌、ビット、包含層、縄文時代中期土器、平安時代住居跡、土器、須恵器

第4次調査は、2012年1月から3月にかけて、首都圏氾濫区域堤防強化対策事業に伴う事前調査として、当事業団によって実施された。調査地点はA区、B区の二地点である。

検出された遺構は、縄文時代中期の竪穴住居跡8軒、炉跡2基、埋甕1基、小竪穴状遺構37基、土壇13基、ピット18基、縄文中期土器が含まれる包含層、平安時代の住居跡1軒などである。



第4図 浅間下道路の範囲と各調査区

2. 調査区の概要

今回の第4次調査は、浅間下遺跡の範囲中で、堤防強化対策事業に伴う、春日部市西親野井字浅間下149-1番地他を対象としたものである。

調査対象区域の中央付近には、東西方向に生活道路が所在しているため、これを挟んで北側をA区、南側をB区とし、それぞれを調査した。

調査地点は台地の縁辺部にあたり、調査区の南側には谷が入り組んでいる。

旧石器時代の遺物は検出できなかった。

縄文時代中期の遺構は、調査区北側の標高が高い部分を中心に、環状に分布している。

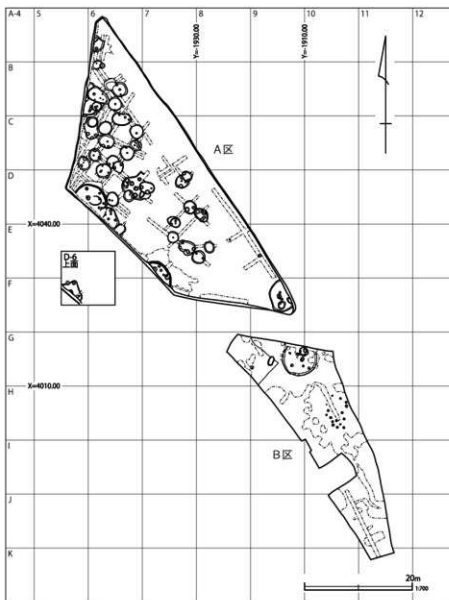
竪穴住居跡は、8軒検出した。また、単独の炉跡を2基、埋甕を1基、小竪穴状遺構を37基、土壇を13基検出した。小竪穴状遺構の中には、底面付近に土器片を敷き詰められたものも見られる。

また、調査区の上からは、平安時代の住居跡を検出した。平安時代の住居跡は、旧庄和町による第1次から第3次までの調査と、今回の当事業団による第4次調査の全てを含め、浅間下遺跡では初めての検出例である。

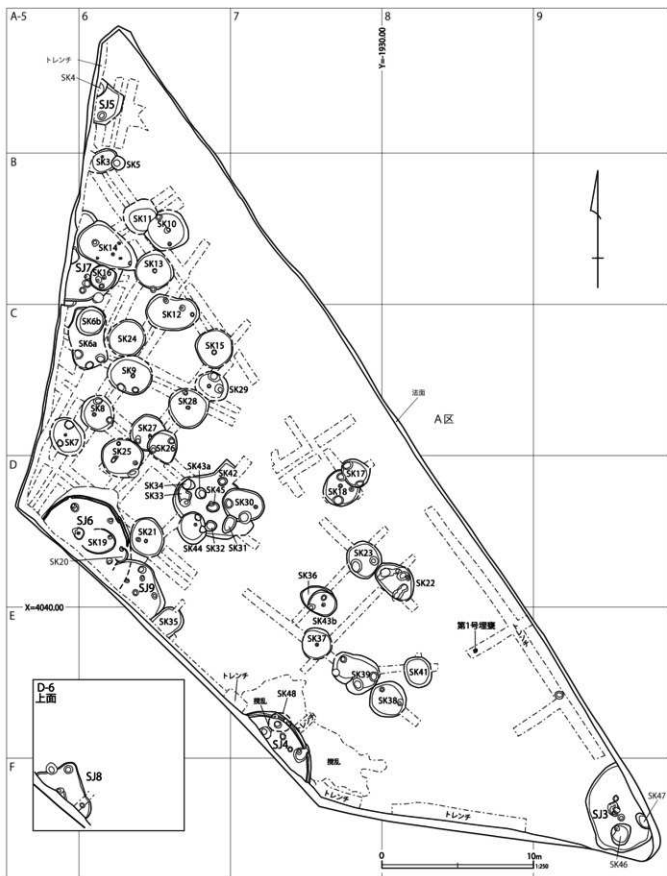
調査区の南側からは、各時期を通して遺構は検出されなかった。

今回の第4次調査に際しては、基本土層第Ⅱ～Ⅲ層に縄文土器が比較的

多く含まれていたため、これより上層の表土層を重機によって掘削し、この第Ⅱ～Ⅲ層を露出させて、当該土層の上面で遺構を確認しようと試みた。しかし、地山と覆土の境界が不明瞭であり、遺構を明確に確認することが困難であったため、必要に応じてサブトレンチを設定、掘削し、この壁面や底面で大部分の遺構を確認した。



第5図 第4次調査全体図



第6図 第4次調査A区遺構配置図



3. 浅間下遺跡の基本層序

浅間下遺跡の基本土層は、大きく分けて三つの部分に分かれている。関連した図面を、第8図に示した。

最上位の地表面直下には、表土層が見られる。これをⅠ層とした。

また、地表面から60～160cm程度でローム層となるが、このローム層をⅣ層とした。

Ⅰ層とⅣ層の間には黒褐色の土層が認められるが、この層は上位がやや暗く、下位がやや明るい傾向が見られた。これが、概ね縄文時代から中世までに累積した表土である。

ある時期の表土層は、その上を直後の時代の表土層で覆われるが、多くの場合には人的な活動によって地表付近の土層は攪乱されるので、攪乱を

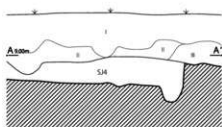
受けることなく、ある特定年代の表土層が遺存することは希である。このような理由によって、約1万年以上の年代幅を持つ表土層の累積は、細かい年代に分類することが困難となっている。

浅間下遺跡でも、既述したように上下二層に大別できる程度であった。上位の部分Ⅱ層、下位の部分をⅢ層とした。このⅡ層とⅢ層には、縄文時代から中世、近世までの遺物が含まれている。

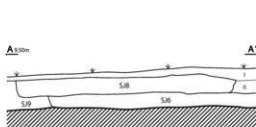
多くの地点ではⅡ層とⅢ層は分離できるが、一部には明確に分離できない地点もあった。

なお、第4号住居跡の土層観察所見によれば、縄文時代中期後葉加曾利EⅠ式期の第4号住居跡の覆土の上に、基本土層第Ⅱ層、第Ⅲ層の堆積が認められる。

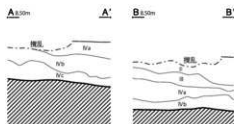
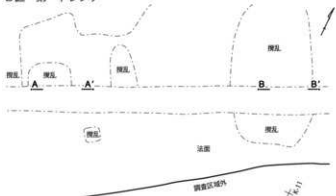
SJ4



SJ6



B区 第一トレンチ



- I 黒色土 表土 部分的に攪乱入る しまりなし 粘性弱
- II 黒褐色土 ローム粒子、焼土粒子まばらに少量 しまり、粘性弱
- III 暗褐色土 ローム粒子、焼土粒子まばらに少量 しまり、粘性弱
- IV 黄褐色土 ローム層
- IVa 褐色土 ローム層
- IVb 黒褐色土 赤色スコリアか(黒色帯)
- IVc 褐色土 ローム層



第8図 基本層序

IV 遺構と遺物

1. 縄文時代の遺構と遺物

縄文時代の遺構は、竪穴住居跡8軒、小竪穴状遺構37基、土壇13基、灰跡2基、埋甕1基、ピット18基である。

住居跡は、C-9グリッドを中心として、環状に分布していると想定される。また環内の西寄りに、住居跡と重複しながら、小竪穴状遺構が密集する傾向が見られる。

H-10グリッドには、ピットが集中している。覆土中に石器を含むことから縄文時代中期の住居跡の可能性も考えられるが、明確に確定することはできなかった。

(1) 住居跡

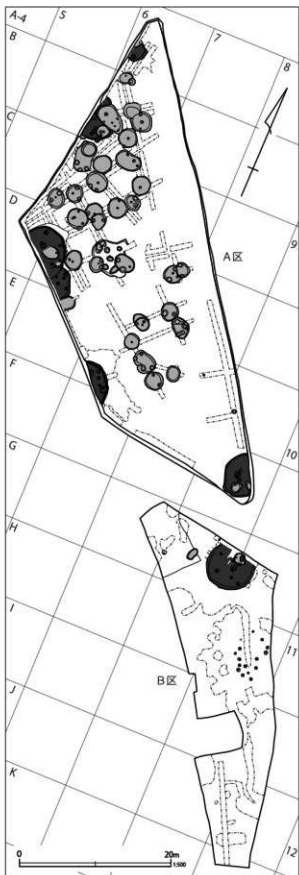
浅間下遺跡で検出された縄文時代の竪穴住居跡は8軒である。時期不明の1軒を除き、他は全て中期後半に属する。遺構への帰属が不明瞭な遺物も、同様な時期的傾向を示す。

時期の詳細は、加曽利EⅠ式期6軒（第1号、2号、4号、6号、7号、9号住居跡）、加曽利EⅢ式期1軒（第3号住居跡）、不明1軒（第5号住居跡）の計8軒となっている。

この8軒の住居跡の中で完掘できたものはなく、いずれも調査区の境界付近で検出しており、全て調査区域外に未調査部分が残存している。

その中でも、第1号住居跡は遺構の大部分が調査区内に所在し、調査区外にかかる部分はわずかに1割程度である。第2号住居跡は、遺存状態が悪く土壇とも重複しており、わずかに灰の一部を検出したのみである。

なお、灰跡を2基検出しており、覆土が削平された住居跡の可能性も考えられるが、いずれも周辺部分に柱穴と考えられる痕跡が見られなかったため、住居跡とは判断せずに屋外の灰として取り扱った。



第9図 縄文時代の遺構全体図

第1号住居跡（第10、11図）

第1号住居跡はB区北側中央のG-9、10グリッドで検出した。

他住居跡との関係は、第2号住居跡と重複し、これを壊していた。他遺構との関係は、第2号土塀と重複し、これを壊していた。

覆土にはローム粒子が大量に含まれていた。概ね自然堆積と考えられる。

平面形態は円形と推定した。

規模は、主軸長推定5.0m、副軸長推定6.3m、深さ約30cm、主軸方位はN-10°Eである。

跡は、住居跡の中央やや東よりで検出し、楕円形で0.9m×0.6mで、深さ約20cmであった。炉には、第12図1の炉体土器が残されていた。

床面からは、7本のピットを検出し、この中で、P1～P5が柱穴と考えられる。

時期は、炉体土器から縄文時代中期後葉の加曽利EⅠ式期である。

第12図～17図は出土した遺物である。

第12図1～4は、器形が復元できた土器である。

1は、炉体土器として使用された深鉢形土器である。胴上部を埋設したものと考えられるが、口縁部は失われている。キャリバー形であるが、胴部はずん胴状になっている。口縁と胴部は隆帯で区画している。口縁部文様帯も隆帯で区画していると考えられ、区画内には沈線で渦卷文などを施文している。胴部は無文で縦方向にミガキ状の調整を施している。地文は然りが緩く、節が明瞭でないが単節L Rの縄文である。地文は、口縁部区画内と隆帯上に施文している。

2は深鉢形土器の口縁から胴上部である。バケツ状の器形で口縁部は狭い無文帯となっている。胴部とは幅広い沈線を一本巡らせて区画している。口唇部はつまみ上げて整形され、口縁部には指頭状の痕跡が認められる。また、口縁部には楕円状の貼付文を施している。胴部は地文のみを施し、節の大きな単節L Rの縄文を縦方向に施している。

地文施文後に、器面を縦方向にナデている。推定口径は23cmである。

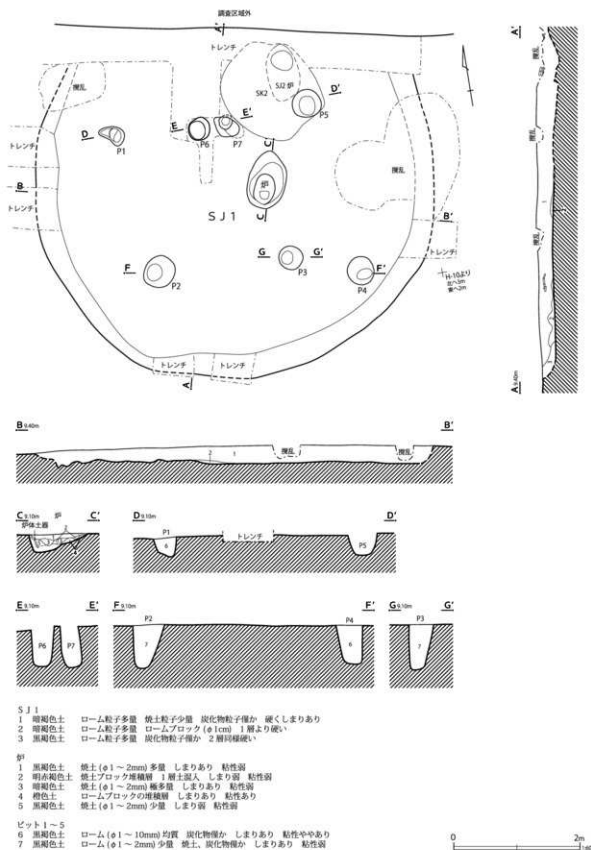
3は深鉢形土器で、口縁部を欠損している。キャリバー形深鉢の胴部分である。胴部には沈線を2本1組で垂下させる懸垂文と鋸歯状の蛇行懸垂文を交互に3単位ずつ計6単位施文している。口縁部との境界となる沈線の一部が残存している。地文は撚糸文Lで、斜方向に細かく施文している。底部の中央は孔があいている。底径は8cmである。

4は浅鉢形土器の胴下部から底部が残存している。単節R Lの縄文を地文として施文している。地文は斜め方向に施文し、条が縦方向になるようにしている。底部には網代痕が残存している。底径は8cmである。

第13図5～61、第14図62～107、第15図108～150、第16図151～156は出土した土器破片である。

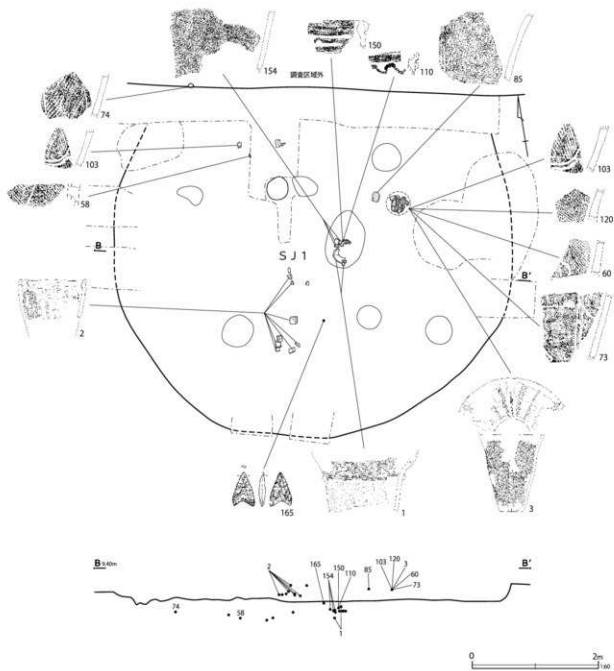
5～12は、阿玉台系や勝坂系と阿玉台系の折衷的な深鉢形土器の破片である。13、14は中峠系の深鉢形土器である。口唇下は舌状の張り出し部分を持っている。15～24は勝坂系の深鉢形土器である。15～22は隆帯上に刻みを施文している。24は隆帯上に縄文を施文している。

25～89、105はキャリバー形の深鉢形土器の破片である。25～52は口縁部の破片である。25、26は、口唇直下に隆帯を貼付する。27～36は口唇部直下に沈線を巡らせ、その下に隆帯を巡らせて文様帯を区画している。27、33は隆帯で、剣先状の文様を施文している。37～42、44は新しい様相を持っているもので、口唇部直下に扁平な隆帯を貼付し、そこからつなげて口縁部文様を施文している。地文は単節R Lが大多数を占めている。30、33、42、46、48、49、52が単節L Rの縄文で、他は単節L Rの縄文を地文としている。53～57は頸部の区画が残る頸部から胴部の破片で、53～56は隆帯で、57は沈線で区画している。地文として53は無節R、54、55は単節R L、56、57は単節L Rの縄文を施文している。



第3表 第1号住居跡ピット一覧表(第10図)

名称	長径/cm	深さ/cm	名称	長径/cm	深さ/cm	名称	長径/cm	深さ/cm
P1	42	30	P2	50	58	P3	42	72
P4	45	61	P5	45	32	P6	36	58
P7	43	65						

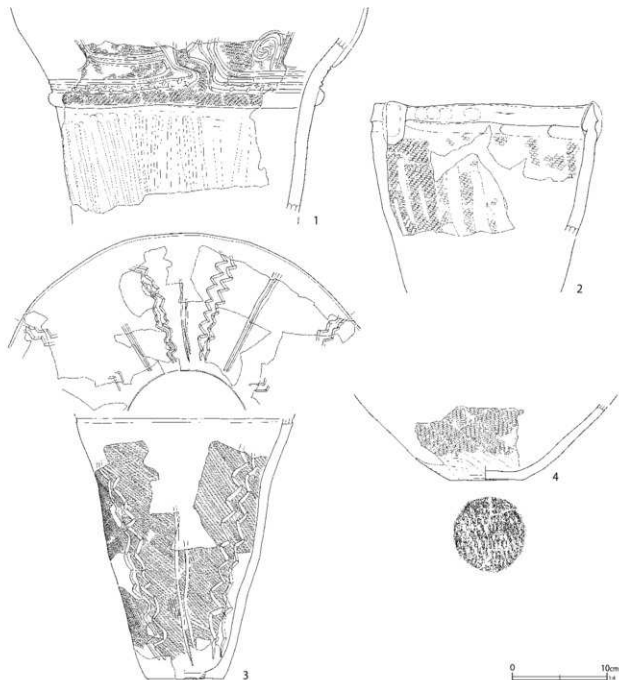


第11図 第1号住居跡遺物出土状況

58～89、105は胴部破片である。59は隆帯の懸垂文を施文している。105は沈線の渦巻文を施文している。他はいずれも沈線で垂下する懸垂文や、蛇行懸垂文を施文している。73、76は同一個体である。85～87、89は懸垂文間を磨り消す、磨消懸垂文である。58、60、61、73、76、88の地文は撚糸文Lで、62、79は撚糸文Rである。78の地文は無節L

である。80、105の地文は単節LRの縄文である。他の土器片の地文はすべて単節RLの縄文である。

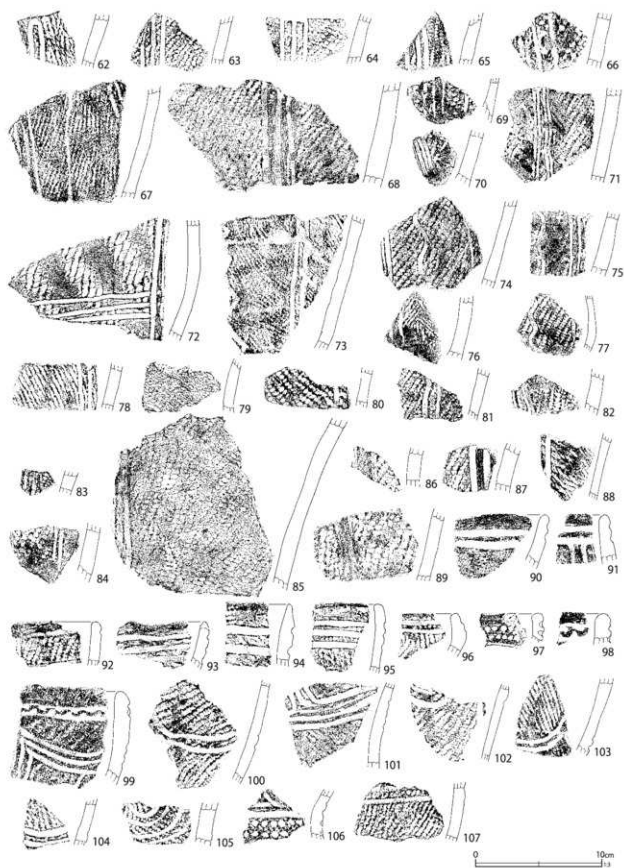
90～95は、口縁から直線的に底部に至るバケツ状の器形の深鉢形土器の口縁部破片である。いずれも狭い無文の口縁部を持ち、沈線を巡らせて胴部と区画している。91は胴部に垂下させる懸垂文を施文している。地文として92は単節RLの縄文



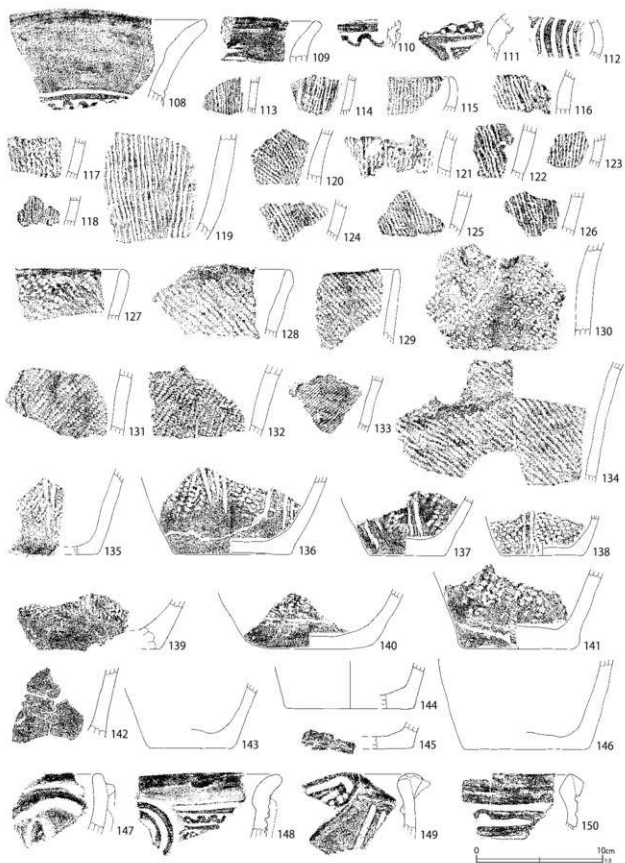
第12図 第1号住居跡出土遺物(1)



第13图 第1号住居跡出土遺物(2)



第14图 第1号住居跡出土遺物(3)



第15图 第1号住居跡出土遺物(4)

を、93、94は単節L Rの縄文を、95は撚糸文Rを施文している。

96～104、106、107は連弧文系の深鉢形土器の破片である。96～99は口縁部の破片である。100～104、106、107は頸部から胴部の破片である。地文は96、99、107が単節R Lの縄文を、100、102は0段多条R Lの縄文を、103は0段多条L Rの縄文を、104は撚糸文Rを施文している。

108～111は外反する無文の口縁部を持つ器形の深鉢形土器である。口縁部から頸部の破片である。108、110、111の頸部には隆帯と沈線を巡らせ、上下に交互刺突を施文している。

112～114は地文が条線となる曾利系の深鉢形土器である。112は重弧文系の口縁部の破片で、113、114は懸垂文を施文している胴部の破片である。

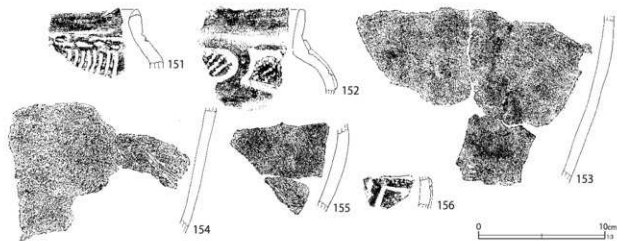
115～134は地文のみを施文する深鉢形土器の破片である。132は胎土に多量の金雲母が混入している。115～126は、地文として撚糸文を施文している。115、116、120～125は撚糸Lを、117～119は撚糸Rを地文としている。126は無節Rの原体を使用して施文している。127、130～133の地文は単節R Lの縄文である。133は細い原体を使用している。128、134は同一個体の破片で、無節Lを地文として施文している。129は単節L Rの縄文を施文している。

135～146は底部の破片である。135～139は沈線で懸垂文を垂下させている。140、141は地文のみが残存している。他は無文である。地文は135～137、140、141、146が単節R Lの縄文を施文している。135は原体の撚りが粗いものである。138は複節L R Lの縄文を地文としている。139の地文は撚糸文Lである。142～145は無文部分である。

147～156は、深鉢形土器以外の器形の土器である。147～155は鉢形や浅鉢形土器の破片である。147～152は口縁部の破片である。文様帯には、隆帯や沈線で文様を施文している。151、152は張り出した肩部に文様帯を持つものである。153～155は胴部の破片で、内外面ともに丁寧に磨ぎ状の調整を施している。156は小型の壺形状の土器片と考えられる。

第17図157～162は出土した土製品である。157～160は土製円盤である。いずれも深鉢形土器の胴部破片を円形に加工して使用しているもので、表面には地文のみが残存している。

161、162は土器片錘である。深鉢形土器の胴部破片を加工している。161は器面に隆帯が残存しており、元の深鉢形土器上下方向に對し、横方向の両側縁に挟りを入れている。楕円形状に加工している。162は、側縁すべて十字方向に挟りを入れるもので、横方向の挟り間には、表裏面ともに



第16図 第1号住居跡出土遺物(5)

第4表 第1号住居跡出土石器観察表(第17図)

番号	器種	石材	長さ/cm	幅/cm	厚さ/cm	重さ/g	備考
163	石鏃	チャート	1.9	[1.5]	0.4	0.8	
164	石鏃	チャート	1.4	1.5	0.5	0.8	
165	石鏃	チャート	2.7	1.7	0.5	1.5	
166	磨石	安山岩	[4.0]	[5.3]	[3.4]	77.3	
167	敲石	砂岩	[9.4]	3.8	[3.9]	148.9	
168	石皿	安山岩	[6.5]	[5.8]	5.6	150.4	

溝状の抉りを繋げて入れている。長方形状に加工している。

第17図163～168は第1号住居跡出土石器である。

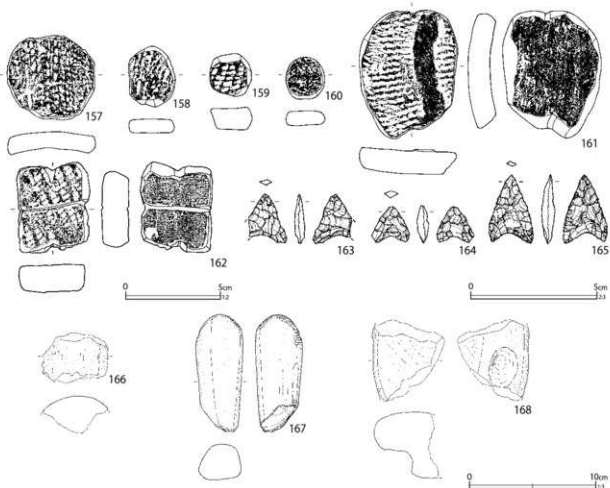
163～165は石鏃である。163はチャート製で無茎、抉りは浅く入念に加工している。左脚部を欠損する。164はチャート製で無茎、抉りは浅く小型で肉厚である。165はチャート製で無茎、抉りは浅く入念に加工し、両側縁が鋸歯縁状になって

いる。

166は安山岩製の磨石である。平坦面は使用により平滑に摩耗している。大部分が欠損する。

167は、砂岩製の敲石である。上端部の一部は敲打によって潰れている。端部は折面後敲打によって潰れている。被熱により赤色化している。

168は安山岩製の石皿である。大部分が欠損する。裏面に漏斗状の凹穴が見られる。



第17図 第1号住居跡出土遺物(6)

第2号住居跡（第18図）

第2号住居跡はB区北側中央の、G・9、10グリッドから炉のみを検出した。

他住居跡との関係は、第1号住居跡と重複し、これに壊されていた（第10図）。他遺構との関係は、第2号土壌と重複し、これを壊していた。

平面形態は明らかにできなかった。

規模は、炉の残存範囲で、長軸長1.8m、短軸長1.0m、深さ約35cm、長軸方位はN-3°-Wである。炉は石囲い炉で、部分的に使用された礫が遺存している。また、1の炉体土器が残されていた。

住居跡の床面や住居跡に伴う柱穴は検出できなかった。

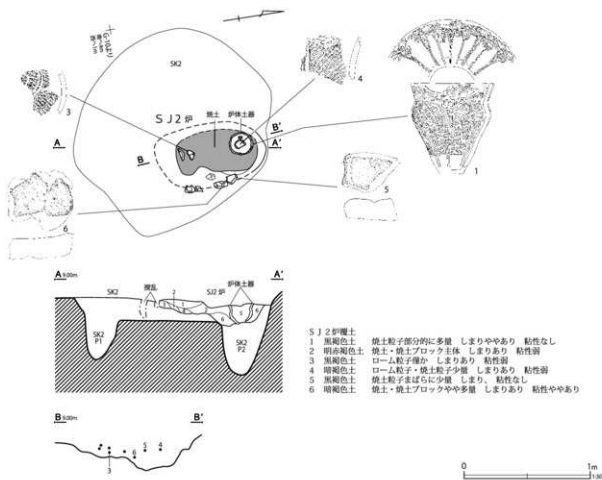
時期は、炉体土器から、縄文時代中期後葉の加

曾利E I 式期である。

第1号住居跡、第2号土壌と重複しており、第2号住居跡の遺物として確定できたものは、炉体土器の第19図1のみであるが、炉跡内や周辺から一括して出土した3点も第2号住居跡として取り上げられている。

第19図1～4は出土土器である。

1は炉体土器で、口縁の一部と、底部を欠損している。その他の部分はほぼ完形で出土している。深鉢形土器で、口縁はやや外反し、頸部で括れ胴部にまるみをもたせて底部に至る器形である。炉体土器として使用されていたが、内外面ともに器面には直接火を受けた痕跡はない。口縁部の文様は大きく開く弧状の隆帯を4単位配置して区画し、



第18図 第2号住居跡、遺物出土状況

第5表 第2号住居跡出土石器観察表(第19図)

番号	器種	石材	長さ/cm	幅/cm	厚さ/cm	重さ/g	備考
5	石皿	砂岩	[6.5]	[8.9]	[6.8]	346.6	SJ2が跡No.6 被熱
6	石皿	閃緑岩	[9.9]	[10.4]	[4.6]	557.8	SJ2が跡No.5 被熱

胴部には弧状の張出し部中央に三角形状に4単位隆帯を貼付しており、腕を広げた人体文のような表現をしている。頭部にあたる部分には、円文や渦巻文を施している。

口縁は部分的に欠けているため、口縁部区画内の全体の文様配置は不明である。胴部は人体状の文様間に沈線で渦巻文を施し、それに付くようにして懸垂文などを施している。胴部の渦巻文は2個1対で施し、離れたものと連結したものを交互に施文するが、同一の形状のものはない。地文は単節R.Lの縄文で、縦方向に施文している。また、地文は隆帯上にも施文し、隆帯の向きによっては横方向に施文するが、磨り消されている部分もある。

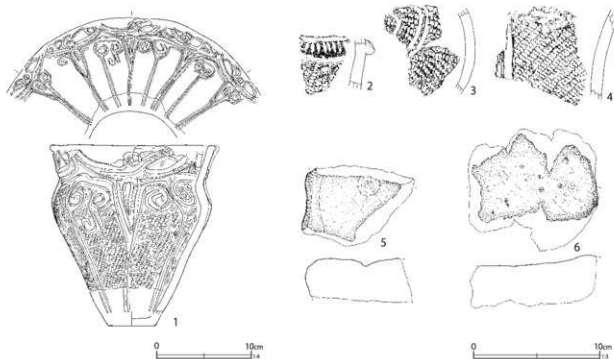
2～4は出土した深鉢形土器破片である。1と同時期と考えられるものは、3である。4は混入

と考えられる。2は頸部から胴部の破片で、頸部には隆帯を巡らせ、隆帯上には刻みを施している。地文は単節R.Lの縄文で、条が縦方向になるよう、斜め方向に施文している。3は胴部の破片で、2本1組の沈線で文様を施文している。地文は単節L.Rの縄文で、縦方向に施文している。4は頸部直下の胴部破片で、沈線による懸垂文を施文している。地文は単節R.Lの縄文で、縦方向に施文している。

第19図5、6は、2号住居跡出土石器である。

5は、砂岩製の石皿である。大部分が欠損する。表面に漏斗状の凹穴が見られる。被熱により赤色化している。

6は、閃緑岩製の石皿である。大部分が欠損する。皿部はわずかに凹んでいる。被熱により一部剥落し、赤色化している。



第19図 第2号住居跡出土遺物

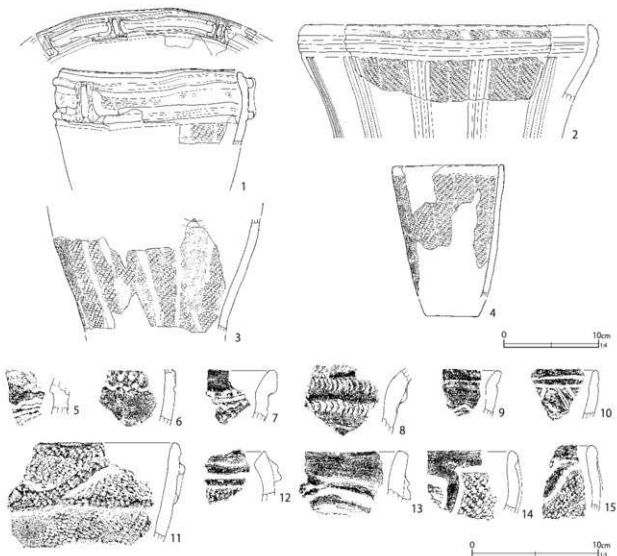
第1、2号住居跡出土遺物 (第20、21図)

第1号住居跡、第2号住居跡のどちらに帰属するか明確ではない遺物を一括した。

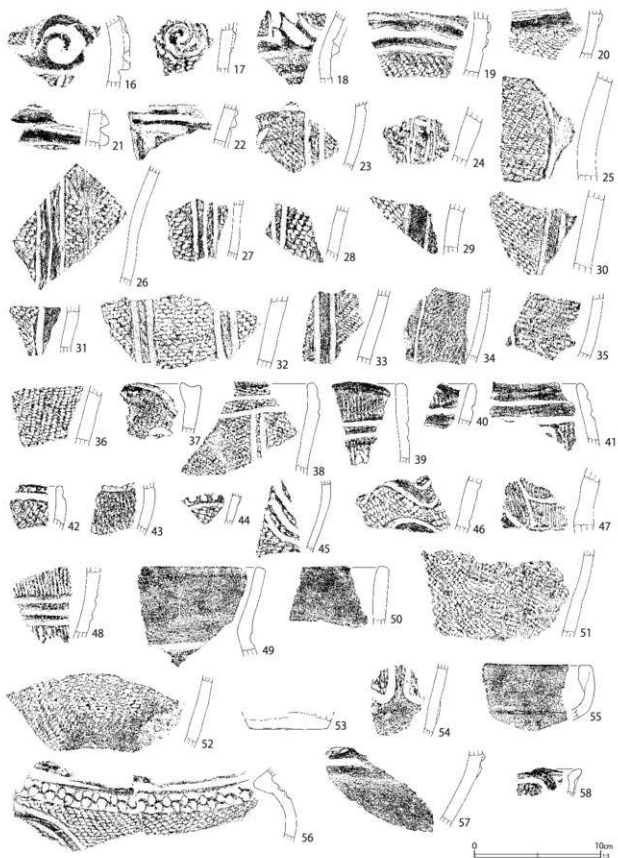
第20図1～4は器形が復元できた深鉢形土器である。1は口縁と胴部上半のごく一部のみ残存している。口縁部文様帯は口唇下と胴部区画に隆帯を2本帯状に巡らせて貼付している。隆帯の上下をつなぐように2本1組で縦方向に隆帯を4単位に貼付している。地文は燃りの緩い単節R Lの縄文を縦方向に施文している。推定口径は19cmである。2は口縁部と胴上部の一部が残存するもので、狭い口縁部は胴部と3本の平行沈線を巡らせて区

画している。胴部には3本沈線1組の垂下する磨消懸垂文を沈線で施し、単位は10単位と推定される。地文は単節L Rの縄文で縦方向に施文している。推定口径は30cmである。3は胴部のみ残存するもので、部分的に沈線が残り、連弧文系土器の可能性がある。地文は単節R Lの縄文で、縦方向に施す。4は小型の深鉢形土器で、地文のみを施している。地文は単節R Lの縄文で、縦方向に施文している。推定口径は12cmである。

第20図5～15、第21図16～58は土器破片である。時期は混在しているが、1、11～15は第2号住居跡に帰属すると考えられる。



第20図 第1号、2号住居跡出土遺物(1)



第21图 第1号、2号住居跡出土遺物(2)

第3号住居跡（第22図）

第3号住居跡はA区南側東端の、F・9グリッドで検出した。

他住居跡との重複関係は見られず、他遺構との関係は、第46号小竪穴状遺構、47号土壇と重複し、これを壊していた。

覆土のいわゆる三角堆積にはローム粒子が大量に含まれ、その後に堆積した覆土第1層には、ローム粒子が僅かしか含まれていなかった。いずれも自然堆積と考えられる。

平面形態は略円形と推定した。

規模は主軸長5.5m、副軸長3.2m、深さ約40cm、主軸方位はN-31°-Wである。

が跡は、住居跡の中央で検出し、楕円形で0.9m×0.7mで、深さ約20cmであった。

床面からは、2本のピットを検出し、この中で、P1、P2が柱穴と考えられる。

時期は、縄文時代中期後葉の加曾利EⅢ式期と推定される。

第23～27図は出土遺物である。

第23図1は、が跡の西側から出土した深鉢形土器である。口縁から胴上部が残存するもので、逆位の状態で検出した。床面からは浮いて出土しており、住居跡廃絶後、覆土内に掘り込まれた土壇に伴う可能性が考えられる。器形は口縁がやや内湾しふくらみを持ち、胴部は中央よりやや上で大きく括れ、下部でふくらみを持ち底部に至ると考えられる。口縁部文様帯はない。文様は、括れ部の上下で分かれ、沈線によって施していると考えられる。残存する上部には逆U字文を連結して施文している。文様は6単位に施文するが、そのうち1単位は逆V字に近い。地文は文様の後に施文し、口唇直下は帯状に横方向に施文し、他は縦から斜め方向に、0段多条R Lの縄文を施文している。胴下部は連結されない逆U字文を施文していると推定される。口径は22cmである。

第23図2は器形が復元できた浅鉢形土器の胴部

から底部分である。地文はハケ目状の条線を縦方向に施している。底径は5cmである。

第24図3～45、第25図46～98、第26図99～155は、出土した土器破片である。

3は中期中葉の深鉢形土器片で、爪形文を施文している。

4～21、23～88はキャリバー形の深鉢形土器の破片である。

4～21は口縁部文様帯を持つ口縁部の破片である。区画した口縁部文様帯には、降帯で楕円区画文や渦巻文などを施文している。4、5は文様を施文する降帯上に沈線を施文し、降帯を分割している。7～11は口唇下に沈線を巡らせ、その下に降帯を施し文様を施文するもので、降帯の両側に沈線を沿わせている。13、14は突起部分の破片で、把手の内面に渦巻文を沈線で施文している。15～21は口唇部に連結しそのまま降帯で口縁部文様を施文している。地文はいずれも縄文で、4～8、15、19～21は単節R Lの縄文を横方向に、9は複節R L Rの縄文を縦方向に、10は複節L R Lの縄文を横方向に16～18は単節L Rの縄文を口縁部は横方向に、胴部は縦方向に施文している。

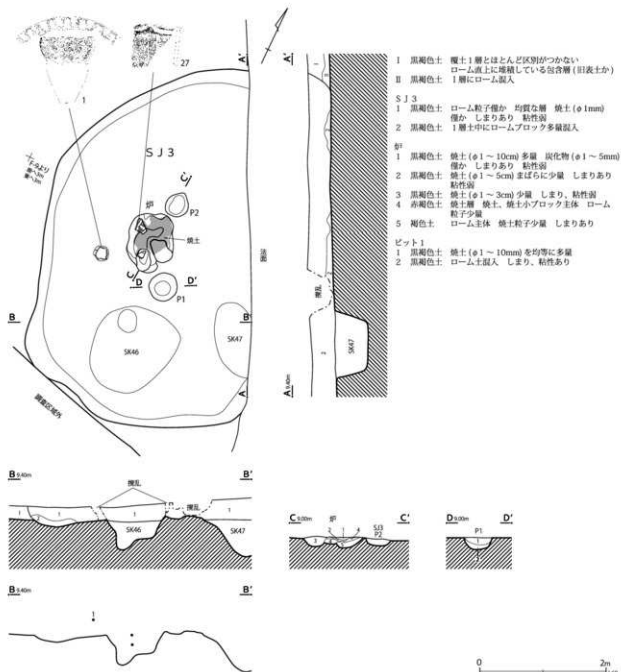
23～27は口縁部文様帯を持つ口縁から胴部の破片である。26は頸部が無文帯となっている。25、27は胴部に2本1組の磨消懸垂文を施文している。地文は23～26が単節R L、27が単節L Rで、口縁部は横、胴部は縦方向に施文している。

22、28～34は口縁部文様帯を持たない深鉢形土器である。地文は単節R Lの縄文が多い。31、32は口唇直下に1段横方向に地文を施文し、他は縦方向に施文している。22は狭い無文部を持つもので、胴部とは2本の沈線を巡らせて区画している。28は胴上部に2本1組の磨消沈線による波状文を施文する土器である。29は口唇直下に沈線を巡らせてごく狭い無文の口縁部を区画している。沈線には刺突列を1条巡らせている。30は沈線による区画内に縄文を充填している。区画文の間は磨

り消され、蕨手文を施文している。蕨手文の上部の両側には円形刺突文を施文している。31は逆U字状文を施文し、文様内は磨り消している。32は逆U字状文を施文するが、文様内は磨り消していない。33、34は小破片のため、口縁部には沈線などの文様は残されていなかった。

35～88は胴部の破片である。35、39、40は沈線で、懸垂文を施文するものである。2本1組の沈

線間は磨り消していない。地文はいずれも単節R Lの縄文で、縦方向に施文している。36、38、41～85は沈線で磨消懸垂文を施文するものである。36、41～61は、2本1組の磨消懸垂文を垂下させている。36は懸垂文間の磨り消しが粗く、地文が残っている。38は部分的に磨消懸垂文となっている。地文は35、37～42、45、47～56が単節R Lの縄文を縦方向に、43、44、46は複節R L Rの縄文を縦方向



第22図 第3号住居跡、遺物出土状況

第6表 第3号住居跡ピット一覧表(第22図)

名称	長径/cm	深さ/cm	名称	長径/cm	深さ/cm	名称	長径/cm	深さ/cm
P1	44	18	P2	38	10			

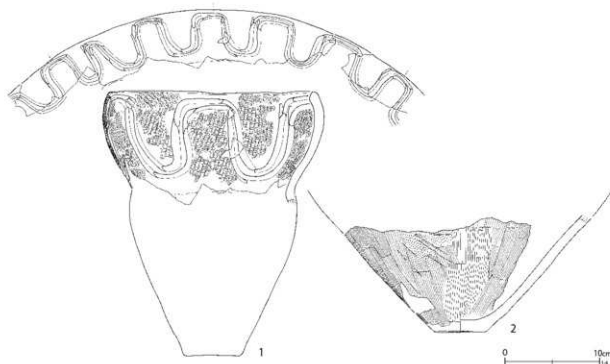
に、57は0段多条R Lの縄文を縦方向に、58、59、61は単節L Rの縄文を縦方向に、60は複節L R Lの縄文を縦方向に施文している。62～66は波状磨消沈線文や、磨消懸垂文間に蕨手状懸垂文などを施文するもので、地文は62、64、65が単節L Rの縄文で、他は単節R Lの縄文を施文している。

67～72は3本1組の磨消懸垂文を垂下させるものである。地文はいずれも単節R Lの縄文を縦方向に施文している。73～86は、沈線文が片側のみ残存しているもので、磨消懸垂文の幅が広く、沈線文も浅く施しているものが多い。地文は73が複節R L Rの縄文で、74～86は単節R Lの縄文で、いずれも縦方向に施文している。87、88は胴部に隆帯を施文するものである。87は2本1組の断面三角形の微隆起線文を施文している。地文は単節L Rの縄文で、縦方向に施文している。88は隆帯を垂下させ、隆帯上に円形刺突列を施文してい

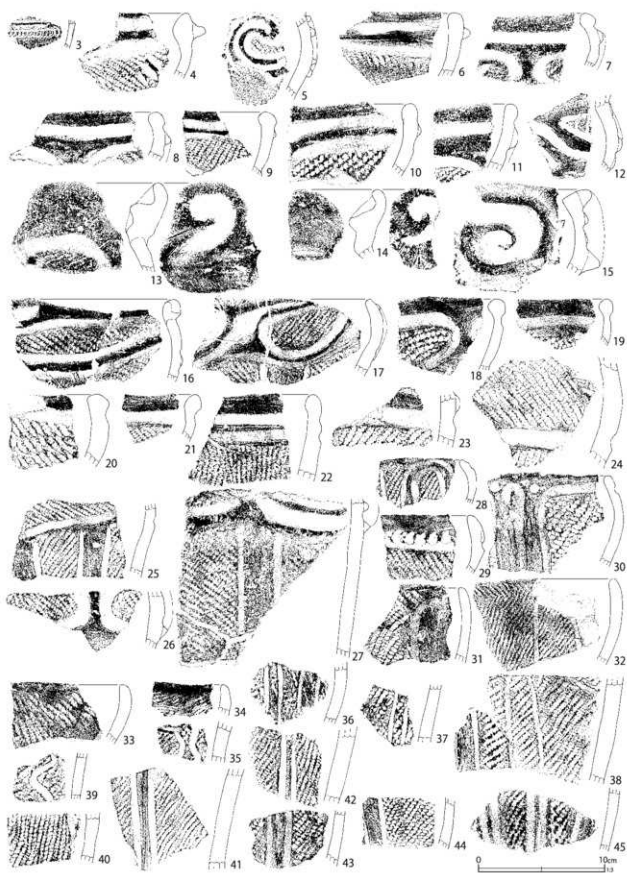
るもので、地文は単節R Lの縄文だが、曾利系と考えられる。

89、90は口縁から直線的に底部に至るバケツ状の器形となる深鉢形土器の口縁部の破片である。狭い無文の口縁部を持ち、胴部とは沈線を巡らせて区画している。胴部には磨消懸垂文を施文している。地文は89は単節R Lの縄文を縦方向に、90は無節Lの縄文を斜め方向に施文している。

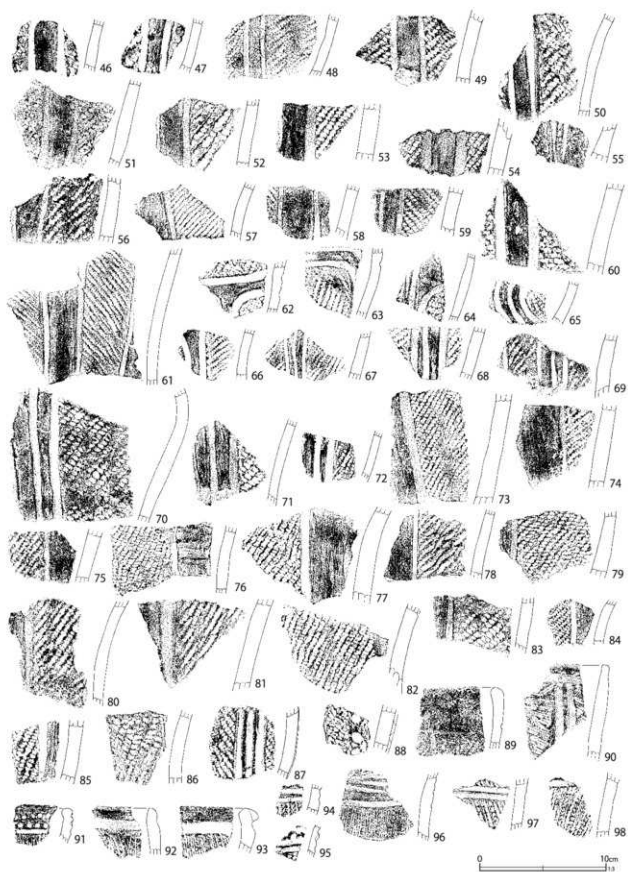
91～101は連弧文系深鉢形土器の破片である。91～93は口縁部の破片である。91は胴部と沈線を巡らせて区画し、区画内に円形刺突文列を2列巡らせている。地文は燃糸文Rである。92、93は沈線を1本巡らせて、狭い無文の口縁部に区画している。地文は条線である。94～101は胴部の破片である。94～98は括れ部分で、沈線を巡らせて胴上部と区画している。95は沈線内に刺突文列を施文している。地文は94～97が燃糸文Lを、98が燃



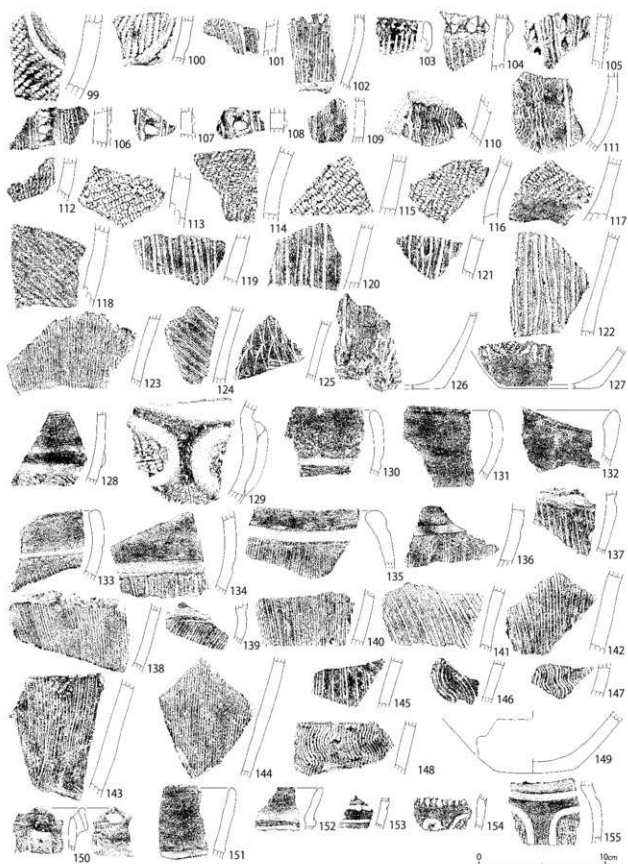
第23図 第3号住居跡出土遺物(1)



第24图 第3号住居跡出土遺物(2)



第25图 第3号住居跡出土遺物(3)



第26图 第3号住居跡出土遺物(4)

第7表 第3号住居跡出土石器観察表(第27図)

番号	器種	石材	長さ/cm	幅/cm	厚さ/cm	重さ/g	備考
156	石鏃	チャート	2.4	2.4	0.9	3.8	
157	軽石	軽石	[4.5]	3.3	1.4	3.2	
158	軽石	軽石	7.8	[4.3]	2.3	5.8	

糸文Rを施している。99、101は沈線文間が磨消縄文となっている。地文は99、100が単節RLの縄文で、101は捻糸文Lである。

102～111は曾利系の深鉢形土器の胴部である。地文が条線である。102、103は口縁部の破片で、口縁部には1列刺突文を巡らせている。104は頸部に隆帯を巡らせ、隆帯上に刺突を施している。105～108は隆帯を垂下させるもので、隆帯上には刺突を施している。109～111は磨消懸垂文を施している。地文の条線は流水文状に施している。

112～125は地文のみを施している深鉢形土器の胴部破片である。112の地文は捻糸文Lである。113、115～117の地文は単節RLの縄文である。114の地文は0段多条RLの縄文である。118の地文は無節Lである。119～124の地文は条線である。125は松葉状に地文を施している。126、127は深鉢形土器の底部の破片である。沈線により懸垂文を施している。

128～149は鉢形または浅鉢形土器の破片である。128は無文の口縁部と隆帯で区画し、胴部は単節LRの縄文を施している。129は肩部の文様帯部分が残存するもので、隆帯で楕円区画文を施し、区画内には単節RLの縄文を施している。130

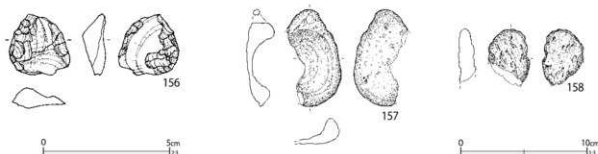
～132は無文の口縁部が残存している。130は口縁部と胴部とは、沈線を1本巡らせて区画している。132は口縁部が波状口縁となるものである。133～137、139は口縁部、または口縁部直下の破片である。胴部の地文に条線を施文するものである。いずれも、狭い無文の口縁部を持つもので、胴部とは沈線で区画している。138、140～148は胴部の破片である。いずれも地文として条線を施文している。146～148は条線を流水文状に施文している。149は底部である。

150～155は壺形状の土器の破片である。150の内外面には部分的に赤彩の痕跡が残存している。

第27図は、3号住居跡出土石器である。

156は、チャート製の石鏃である。小型剥片を素材として縁辺を加工している。この剥離面は大きく粗雑である。肉厚で先端が鋭くないため、未製品の可能性もある。

157、158は軽石で、いずれも平面は楕円形である。157は上方中央に穿孔が見られ、上端部に紐ずれ痕が認められる。中央は使用により「U」字状に窪んでいる。一部が欠損する。158は断面がレンズ状であり、穿孔は見られない。下端部が欠損する。用途は不明である。



第27図 第3号住居跡出土遺物(5)

第4号住居跡（第28図）

第4号住居跡はB区南側西よりのE、F-7グリッドで検出した。

他住居跡との重複関係は見られず、他遺構との関係は、第48号小竪穴状遺構と重複し、これに壊されていた。

覆土は、自然堆積と考えられる。

平面形態は円形と推定した。

規模は、主軸長推定6m、副軸長も推定6m程度で、深さ約50cm、主軸方位はN-44°-Wである。

が跡は、調査範囲からは検出できなかった。ただし、ビット5に壊されている焼土が認められ、が跡との関連も考えられる。

床面からは、5本のビットを検出し、柱穴と考えられる。

時期は、出土遺物から縄文時代中期後葉の加曽利EⅠ式期である。

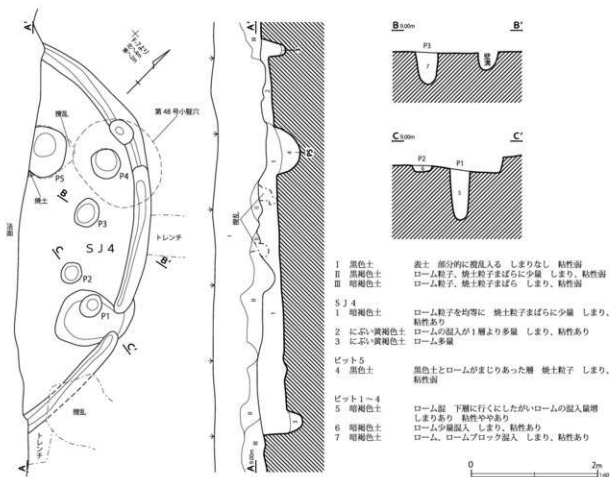
第29～33図は出土した遺物である。

第29図1～4は器形が復元できた土器である。

1は深鉢形土器の胴部のみが残存のもので、括れ部分に隆帯で楕円区画文を横に連ねて貼付している。地文は0段多条L Rの縄文である。

2はキャリバー形の深鉢形土器の口縁部破片である。口縁部文様帯は隆帯とそれに沿った沈線によって文様を施している。半円に区画した区画文内には対向する渦巻文を施している。口縁部側の渦巻文を舌状の小突起状に施している。地文は0段多条R Lの縄文である。

3はキャリバー形の深鉢形土器で、口縁部は欠損している。頸部は無文で、ずん胴で細長い胴部



第28図 第4号住居跡

第8表 第4号住居跡ピット一覧表(第28図)

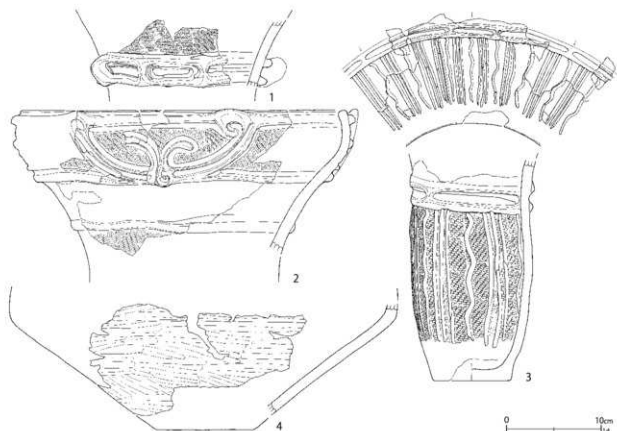
名称	長径/cm	深さ/cm	名称	長径/cm	深さ/cm	名称	長径/cm	深さ/cm
P1	39	78	P2	35	10	P3	45	50
P4	48	140	P5	80	43			

を持っている。頸部と胴部の区画には、隆帯による楕円区画文を3単位重ねて貼付している。3単位の楕円区画文の幅は均一ではなく、小楕円区画が1単位、大楕円区画が2単位となっている。胴部には蛇行懸垂文と3本1組の垂下する沈線による懸垂文を交互に施文しているが、1箇所蛇行懸垂文を施文せず、3本1組の懸垂文を連続して施文している。そのため、蛇行懸垂文が6単位3本1組の懸垂文を7単位施文している。地文は、単節R Lの縄文である。底径は8cmである。

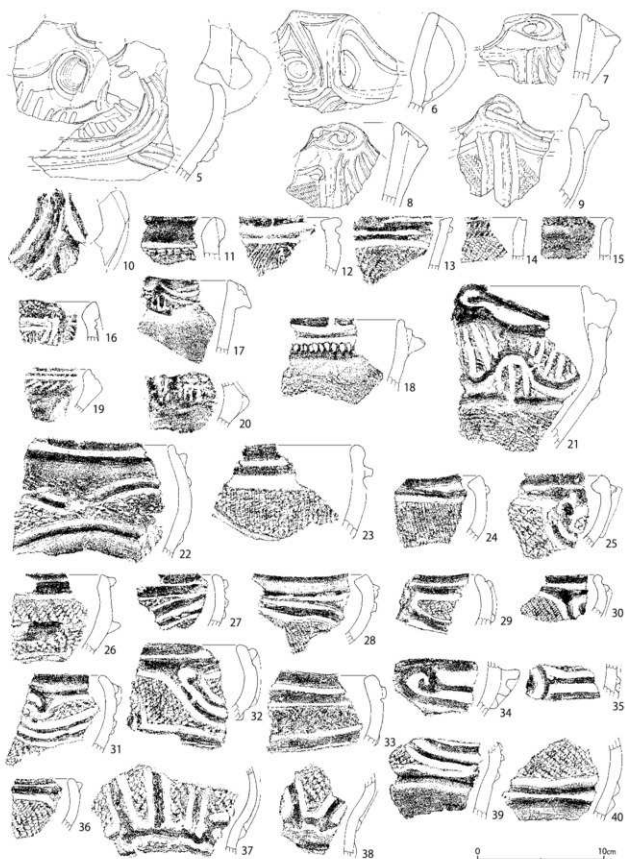
4は浅鉢形土器の胴部である。胴上部で屈曲し底部に至る器形で、無文の器面は丁寧に整形し、部分的に赤彩の痕跡が認められる。

第30～33図は土器破片である。第30図5、11～21は勝坂末集から加曽利E I式初頭の土器である。16は隆帯上に単節R Lの縄文を施文している。17～20は口唇部がエラ状に肥厚するもので、中峠系の深鉢形土器である。

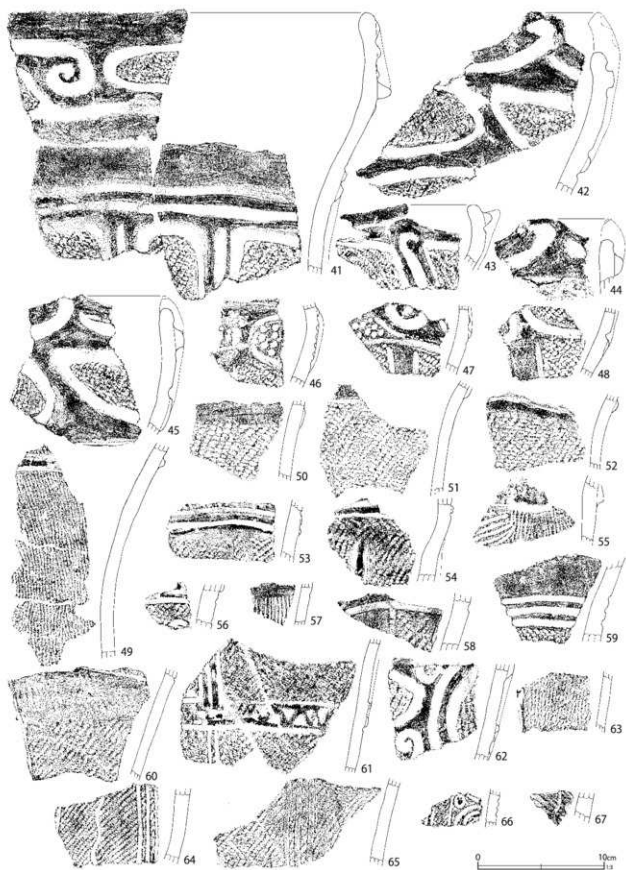
6～10、22～78はキャリバー形の深鉢形土器の破片である。6～10は口縁部の突起部分である。6はメガネ状把手を貼付している。7～9の突起の頂部には渦巻文を施文している。22～48は口縁部から頸部である。49～60は頸部から胴部である。61～78は胴部である。胴部文様は41、54、61、62が隆帯で施文し、他は沈線で施文している。キャリバー形の深鉢形土器は、加曽利E I式古段階から



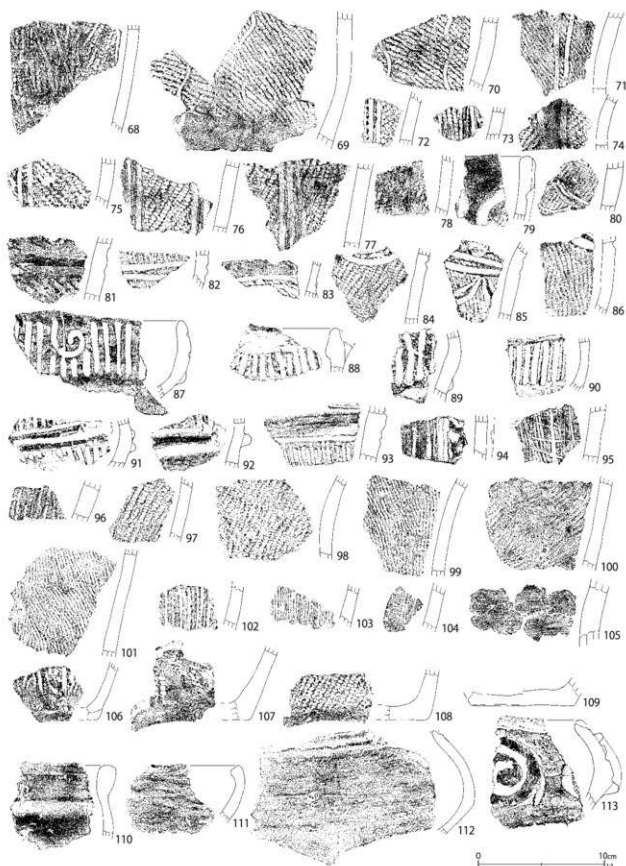
第29図 第4号住居跡出土遺物(1)



第30图 第4号住居跡出土遺物(2)



第31图 第4号住居跡出土遺物(3)



第32图 第4号住居跡出土遺物(4)

第9表 第4号住居跡出土石器観察表(第33図)

番号	器種	石材	長さ/cm	幅/cm	厚さ/cm	重さ/g	備考
127	打製石斧	黒色頁岩	[11.2]	[5.0]	2.4	126.9	
128	磨石	安山岩	10.7	6.4	4.6	491.7	

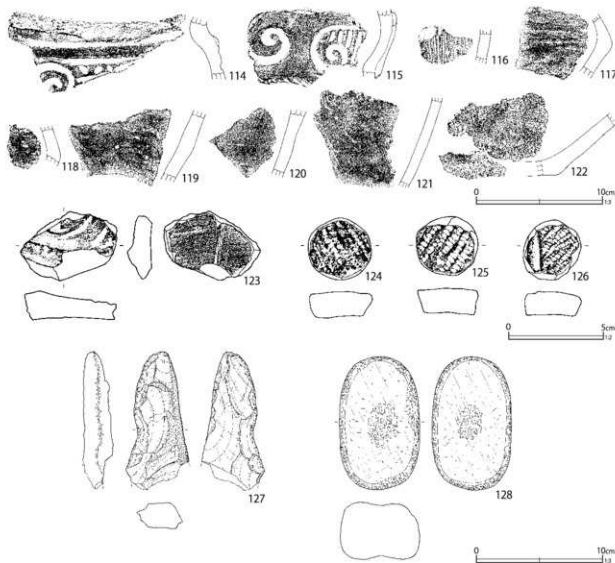
加曽利EⅢ式まで混在している。

79はバケツ状の器形の土器である。80～86は連弧文系の深鉢形土器である。87～95は地文が集合沈線や条線となる曽利系土器である。96～105は深鉢形土器の破片である。106～109は深鉢形土器の底部、110～122は浅鉢形土器の破片である。

第33図123～126は土製品で、123は土器片鏟、124～126は土製円盤である。

第33図127、128は、第4号住居跡出土石器である。

127は、黒色頁岩製の打製石斧である。側縁に敲打痕が見られる。風化が激しく剥離面が不明瞭であった。128は、安山岩製の磨石である。周縁部を加工して断面形を隅丸長方形にしている。平坦面は平滑に摩耗している。平坦部の中央は敲打で凹んだ後、使用により摩耗している。



第33図 第4号住居跡出土遺物(5)

第5号住居跡（第34図）

第5号住居跡はA区北端A-6グリッドで検出した。

他住居跡との重複関係は認められず、他遺構との関係は、第4号土坑と重複し、これに壊されていた。覆土には比較的多くのローム粒子が含まれており、自然堆積と考えられる。

平面形態は不整形で、規模は、長軸残存長3.0m、短軸残存長1.8m程度、深さ約50cm、主軸方位はN-10°-Eである。規模、形状から小竪穴状遺構の可能性も考えられる。

ガサ跡は、調査範囲からは検出できなかった。

床面からは1本のピットを検出し、柱穴と考えられる。

出土土器は破片のみで、時期も勝坂式末から加曾利EⅢ式まで混在しており、詳細な時期については明らかにできなかった。

第35図1～35は、出土土器である。

1は勝坂系の深鉢形土器の口縁部である。無文の口縁で、口唇部は面を持つ角状となっている。2は阿玉台系の深鉢形土器の胴部である。微隆起状の隆帯に添って、沈線を施文している。

3～18は加曾利E系のキャリバー形の深鉢形土器である。3～6は口縁部で、3は無文の頸部と

の区画に交互刺突文を施文している。地文は燃糸文Rである。4の地文は単節RLの縄文である。5は口縁の突起部分で、幅広い沈線によって渦巻文を施文している。6の地文は単節LRの縄文である。7は頸部から胴部の破片で、わずかに残る胴部には、2本1組の沈線によって、磨消懸垂文を垂下させている。地文は単節RLの縄文である。8～18は胴部の破片である。8は隆帯にも施文している。11、12、14、16、18は2本1組の沈線によって、磨消懸垂文を垂下させている。9は沈線間が磨り消していない。10、13、15、17も2本1組の沈線を施文すると考えられる。

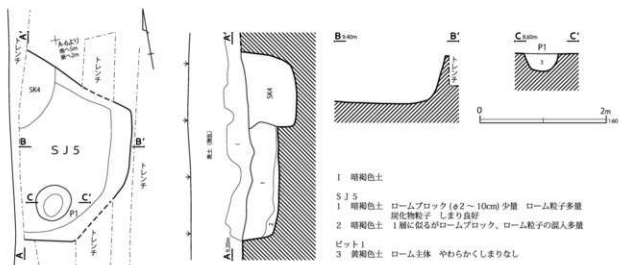
19～23は連弧文系の深鉢形土器である。19～21は口縁部の破片である。19は沈線で区画した狭い無紋の口縁部を持ち、沈線間には交互刺突文を施文している。20、21の地文は条線で、22の地文は燃糸文Rで、23の地文は単節RLの縄文である。

24は曾利系の深鉢形土器の胴部で、集合沈線を施文している。

25～31は地文のみを施している深鉢形土器の胴部で、25、26は燃糸文R、27、28は燃糸文Lを施文している。29～31の地文は条線である。

32、33は深鉢形土器の底部である。

34は深鉢形、35は浅鉢形土器の胴部破片である。



第34図 第5号住居跡

第10表 第5号住居跡ピット一覧表(第34図)

名称	長径/cm	深さ/cm	名称	長径/cm	深さ/cm	名称	長径/cm	深さ/cm
P1	55	28						

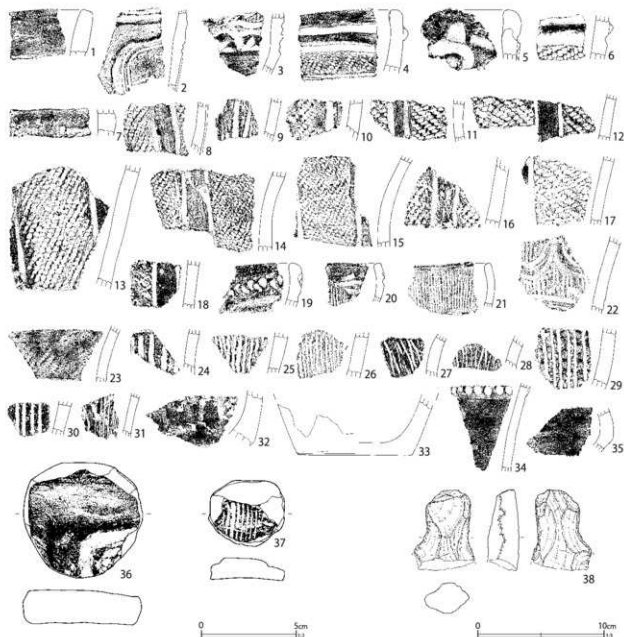
第11表 第5号住居跡出土石器観察表(第35図)

番号	器種	石材	長さ/cm	幅/cm	厚さ/cm	重さ/g	備考
38	打製石斧	頁岩	[6.5]	[4.8]	2.5	83.8	

第35図36、37は出土した土製円盤である。36は深鉢形土器の頸部から胴部、37は深鉢形土器胴部の破片を円形に加工している。

第35図38は、5号住居跡出土石器である。

38は、頁岩製の打製石斧である。両側縁に敲打痕が見られる。下半部が欠損する。



第35図 第5号住居跡出土遺物

第6号住居跡 (第36図)

第6号住居跡はA区中央の西よりD-5、6グリッドで検出した。

他住居跡との関係は、第8、9住居跡と重複し、第9号住居跡を壊し、第8号住居跡に壊されていた。

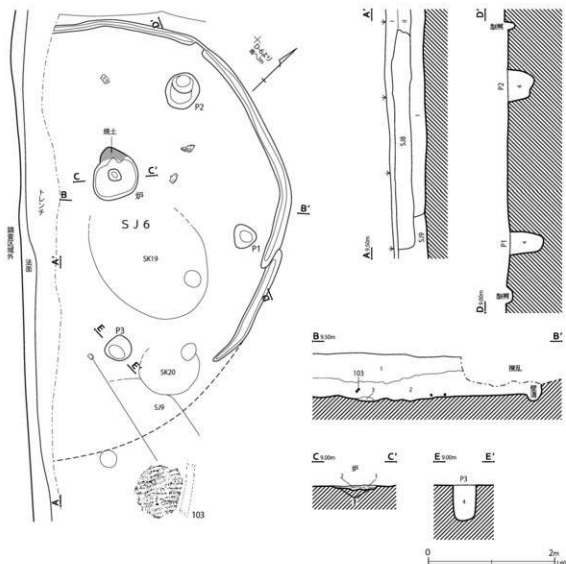
他遺構との関係は、第19、20号土壇と重複が認められたが、新旧関係は明らかにできなかった。

覆土には比較的多くのローム粒子が含まれており、自然堆積と考えられる。

平面形態は円形と推定した。

規模は、長軸推定5.8m、短軸長残存3.7m、深さ約65cm、長軸方位N-75°-Wである。

炉は住居跡の中央やや北西よりで検し、長軸80cm、短軸65cm、深さ5cm程度で、炉体土器は見られなかった。



- I 耕作土 黒色土 しまりなし
II 旧表土層 黒色土 しまりありなし 平安時代の表土層か 粘性弱

SJ6

- 1 黒褐色土 ローム粒子均等に少量 焼土粒子僅か しまりあり 粘性なし
2 暗褐色土 ローム粒子均等に少量 焼土粒子僅か しまりあり 粘性なし
3 暗褐色土 2層土中に焼土を多量 炭化物

炉

- 1 黒褐色土 焼土粒子と均等 炭化物粒子僅か しまりあり 粘性弱
2 暗褐色土 小ブロック、焼土粒子多量 炭化物粒子僅か しまりあり 粘性弱
3 黒褐色土 ロームブロック混入 しまりあり 粘性弱

ビット1~3

- 4 暗褐色土 ローム混 しまりあり

第36図 第6号住居跡、遺物出土状況

第12表 第6号住居跡ピット一覧表(第36図)

名称	長径/cm	深さ/cm	名称	長径/cm	深さ/cm	名称	長径/cm	深さ/cm
P1	36	50	P2	56	43	P3	40	56

第13表 第6号住居跡出土石器観覧表(第44図)

番号	器種	石材	長さ/cm	幅/cm	厚さ/cm	重さ/g	備考
189	石鏃	黒曜石	2.0	1.1	0.4	0.6	
190	石鏃	チャート	2.8	[1.9]	0.4	1.0	
191	石鏃	チャート	3.1	2.2	0.9	5.8	
192	スクレイパー	黒色頁岩	[2.8]	[4.7]	1.1	11.8	
193	磨製石斧		9.6	4.8	2.8	243.8	
194	打製石斧	頁岩	[7.2]	4.6	1.7	65.8	
195	磨製石斧		10.2	4.5	2.7	215.6	
196	敲石	頁岩	11.2	2.3	2.3	74.5	

住居跡の床面から柱穴と考えられるピットを3本検出した。

時期は、縄文時代中期後葉の加曾利EⅠ式期と推定される。

第37～43図は出土した土器である。

第37図1～5、第38図6～10は器形復元が可能であった土器である。

1～5は中峠系の深鉢形土器である。1は口縁から胴上部が残存し、やや直立気味に立ち上がる口縁部から胴上部で大きく括れる器形である。胴部とはやや舌状に突き出る隆帯で区画し、隆帯にはキザミを加える。その隆帯上には4単位突起を貼付けている。突起は楕円形状で、両脇に円形の貼付をし、円形部分の中央には上下に貫通する孔を穿つ。隆帯で区画した口縁部には8本の沈線を巡らせ、それぞれの間に円形刻文を施している。胴部は地文のみで、0段多条RLの縄を斜めから縦方向に施している。推定口径は33cmである。

2～5は口縁部が朝顔状に開く深鉢形土器である。口縁部は肥厚してエラ状に張り、波状口縁となる。2は口縁部から胴上部が残存するものである。口縁部は4単位の波状口縁である。肥厚した口縁は面を持ち、波線やキザミなどを施文している。波頂部には2本の短沈線を深く施文し、その直下に三日月状に隆帯を貼付し、中央に沈線を施

している。頸部に無文帯を持ち、沈線で区画した胴部は、沈線によって懸垂文を施文している。地文は単節RLの縄文で、縦方向に施文している。推定口径は21cmである。3は口縁部から胴部が残存するものである。波状口縁部は、3単位である。口縁は肥厚し、その部分を文様帯としている。口縁部の突起を中心として、沈線によって区画文などを施文している。幅広い無文の頸部を持ち、胴部とは2本の沈線を巡らせて区画している。胴部には沈線によって蛇行懸垂文、渦巻文などを施文している。地文は単節RLの縄文で縦方向に施文している。口径は24cmである。4は口縁部が、3と比較しやや内湾している。口縁部は、3単位の波状口縁で波頂部には渦巻文を施文している。波頂部間には沈線を施文し、沈線下に短沈線を施している。頸部は無文であるが、一部地文が残されている。胴部と頸部は3本の沈線を巡らせて区画し、胴部に鋸歯状に近い蛇行沈線文を垂下させている。地文は単節RLの縄文で縦方向に施している。口径は20cm、推定される底径は8cmである。5は口縁部と頸部の一部が残存している。波状口縁は4単位であると推定した。波頂下には立体的に突き出す口唇状の粘土を張り付ける。口縁には沈線で文様を施文し、口縁の下端にはキザミを施す。頸部は無文である。推定口径は36cmである。

6～8は加曽利E系のキャリバー形の深鉢形土器である。6は口縁部から胴部の一部が残存している。円環状の把手を口縁に貼付し、口縁部は隆帯とそれに沿った沈線で文様を施している。頸部の口縁と胴部の区画には沈線を巡らせている。胴部には懸垂文を施している。地文は単節R Lの縄文を縦方向に施文している。推定口径は27cmである。7は口縁部から胴上部が残存している。口縁には把手を貼付しているが、実測図左側には円環状となる把手の一部が残存しており、現存部より大きな把手であったと推定される。口縁部には隆帯によってクランク状に文様を貼付する。胴部には3本1組の蛇行沈線文を懸垂文として施している。地文は単節L Rの細かな縄文で、口縁は斜めから横方向に、胴部は斜めから縦方向に施文している。推定口径は28cmである。8は口縁部と頸部の一部が残存している。口縁は波状口縁で、波頂部には突起を貼付している。残存する頂部は渦巻文を施し、そこから橋状に隆帯を口縁部に貼付している。口縁部文様帯は隆帯と沈線によって渦巻文や区画文を施文している。地文は0段多条L Rの縄文を横や斜め方向に施文している。わずかに残る頸部は無文となっている。推定口径は27cmである。

9は深鉢形土器の胴部である。文様は地文のみで、単節R Lの縄文を縦方向に施している。施文後にナデのような整形痕が認められる。

10は浅鉢形土器で、底部は欠損している。器面は風化が著しく、調整痕は不明瞭である。口縁部と胴部との区画にごく浅いナデ状の沈線を巡らせている。胴部は無文である。器面には部分的に赤彩の痕跡が認められた。輪積み部分で破損していることが観察された。推定口径は44cmである。

第39図11～35、第40図36～73、第41図74～109、第42図110～153、第43図154～182は土器の破片である。

11～14は阿玉台式系の深鉢形土器である。

15～41は加曽利E I式に伴うと考えられる勝坂

式系、中峠式系を含む深鉢形土器の口縁部の破片である。15～24は把手と突起部分である。15は結節沈線状に沈線文を施している。16、18、19、22、24の隆帯上には刻みなどを施していない。25は口縁部に立体的に隆帯を貼付するもので、隆帯上に沈線を施文している。26は24と同一個体で、突起部分が欠損している。27、28は口縁が朝顔状に開く器形の土器で、肥厚してエラ状に張っている口縁に隆帯と沈線で文様を施文している。頸部は無文である。29～32は口縁部が肥厚してエラ状に張っている土器で、口縁部には隆帯を波状に貼付などをしている。29は単節縦位の縄文を、30は0段多条R Lの縄文を地文としている。33～35は波頂部の破片で、34は条線を地文としている。36～41はキャリバー形の器形を持つもので、36、37は口縁部に端部が渦巻く隆帯を連結して貼付している。39、40は口縁部に沈線で文様を施文している。41に地文はなく、隆帯のみで文様を施している。36、38の地文は燃糸文Lである。

42～131は加曽利E系の深鉢形土器で、キャリバー形となる破片である。42～73は口縁部の破片である。口縁部文様帯にはいずれも隆帯で渦巻文やクランク文などの文様を施文している。61、62は頸部無文帯の一部が認められる。地文は44が単節L Rの縄文、51が無節Lの縄文で、他は単節R Lの縄文を施文している。74～81は口縁部から頸部の破片である。74、76は同一個体で、口縁部文様は1本の隆帯で施文している。頸部は狭く隆帯で区画しており、地文を施文している。胴部文様は不明である。胴部には懸垂文を施文している。78は2本1組の隆帯で懸垂文を垂下させ、隆帯間には沈線で蛇行懸垂文を施文している。80は胴部と頸部の区画に沈線文を巡らせている。地文は81が単節L Rの縄文で、他はすべて単節R Lの縄文である。82～95は頸部から胴部の破片である。82～87は、胴部との区画に隆帯を巡らせ、88～95は沈線文を巡らせている。地文は82、83、86～92、95

が単節R Lの縄文を、84、85、93、94は0段多条R Lの縄文を施文している。96～132は胴部の破片である。96から131は、胴部に沈線によって文様を施文するものである。96は横方向に施文している。97～100は、渦巻文などを施文している。101～104は蛇行懸垂文を施文している。105～112は蛇行懸垂文と垂下する懸垂文を交互に施文している。113～131は2本1組や3本1組で垂下する懸垂文を施文している。112、127～131は沈線文間を磨り消す磨消懸垂文となっている。118、119は同一個体で、胎土に金雲母が多量に含まれている。地文は単節R Lの縄文が最も多く、96、99、102～105、107～111、114～120、123～125、127、128、130、131が単節R Lの縄文を地文として縦方向に施文している。他は97が0段多条のL R、121、122が0段多条のR Lで、縦方向に施文している。98、106の地文は無節Lの縄文で、縦方向に施文している。100、101、126の地文は単節L Rの縄文で、縦方向に施文している。112、113の地文は捻糸文Lで縦方向に施文している。

129の地文は複節L R Lの縄文で、縦方向に施文している。132は隆帯を垂下させ、隆帯上に列点文を施文するもので、曾利系と考えられる。地文は単節R Lの縄文で、縦方向に施文している。

133～140はキャリバー形以外の深鉢形土器である。133は無文の口縁部に指頭痕が認められる。地文は単節R Lの縄文である。134の地文は単節R Lの縄文で、縦方向に施文している。135はバケツ状の器形で、地文は単節R Lの縄文で縦方向に施文している。136～140は外反する無文の口縁部を持つもので、頸部が「く」字状になり、胴部との区画に隆帯を巡らせている。136は立体的な隆帯を巡らすもので、部分的に摘み上げて突起状に施している。隆帯上には沈線を施文し、突起部分は渦巻状に施している。地文は0段多条R Lの縄文を縦方向に施文している。137は隆帯が剥落しており、器面に痕跡が認められる。138、140は

隆帯の上下交互に刺突を行っている。

141～147は連弧文系の深鉢形土器である。141、142は口縁部、他は胴部の破片である。地文は141は条線、142～146は単節R Lの縄文、147は捻糸文Lである。

148は集合沈線によって、弧線文や渦巻文を口縁部に施文するもので、円錐状の突起部分に渦巻文を施文している。

149～153は地文が条線の曾利系深鉢形土器である。149、150は重弧文を施文する口縁部の破片である。151はキャリバー形の口縁部の破片である。

154～169は地文のみが残る深鉢形土器の胴部破片である。154、156、157の地文は捻糸文L、155の地文は捻糸文Rである。地文は、158、161が0段多条のL R、159、168、169が0段多条のR Lである。縦方向に施文するが、158は条が縦方向になるよう斜めに施文している。160、162～166の地文は単節R Lの縄文で、縦方向に施文している。

170～176は深鉢形土器の底部である。

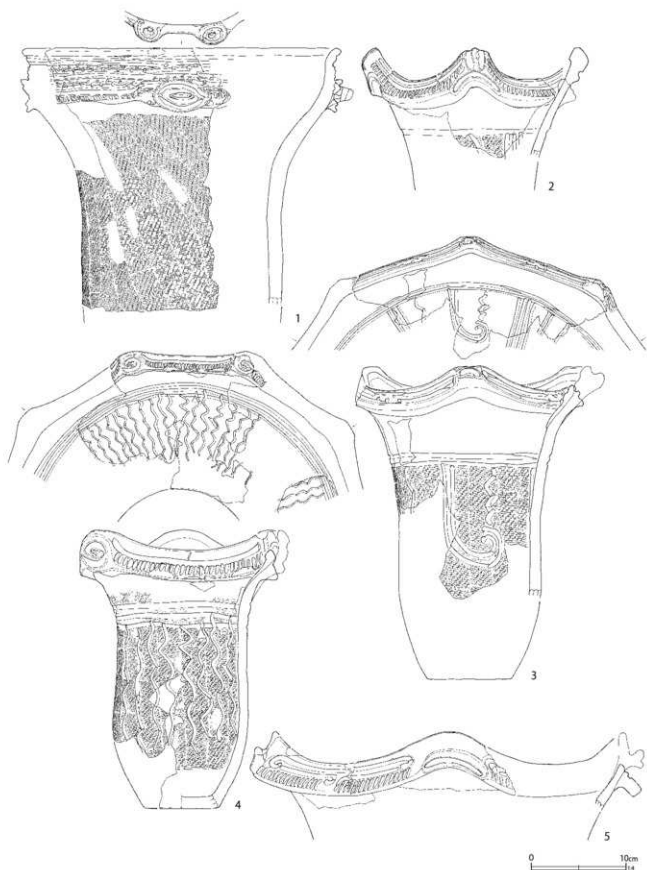
177～182は浅鉢形土器の破片である。177～179は丸みを帯びる肩部に文様を施文するもので、177、179は刻みのある隆帯で区画し、その間に沈線で弧線文や渦巻文などを施している。178は隆帯で区画した内側は地文を施文している。地文は単節R Lの縄文で、横方向に施文している。179の器面は丁寧に磨かれており、器面の内外面に赤彩が部分的に残存している。180、181は無文の口縁部の破片である。沈線で胴部を区画している。182は底部破片である。

第43図183～188は土製品である。

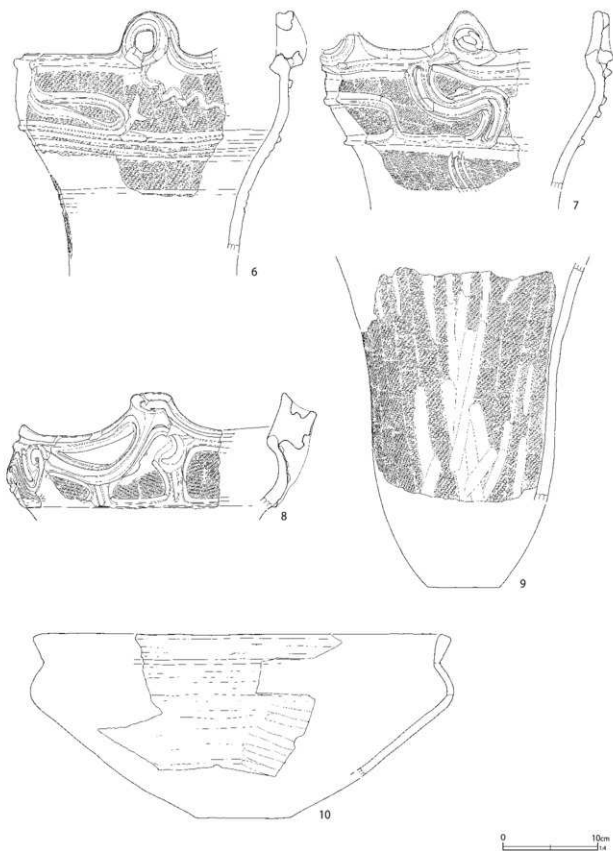
183～187は土製円盤である。土器片を利用して、周辺を打ち割って円盤状に加工している。184は連弧文系土器の破片を使用している。185は阿玉台系の土器を使用している。188は粘土塊である。手で握り潰したような形状となっている。

第44図は、6号住居跡出土土器である。

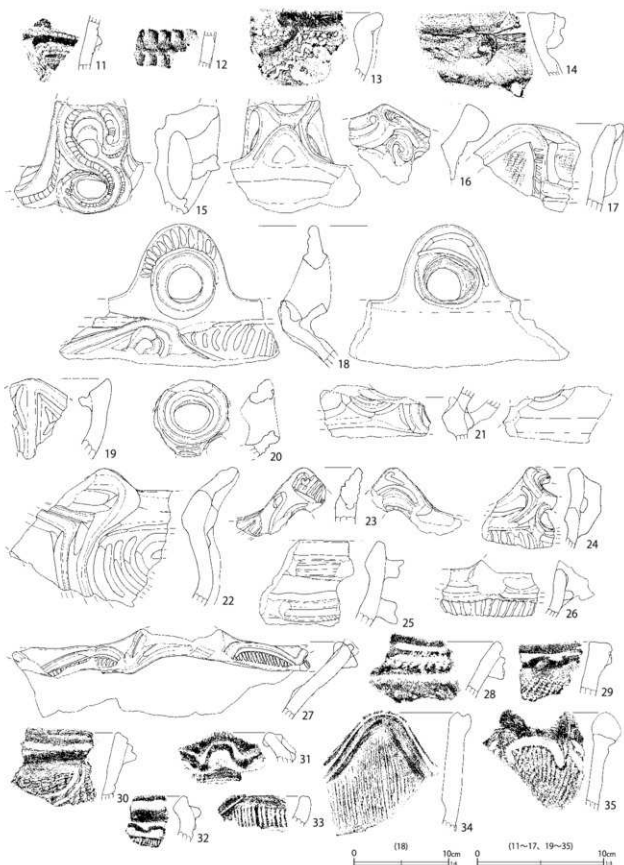
189～191は石畿である。189は黒曜石製で、薄



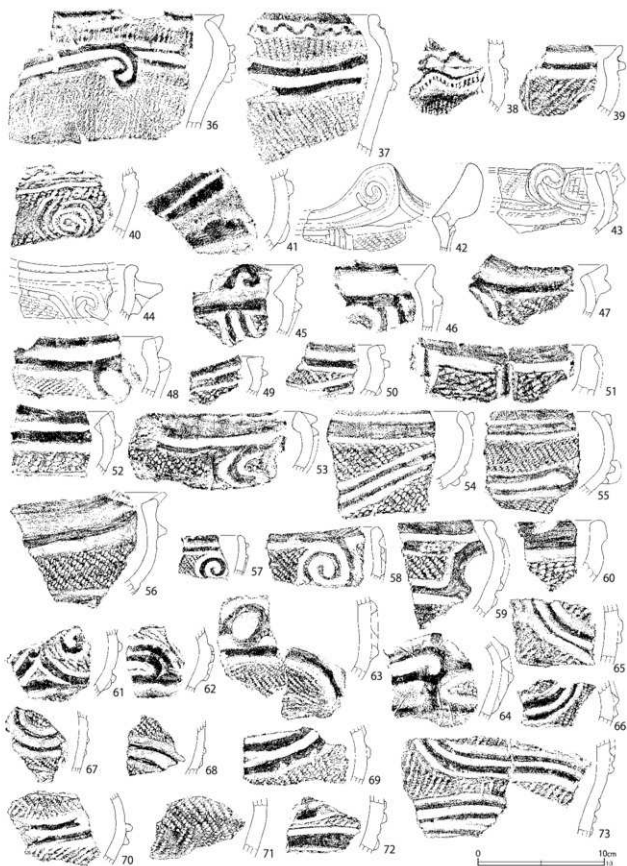
第37图 第6号住居跡出土遺物(1)



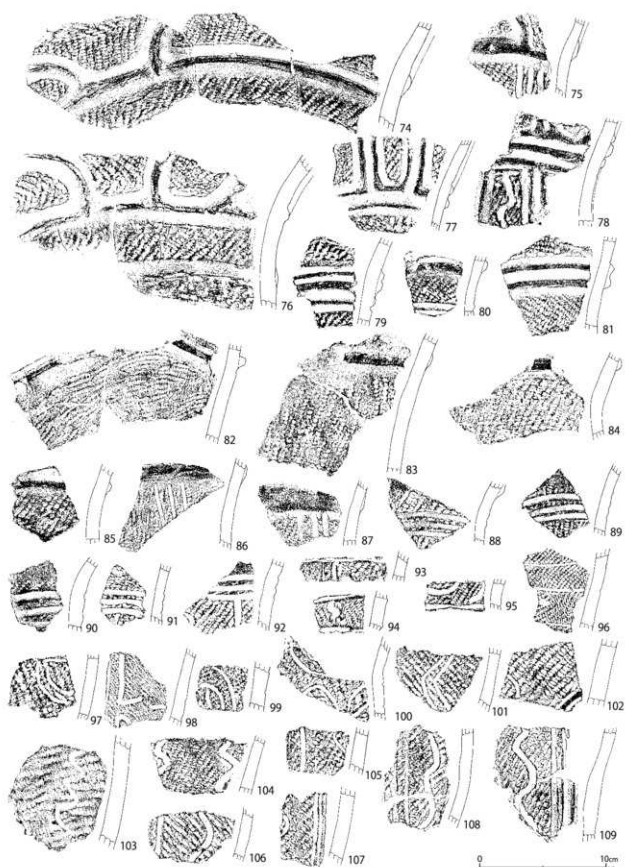
第38图 第6号住居跡出土遺物(2)



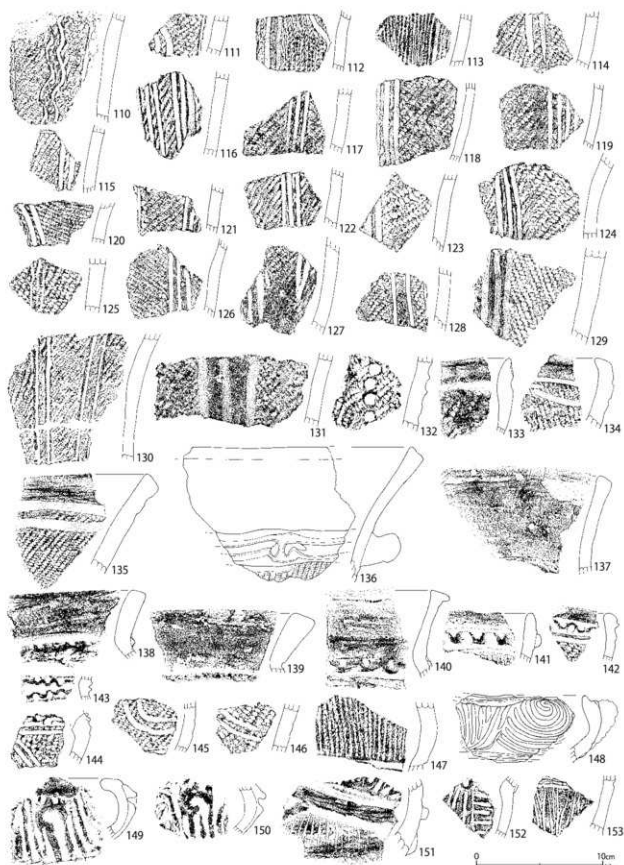
第39图 第6号住居跡出土遺物(3)



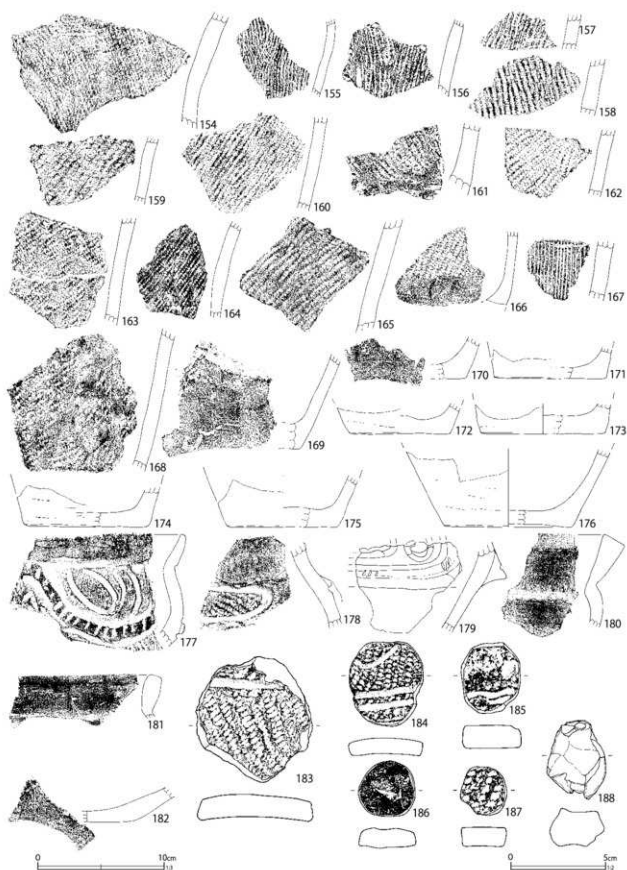
第40图 第6号住居跡出土遺物(4)



第41图 第6号住居跡出土遺物(5)



第42图 第6号住居跡出土遺物(6)



第43图 第6号住居跡出土遺物(7)

い剥片を素材とし、一次剥離面を残して縁辺を加工している。190はチャート製で、加工は比較的丁寧である。左脚部が欠損している。191もチャート製で、肉厚な剥片を素材として、縁辺を加工している。個々の剥離面が大きく粗雑である。先端に鋭さがなく肉厚であることから、石鏃の未製品であると判断した。

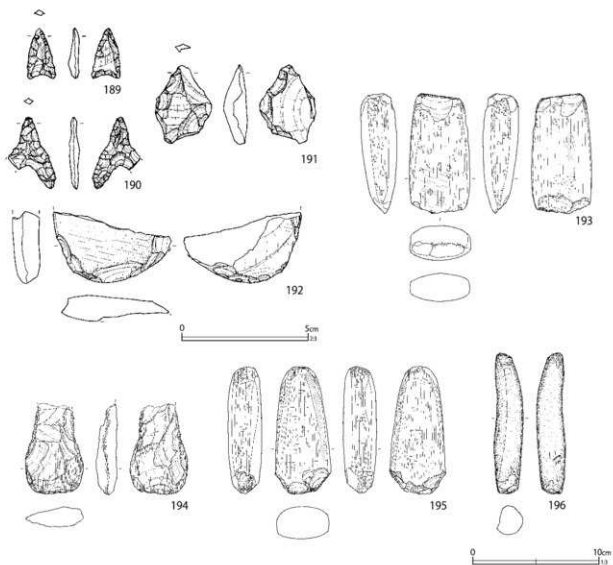
192は、黒色頁岩製のスクレイパーである。刃部のみが残存している。刃部には磨耗が見られる。

193、195は、磨製石斧である。193は定角式で、

全面に光沢が見られ、断面が隅丸長方形である。刃部に刃こぼれによる摩耗が見られる。195も定角式で、全面に光沢が見られる。断面が隅丸長方形である。平面はやや長細い。刃部は敲打によって潰れている。

194は、頁岩製の打製石斧である。短冊形で、刃部には使用による摩耗が見られる。両側縁に敲打痕が見られる。基部が欠損している。

196は、頁岩製の敲石である。棒状の礫を使用し、上下端部に敲打跡が見られる。



第44図 第6号住居跡出土遺物(8)

第7号住居跡 (第45図)

第7号住居跡はA区北西壁の中央、B-5、6グリッドで検出した。

他住居跡との重複関係は見られなかった。

他遺構との関係は第14、16号土坑と重複しており、第14号土坑に壊され、第16号土坑との新旧関係は明らかにできなかった。

覆土には比較的多くのローム粒子が含まれており、自然堆積と考えられる。

平面形態は円形と推定した。

規模は、長軸長6.0m、短軸長残存3.4m、深さ約65cm、長軸方位はN-12°-Eである。

がは調査範囲内からは検出できなかった。

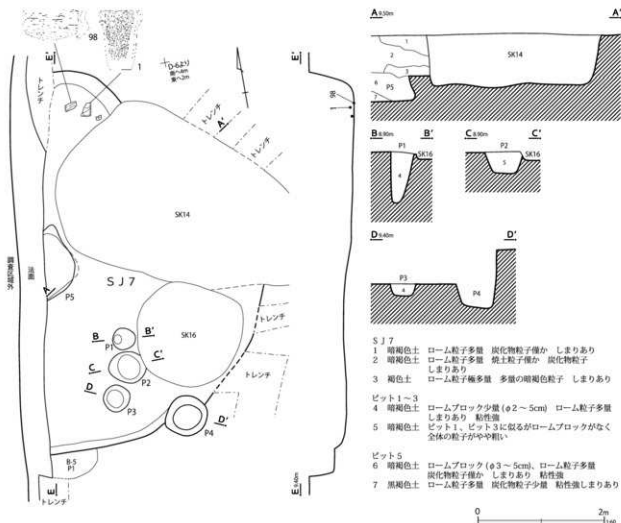
住居跡の床面から柱穴と考えられるピットを3

本検出した。

時期は加曾利E I 式期と推定される。

第46図～第49図は出土した遺物である。

第46図1～4は器形復元が可能な土器片で、いずれも深鉢形土器である。1は口縁部から胴部が残存しているもので、キャリパー形に近い器形である。口縁部には耳たぶ状の隆帯を貼付し、下端を粘土紐で連結させている。隆帯は部分的に渦巻状に施文している。胴部には2本1組の沈線で、屈曲の強い蛇行懸垂文を施文している。地文は単節L R の縄文を斜めから縦方向に施文している。推定口径は16cmである。2は口縁から胴部の一部が残存している。口縁部は無文で、胴部と2本の沈線を巡らせて区画している。胴部は地文のみが



第45図 第7号住居跡、遺物出土状況

第14表 第7号住居跡ピット一覧表(第45図)

名称	長径/cm	深さ/cm	名称	長径/cm	深さ/cm	名称	長径/cm	深さ/cm
P1	35	80	P2	55	33	P3	40	18
P4	65	36	P5	110	42			

第15表 第7号住居跡出土石器観察表(第49図)

番号	器種	石材	長さ/cm	幅/cm	厚さ/cm	重さ/g	備考
120	磨石	安山岩	[6.0]	[4.6]	5.3	160.8	被熱
121	敲石	砂岩	[11.9]	4.2	2.8	223.5	

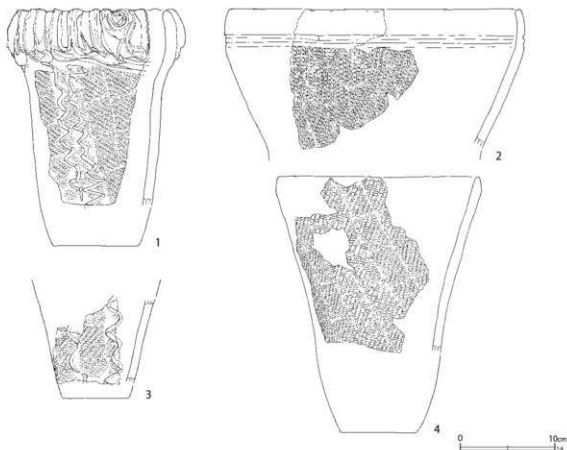
残っており、複節RLRの縄文を斜めから縦方向に施文している。推定口径は31cmである。3は胴下半のみ残存している。胴部には1本沈線で、屈曲の強い蛇行懸垂文を施文している。地文は単節RLの縄文を縦方向に施文している。4は口縁から胴部が残存している。器面には地文のみを施文している。地文は単節RLの縄文を施文している。条を縦方向に垂下するよう斜め方向に施文してい

る。推定口径は21cmである。

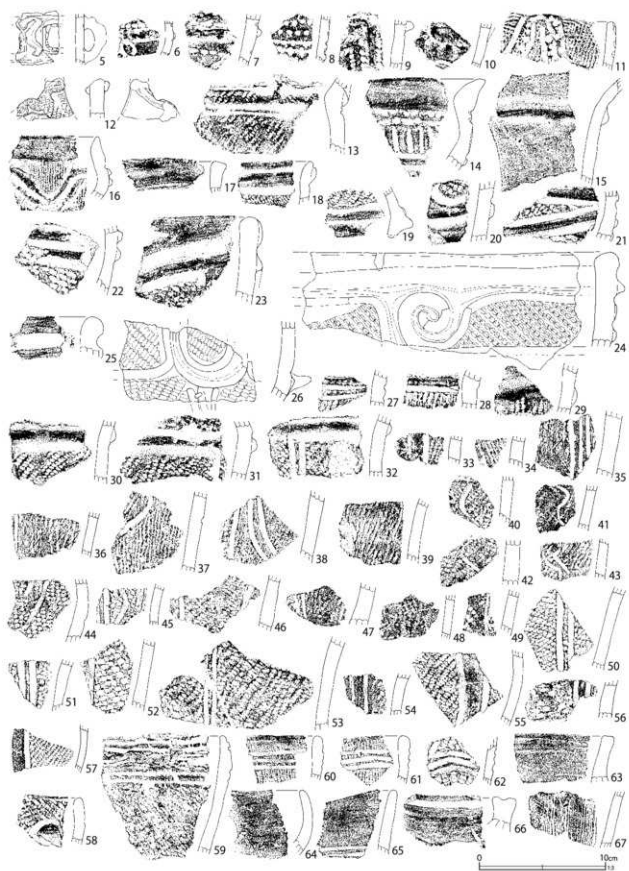
第47図 5～67、第48図68～105、第49図106～112は土器破片である。

5～10は阿玉台系土器である。隆帯に沿って結節沈線文などを施文している。

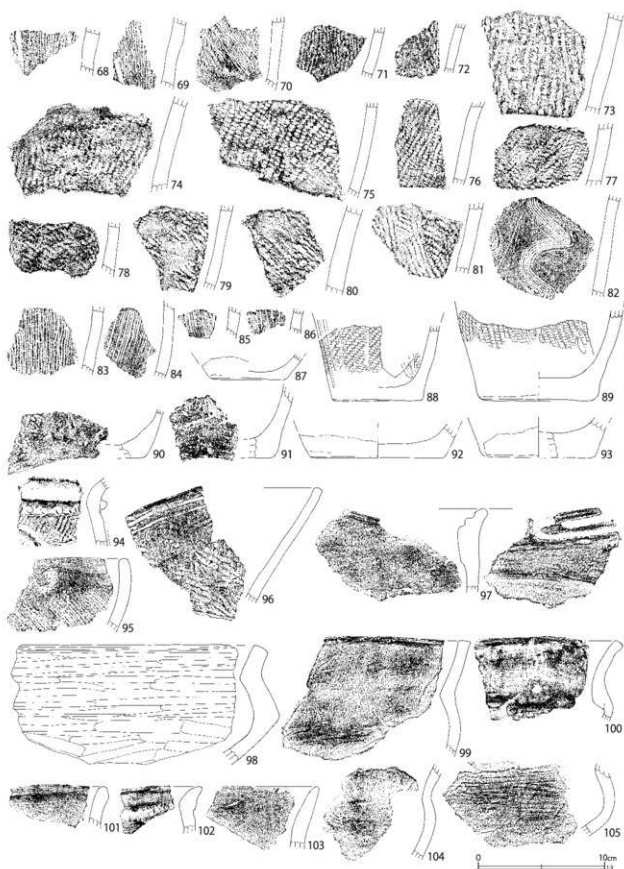
11～17は加曾利EⅠ式に伴うと考えられる阿玉台系や勝坂終末、中峠系の土器である。12は把手部分である。12、13は隆帯上に縄文を施文してい



第46図 第7号住居跡出土遺物(1)



第47图 第7号住居跡出土遺物(2)



第48图 第7号住居跡出土遺物(3)

る。14、16はキャリバー形の口縁部の破片である。15は無文で、頸部に隆帯を巡らせている。17は無文の口縁部である。11、16の地文は捺糸文Lである。12、13の地文は単節R Lの縄文である。

18～58、108は加曽利E系のキャリバー形の深鉢形土器の破片である。18～26は口縁部の破片である。隆帯で口縁部文様帯を区画し、渦巻文などを施文している。隆帯に沿って沈線を施文している。18～21は加曽利E I～II式で、22～26は加曽利E III式であると考えられる。19、20には頸部無文帯の一部が残存している。18の地文は捺糸文Rである。19～21、23、26の地文は単節R Lの縄文で、19は縦方向に、他は口縁部が横方向、胴部は縦方向に施文している。22、24の地文は複節R L Rの縄文で、横方向に施文している。27～32は頸部から胴部の破片である。27、28は頸部と胴部は沈線を巡らせて区画している。29～32は隆帯を巡らせて区画している。31、32の胴部には沈線で懸垂文を垂下させている。27、29～32の地文は単節R Lの縄文で、縦方向に施文している。28の地文は捺糸文Lである。33～57、108は胴部の破片である。33は隆帯で懸垂文を施文している。34～53は、沈線で蛇行懸垂文や垂下する懸垂文を施文している。54～57は沈線間を磨り消す磨消懸垂文を施文している。地文は単節R Lの縄文がほとんどを占めている。33、40～43、45～47、53～55、57は単節R Lの、48、49、51は単節L Rの縄文を縦方向に施文している。34～38の地文は捺糸文Lである。39の地文は無節Rである。44、50、52の地文は複節L R Lの縄文で、縦方向に施文している。51の地文は複節R L Rで、縦方向に施文している。58は口縁部文様帯を持たないもので、胴上部に逆U字文を施文し、文様内を磨り消している。吉井坩堝型の文様を持つと考えられる。地文は単節R Lの縄文で、口唇直下に1列横方向に施文し、胴部は縦方向に施文している。

59はバケツ状の器形となる深鉢形土器の口縁部

の破片で、口縁部は2本1組沈線で上下に区画し、区画内には地文のみを施文している。地文は無節Lの縄文である。口縁部は横や斜め方向、胴部は縦や斜め方向に施文している。

60～62は連弧文系の深鉢形土器の破片である。60、61は口縁部破片である。地文は橢圓状の条線で、地文施文後、沈線を3本口縁部に巡らせている。62は胴部の破片で、地文は単節R Lの縄文である。

63～66は無文の口縁部を持つ深鉢形土器の口縁部の破片である。63、65は口縁が外反し、頸部に括れる器形である。65は波状口縁で、胴部とは沈線を巡らせて区画している。64は無文の口縁が内湾して、頸部で屈曲している。66は面を持つ口端部に沈線を施文している。

67～70は地文が条線となる曾利系の深鉢形土器の胴部破片である。いずれも地文の条線は橢圓状となっている。器面には沈線によって懸垂文を施文している。磨消懸垂文と考えられる。条線は67～69は縦方向に施文し、70は斜め方向に施文している。

71～86は地文のみを施している深鉢形土器の胴部破片である。71の地文は捺糸文Rである。72の地文は捺糸文Lである。73～77の地文は単節R Lの縄文で、73は斜め方向に他は縦方向に施文している。78、79の地文は無節Lで、縦方向に施文している。80の地文は複節L R Lの縄文で、縦方向に施文している。81は単節L Rの縄文で、斜めや縦方向に施文している。82～86の地文は条線である。82は橢圓状工具で流水文状に施文している。83～85の条線は細かい橢圓状である。

87～93は深鉢形土器の底部の破片である。88は沈線で蛇行懸垂文と垂下する懸垂文を施文している。90、91の胴部には沈線による懸垂文が認められる。88、90の地文は単節R Lの縄文で、縦方向に施文している。89の地文は単節L Rの縄文で、縦方向に施文している。一箇所単節R Lの縄文を

縦方向に施文している。

94～107、109～112は浅鉢形土器の破片である。94は肩部に文様を施文するもので、無文の開く口縁部は隆帯で区画し、隆帯に沿って刺突文を施文している。地文は単節R Lの縄文で、斜め方向に施文している。95、111、112は条線を地文として施文している。95は斜め方向に施文している。96は口唇下に沈線を巡らすもので、地文は無節Lの縄文を縦方向に施文している。97は口縁部の内面に沈線で文様を施文している。98～107、109、110は器面が無文である。98、100、103、110の器面には赤

彩の痕跡が確認できた。

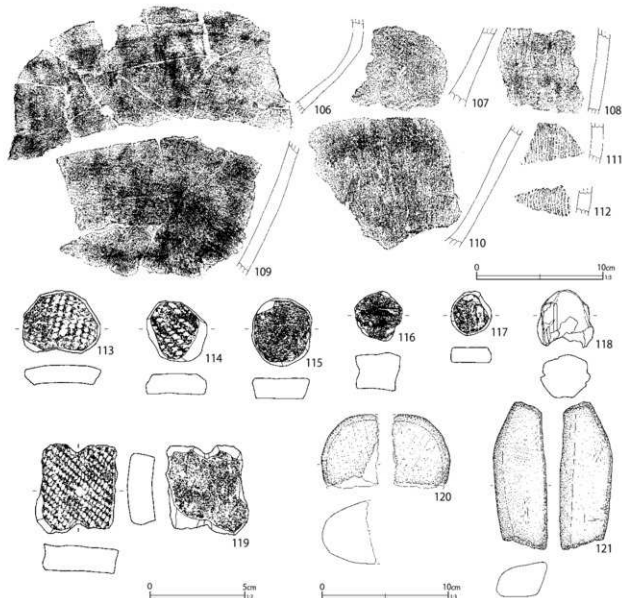
第49図113～119は土製品である。

113～117は土製円盤、118は粘土塊、119は土器片錘である。

第49図は、7号住居跡出土石器である。

120は、安山岩製の磨石である。平坦面は平滑に摩耗している。大部分を欠損している。被熱により赤色化している。

121は、砂岩製の敲石である。棒状の自然礫を使用しており、上下端部が敲打で潰されている。側縁も敲打され、一部は使用で摩耗している。



第49図 第7号住居跡出土遺物(4)

第9号住居跡 (第50図)

第9号住居跡はA区中央東よりのD-5、6グリッドで検出した。

他住居跡との関係は、第6、8号住居跡と重複し、これに壊されていた。

他遺構との重複関係は、第35号土坑と重複し、これに壊されていた。

覆土にはローム粒子が比較的多く均一に含まれており、概ね自然堆積と考えられる。

平面形態は略円形と推定した。

規模は、長軸長残存範囲4.2m、短軸長残存範囲2.5m、深さ約60cm、主軸方位はN-48°-Wである。

が跡は、調査範囲内からは検出できなかった。

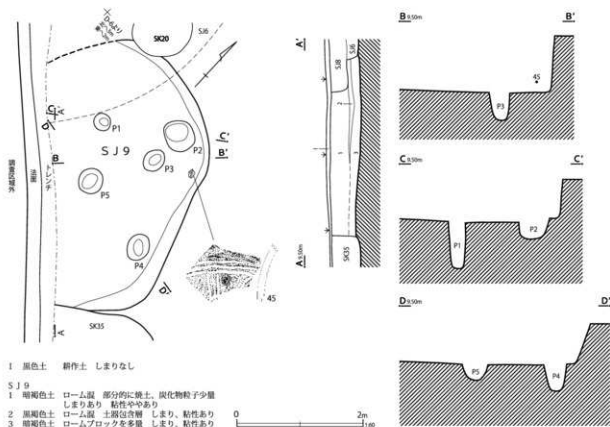
床面からは、5本のピットを検出し、柱穴と判断した。

時期は、明確にはできなかった。

第51図～53図は土器破片である。中心的な時期は加曽利E I式期である。

1、2は阿玉台系と勝坂系の折衷的な深鉢形土器の破片である。1は隆帯を貼付し、隆帯に沿って爪形文を施文している。2は口縁部の破片で、隆帯によって区画した内部には結節沈線文を施文し、隆帯上に刻みを施文している。

3～24は加曽利E I式に伴うと考えられる阿玉台系や勝坂系、中峠系の深鉢形土器である。3～8はキャリバー形土器の口縁部で、隆帯上や脇に文様を施文するものである。3の隆帯上には地文である0段多条LRの縄文を施文している。4は口縁部文様帯の区画を沈線で充填するもので、隆帯上には刻みを施している。5は口縁部文様帯の区画内に、単節RLの縄文を施文するもので、区



第50図 第9号住居跡、遺物出土状況

第16表 第9号住居跡ピット一覧表(第50図)

名称	長径/cm	深さ/cm	名称	長径/cm	深さ/cm	名称	長径/cm	深さ/cm
P1	27	73	P2	56	30	P3	36	43
P4	42	40	P5	40	25			

画する隆帯上には刺突文を施している。6は区画内に刺突文を施している。7、8は隆帯に沿って、円形刺突文を施している。区画内には単節R Lの縄文を施文している。9はキャリバー形土器の口縁部で、沈線文を施文している。10～12はバケツ状の器形であると考えられる。13～20は隆帯上に施文が見られないもので、13、14を除きキャリバー形土器である。14は把手部分である。隆帯で文様を施文している。15は口縁部が無文となっている。16、17は口縁部の破片で、隆帯のみ貼付し地文は施していない。18は把手部分が剥落して、区画内には沈線文を施文している。19は口縁から頸部が残り、隆帯で区画した内側は沈線文を施文している。地文は単節R Lの縄文で、縦方向に施文している。20、24はキャリバー形土器の口縁部屈曲が強いものである。20は口唇部が四角形状に面を持つもので、口縁部文様帯は隆帯を施文する。地文は単節L Rの縄文を横方向に施文している。24は隆帯を弧状に施文するもので、口唇部は四角形状で狭い無文帯を持っている。地文は桯糸文Lである。

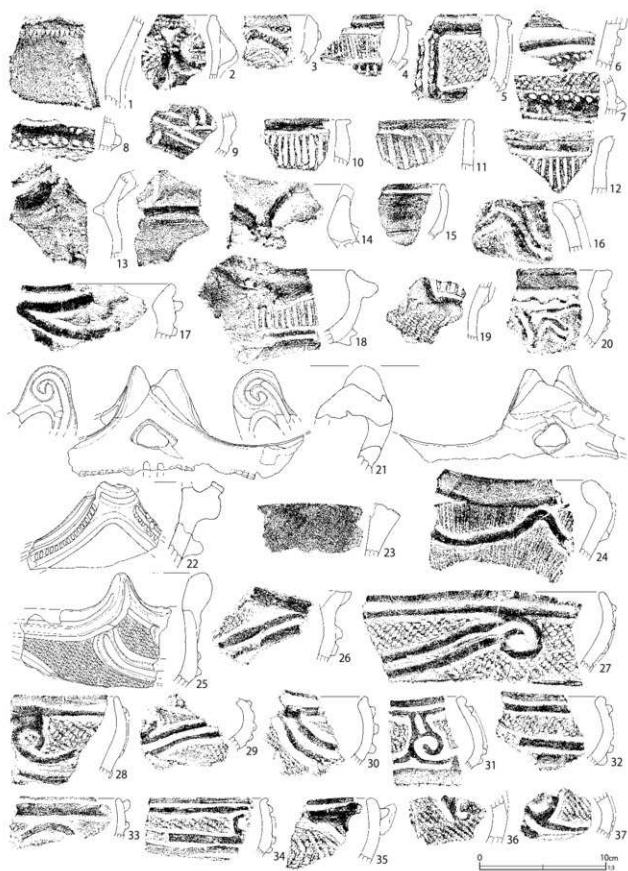
25～78は加曽利E系の深鉢形土器である。キャリバー形土器である。25～39は口縁部の破片である。口縁部は、隆帯で頸部や胴部と区画し、口縁部文様帯内は、隆帯で渦巻文やクランク文などを施文している。39は沈線が幅広く浅くなるもので、他と比べ新しい要素を持っている。地文は単節R Lの縄文が多く、26～29、31～33、35～38に斜めや横方向に施文している。25の地文は複節R L Rの縄文で、縦方向に施文している。30、34は0段多条R Lの縄文で横方向に施文している。39の地文は複節L R Lで、横方向に施文している。40～51は頸部から胴部の破片で、40～43は頸部を隆帯で

区画し、42、43の胴部には磨消懸垂文を施文している。45～51は沈線で区画している。45、46は頸部に無文帯が認められる。40、49の地文は桯糸文Lである。41～43、45、48、51の地文は単節R Lの縄文で、41、51は斜め方向に施文し、他胴部は縦方向に施文している。47、50の地文は0段多条R Lの縄文である。52～75は胴部の破片である。52、53は隆帯で文様を施文するもので、渦巻文の一部と考えられる。54～71は沈線で、蛇行懸垂文や垂下する懸垂文を施文している。垂下する2本1組や3本1組の懸垂文間に明確な磨り消しは認められない。72～75は垂下する磨消懸垂文を施文するもので、75は口縁部の文様が一部残るのもので、器形に括れがほとんどない。地文は単節R Lの縄文が多い。56～64、66、68～75が相当する。いずれも縦方向に施している。53、54の地文は桯糸文Lである。55の地文は無節Lである。52、65が単節L Rの縄文を、67が0段多条L Rの縄文を地文として縦方向に施文している。76～78は口縁部文様帯を持たない土器である。76、77は吉井城山類の土器で、地文は単節R Lの縄文で、口唇下一段分が横方向に、他は縦方向に施文している。78は微隆起線文で、大型渦巻文を施文する土器である。

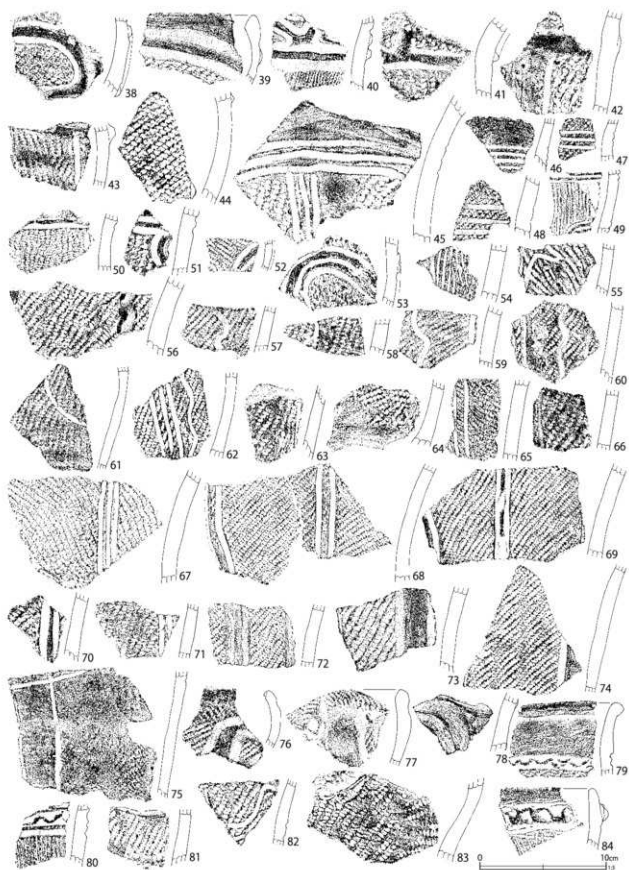
79は無文の開く口縁部を持つ器形の深鉢形土器で、胴部には単節R Lの縄文を地文として施文している。

80～84は連弧文系の深鉢形土器の破片である。80は頸部周辺の破片である。地文は桯糸文Lである。81～83は胴部の破片で、単節R Lの縄文を地文として縦方向に施文している。84は口縁部の破片で、地文は条線である。

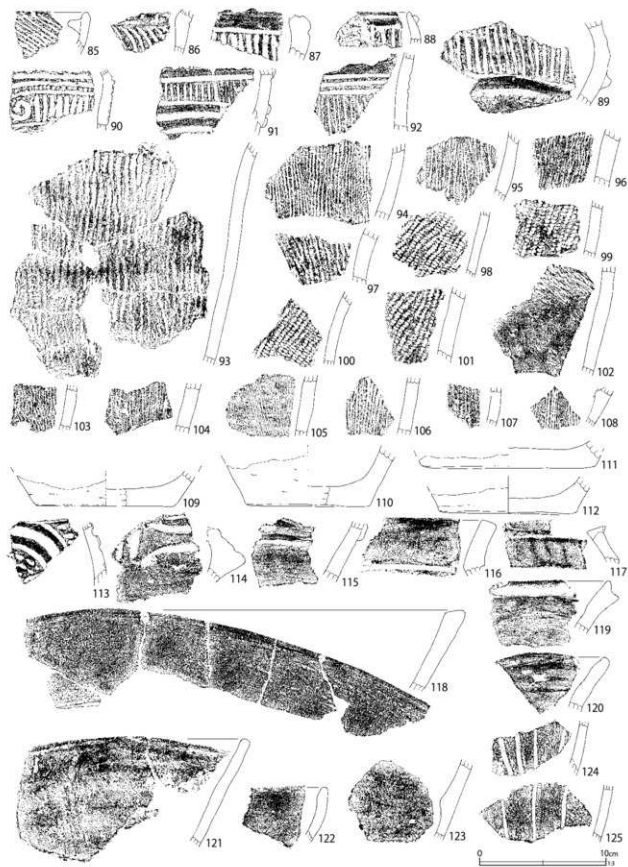
85～92は地文が条線となる曾利系の深鉢形土器の破片である。85は重弧文系の土器の口縁部であ



第51图 第9号住居跡出土遺物(1)



第52图 第9号住居跡出土遺物(2)



第53图 第9号住居跡出土遺物(3)

第17表 第9号住居跡出土石器観察表(第54図)

番号	器種	石材	長さ/cm	幅/cm	厚さ/cm	重さ/g	備考
129	石鏃	黒曜石	[1.1]	1.1	0.4	0.4	
130	石鏃	チャート	2.8	1.9	0.8	3.7	
131	磨石	安山岩	[6.7]	[4.9]	5.3	174.7	
132	磨製石斧		12.7	5.1	2.6	283.1	

る。86～89は器形がキャリバー形となるものである。

93～108は地文のみが残る深鉢形土器の胴部の破片である。93～96、103の地文は捺糸文Lである。97の地文は捺糸文Rである。98～101の地文は単節R Lの縄文である。102の地文は無節Lである。104～108の地文は条線である。

109～112は深鉢形土器の底部である。

113～123は浅鉢形土器である。113～115は肩部に文様帯を持つもので、113は降帯を施文し、地文は列点文を施している。114は沈線で文様を施文している。116～122は口縁部の破片である。

117は重ね付けた粘土が剥落し、生地部分が露出している。生地部分には指頭による圧痕が連続して残っており、指紋も確認できる。123は胴部の破片で、内外面に赤彩の痕跡が認められる。

124、125は後期縄之内式土器の胴部破片である。沈線文のみ施文している。

第54図126～128は出土した土製品である。いずれも土製円盤で、深鉢形土器の破片を打ち欠いて円形に加工している。

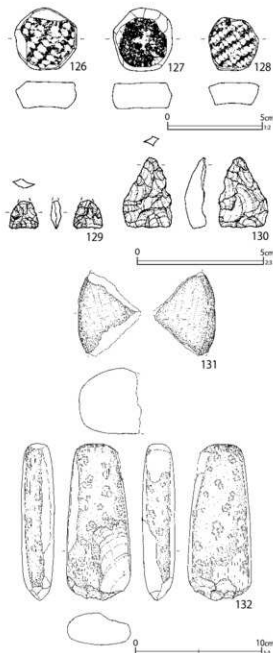
第54図は、9号住居跡出土石器である。

129、130は、石鏃である。129は黒曜石製で無茎、基部が平坦で先端が欠損する。130は、チャート製で無茎、基部が平坦で個々の剥離面が大きく粗雑であり、未製品の可能性がある。

131は、安山岩製の磨石である。周縁部を加工している。平坦面は平滑に摩耗している。大部分を欠損している。

132は、磨製石斧である。132は定角式で、表面全体に剥落が認められるが、これは使用ではなく

風化によるものと考えられる。断面が隅丸長方形である。平面形は長細い。刃部は使用によって剥離している。



第54図 第9号住居跡出土遺物(4)

(2) 炉跡

第1号炉跡 (第55図)

第1号炉跡は、G-9グリッドで検出した。

周辺からは、関連する施設は検出できなかった。

第55図1は炉体土器である。深鉢形土器で、口縁部文様帯部分を埋設して使用している。口唇部付近の被熱が著しい。頸部は、残存するが口縁部の約1/3が欠損している。口唇部は角頭状で、狭い無文部分が口唇下に巡る。口縁部文様帯には、平坦面をつけた隆帯で三角区画を作り、その内側を沈線で文様を施文している。三角区画内には、

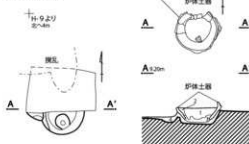
渦巻文やV字状文など、それぞれ違う文様を施文しているが、欠損部分も多く、その文様の配置は不明である。実測図の中央の区画内は隆帯で立体的な渦巻文を施文している。その左側区画内の渦巻文も細い隆帯を貼付している。わずかに残っている胴部には地文が確認できる。単節RLの縄文と考えられる。残存部から口径は30cmである。勝坂式木葉の土器と推定される。

第2号炉跡 (第55図)

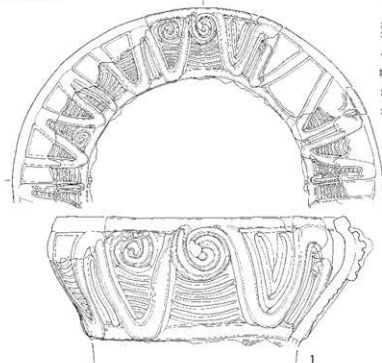
第2号炉跡も、第1号炉跡同様にG-9グリッ

第1号炉跡

第1号炉体土器

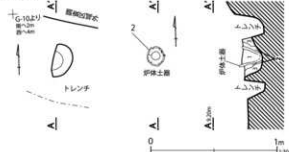


第1号炉跡



第2号炉跡

第2号炉体土器



第1号炉跡

- 1 暗赤褐色土 焼土 (φ1~5mm) 均等に多量 炭化物 (φ1mm) まばらに少量 しまりあり 粘性弱
- 2 褐色土 焼土 (φ1mm) 僅か しまりあり 粘性弱
- 3 にいり黄褐色土 地山土主体 ブロック状に堆積 埋戻し しまりあり 粘性あり
- 4 暗褐色土 焼土粒子多量 コーム粒子 圓り方 硬い

第2号炉跡

- 1 黒褐色土 焼土粒子僅か しまりあり 粘性弱
- 2 黒褐色土 焼土 (φ1~10mm) ブロック状に多量 しまりあり 粘性弱
- 3 黒褐色土 焼土 (φ1~2mm) しまりあり 粘性弱

第2号炉跡



第55図 第1、2号炉跡、出土遺物

ドで検出した。

周辺からは、関連する施設は検出できなかった。

第55図2は第2号が跡から出土したが体土器である。口縁部は欠損している。底部は打ち欠いて埋設したと考えられる。深鉢形土器で、粗雑に作られている。残存する胴部には地文のみを施文し

ている。底部周辺は、地文施文後にナデ状の器面調整を加えて地文を磨り消している。部分的に、胴中央付近まで調整を行っている。地文は無節線で、縦方向に施文している。土器の時期は加曽利E I 式期と考えられるが、詳細な時期は不明である。

(3) 埋甕

第1号埋甕 (第56図)

第1号埋甕は、E-8 グリッドで検出した。

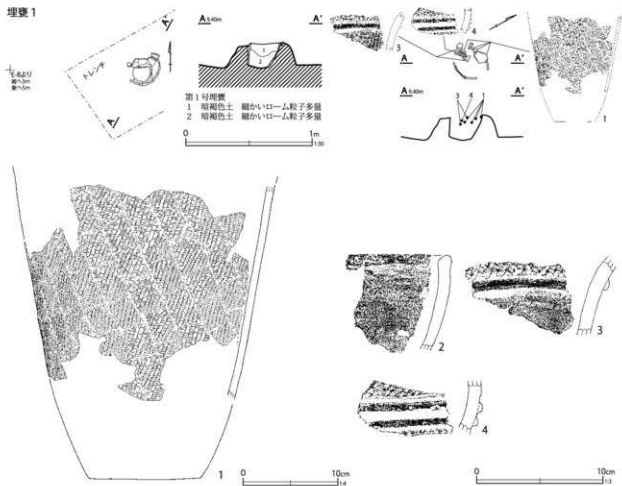
周辺からは、関連する施設は検出できなかった。

第56図1～4は、出土した土器である。1は埋甕として埋設されていた深鉢形土器である。胴部のみ残存している。埋設時に底部を破損させたと考えられる。口縁部は埋設後に欠損したと考えら

れる。胴部には地文のみを施文している。0段多条のRLの縄文を斜め縦方向に施文し、条を縦方向になるような効果を出している。

2～4は周辺で検出した土器破片であるが、すべて別個体の破片であり、1と同一個体のものは検出できなかった。土器の時期は加曽利E I 式期である。

埋甕 1



第56図 第1号埋甕、出土遺物

(4) 小竪穴状遺構 (第57～65図)

浅間下遺跡からは土壌を50基検出したが、この中の37基は下総台地に典型的に見られるとされるいわゆる小竪穴状遺構である。

調査時に土壌としたものは、番号を変えず、名称を土壌と小竪穴状遺構に分離した (第18表)。この結果、土壌が13基、小竪穴状遺構が37基となった。煩雑さを避けるため、図面は両者を一括して第57～65図に掲載し、略号はS Kのままとした。

小竪穴状遺構は貯蔵用の施設、墓壇、あるいは、前者が転用された墓壇と考えられる。平面形態は円形で、立ち上がりは垂直に近く、比較的深い状態で検出した。底面中央にはビットが見られ、特徴的に遺物が出土する例も散見される。

例えば、第15号、37号、48号小竪穴状遺構では深鉢が、第22号、23号小竪穴状遺構では浅鉢がほぼ完形で出土しているが、いずれも遺構の片隅に寄った形で検出されている点に、特徴が認められる。

第18表に小竪穴状遺構の諸元を提示した。

第67図～第99図は出土遺物である。

第3号小竪穴状遺構出土遺物 (第67図1、第76図1～9)

第67図1は深鉢形土器の胴下半から底部である。胴部には地文のみを残し、単節RLの縄文を縦方向に施文している。底部周辺には地文を施文していない。底部内外面に被熱の痕跡が認められる。第76図1～9は土器破片である。1、2は阿玉台系で、1は結節沈線施文を施文している。3～8は深鉢形土器の胴部である。3～5は地文のみを施文している。3、5の地文は単節LR、4は0段多条RLの縄文である。6～8は無文である。9は深鉢形土器の底部である。遺構の時期は、第67図1から、勝坂式末から加曽利EⅠ式と推定される。

第6号小竪穴状遺構出土遺物 (第67図2、第76図10～50)

6号小竪穴状遺構は、6a、6bに分かれてい

第18表 小竪穴状遺構と土壌の分別

調査時の名称	新しい名称
1号土壌	1号土壌
2号土壌	2号土壌
3号土壌	3号小竪穴状遺構
4号土壌	4号小竪穴状遺構
5号土壌	5号土壌
6a号土壌	6a号小竪穴状遺構
6b号土壌	6b号小竪穴状遺構
7号土壌	7号小竪穴状遺構
8号土壌	8号小竪穴状遺構
9号土壌	9号小竪穴状遺構
10号土壌	10号小竪穴状遺構
11号土壌	11号小竪穴状遺構
12号土壌	12号小竪穴状遺構
13号土壌	13号小竪穴状遺構
14号土壌	14号小竪穴状遺構
15号土壌	15号小竪穴状遺構
16号土壌	16号小竪穴状遺構
17号土壌	17号小竪穴状遺構
18号土壌	18号小竪穴状遺構
19号土壌	19号土壌
20号土壌	20号土壌
21号土壌	21号小竪穴状遺構
22号土壌	22号小竪穴状遺構
23号土壌	23号小竪穴状遺構
24号土壌	24号小竪穴状遺構
25号土壌	25号小竪穴状遺構
26号土壌	26号小竪穴状遺構
27号土壌	27号小竪穴状遺構
28号土壌	28号小竪穴状遺構
29号土壌	29号小竪穴状遺構
30号土壌	30号小竪穴状遺構
31号土壌	31号土壌
32号土壌	32号土壌
33号土壌	33号土壌
34号土壌	34号土壌
35号土壌	35号小竪穴状遺構
36号土壌	36号小竪穴状遺構
37号土壌	37号小竪穴状遺構
38号土壌	38号小竪穴状遺構
39号土壌	39号小竪穴状遺構
40号土壌	40号小竪穴状遺構
41号土壌	41号小竪穴状遺構
42号土壌	42号土壌
43-1号土壌	43a号土壌
43-2号土壌	43b号小竪穴状遺構
44号土壌	44号小竪穴状遺構
45号土壌	45号土壌
SJ3下SK1	46号小竪穴状遺構
SJ3下SK2	47号土壌
SJ4内土器集中	48号小竪穴状遺構

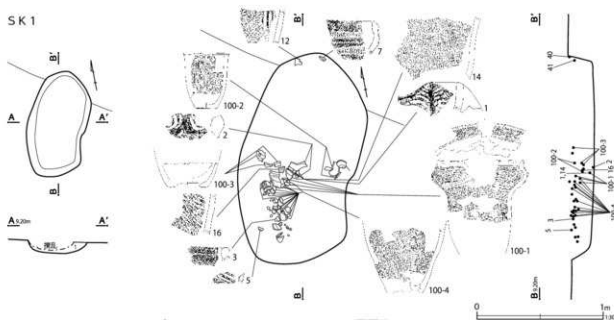
第19表 小竪穴状遺構一覧表(第57～66図)

旧名称	新名称	グリッド	平面形	長軸方位	長軸×短軸/m	深さ/cm	重複遺構
SK3	3号小竪穴状遺構	A・B-6	楕円形	N-52°・E	[2.15]×[1.50]	60	SK5新旧不明
SK4	4号小竪穴状遺構	A-6	円形?	N-10°・E	1.20×0.50	88	SJ5(旧)
SK6a	6a号小竪穴状遺構	C-5・6	隅丸長方形	N-9°・W	3.95×2.35	53	
SK6b	6b号小竪穴状遺構	C-5・6	円形	N-0°	1.90	85	
SK7	7号小竪穴状遺構	C-5・6	楕円形	N-39°・W	[2.69]×2.13	78	
SK8	8号小竪穴状遺構	C-6	円形	N-17°・W	2.36×[2.16]	77	
SK9	9号小竪穴状遺構	C-6	楕円形	N-59°・W	[2.88]×2.18	96	
SK10	10号小竪穴状遺構	B-6	円形	N-35°・W	2.54×(2.45)	85	SK11(旧)
SK11	11号小竪穴状遺構	B-6	円形	N-54°・E	2.23×2.08	92	SK10(新)
SK12	12号小竪穴状遺構	B・C-6	楕円形	N-83°・W	3.53×2.17	45	尖頭器
SK13	13号小竪穴状遺構	B-6	円形	N-3°・E	2.57×2.56	68	
SK14	14号小竪穴状遺構	B-5・6	楕円形	N-55°・W	4.23×2.36	85	SK13・16新旧不明 SJ7(旧)
SK15	15号小竪穴状遺構	C-6	円形	N-52°・W	2.50×2.50	72	
SK16	16号小竪穴状遺構	B-6	円形	N-49°・W	1.65×1.60	10	SK7と新旧不明
SK17	17号小竪穴状遺構	D-7	楕円形	N-48°・W	2.00×1.72	82	SK18(旧)
SK18	18号小竪穴状遺構	D-7	円形	N-53°・W	2.30×(1.76)	63	SK17(新)
SK21	21号小竪穴状遺構	D-6	楕円形	N-12°・W	2.60×2.24	55	
SK22	22号小竪穴状遺構	D-7・8	楕円形	N-44°・W	2.92×2.04	65	
SK23	23号小竪穴状遺構	D-7	円形	N-15°・W	2.45×2.23	75	
SK24	24号小竪穴状遺構	C-6	楕円形	N-39°・E	2.50×2.31	100	
SK25	25号小竪穴状遺構	C・D-6	楕円形	N-68°・W	2.78×(2.42)	84	SK27新旧不明
SK26	26号小竪穴状遺構	C・D-6	楕円形	N-7°・W	2.25×1.95	74	SK27(旧)
SK27	27号小竪穴状遺構	C-6	円形	N-12°・E	2.30×(2.18)	63	SK26(新) SK25新旧不明
SK28	28号小竪穴状遺構	C-6	円形	N-29°・W	2.70×(2.40)	80	SK29(旧)
SK29	29号小竪穴状遺構	C-6	楕円形?	N-72°・W	(2.00)×(1.40)	65	SK28(新)
SK30	30号小竪穴状遺構	D-6・7	楕円形	N-82°・W	2.80×2.13	77	SK31新旧不明
SK35	35号小竪穴状遺構	E-6	楕円形?	N-44°・E	(1.77)×(1.70)	45	SJ9(旧)
SK36	36号小竪穴状遺構	D-7	楕円形?	N-50°・W	(1.73)×1.70	50	(D-E-7) SK43新旧不明
SK37	37号小竪穴状遺構	E-7	円形	N-21°・W	2.10×1.98	70	
SK38	38号小竪穴状遺構	E-7・8	円形	N-34°・E	2.40×[2.40]	67	
SK39	39号小竪穴状遺構	E-7	不明	N-28°・E	2.50×?	80	SK40新旧不明
SK40	40号小竪穴状遺構	E-7	不明	N-15°・E	2.00×?	84	
SK41	41号小竪穴状遺構	E-8	楕円形	N-34°・W	2.07×1.80	78	
SK43	43b号小竪穴状遺構	D・E-7	円形	N-50°・W	1.80×1.60	74	SK36新旧不明
SK44	44号小竪穴状遺構	D-6	楕円形	N-5°・E	2.13×1.72	77	SK32新旧不明
SJ3 F1	46号小竪穴状遺構	F-9	楕円形	N-47°・E	1.50×1.25	29	SJ3(新)
SJ4内土器集中	48号小竪穴状遺構						

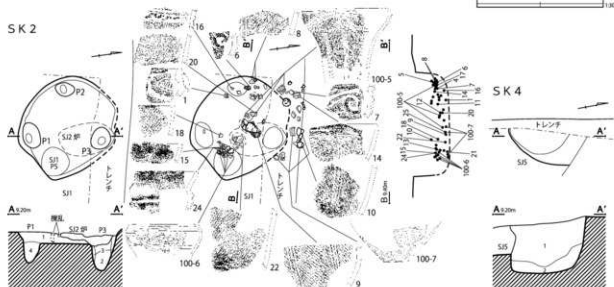
リバー形の深鉢形土器の胴部から底部である。2本1組の沈線を垂下させた懸垂文を9単位施文している。地文は複線L R Lの縄文を施文している。第76図10～48は土器破片である。10、11、13は阿玉台系の深鉢形土器である。10は口縁部で、結節沈線文を施している。11は胎土に金雲母を多く含む土器で、波状沈線文や、ひだ状に施した爪形文や、ペン先状の刺突列を施文している。13は三角形

の区画内に刺突列を施文している。12は中峠系の深鉢形土器である。14は隆帯上にも縄文を施文している。地文は単線L R Lの縄文である。15～29はキャリバー形の深鉢形土器である。15～18は口縁部から頸部で、18の頸部は無文帯を持ち、沈線文を巡らせて胴部と区画している。19、20は頸部との区画に隆帯を用いている。21～29は胴部で、21は隆帯で文様を施文している。22～29は沈線で、

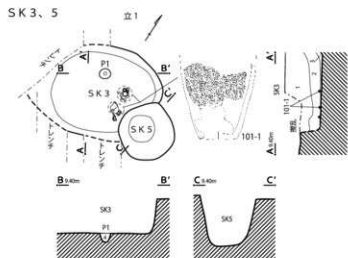
SK 1



SK 2

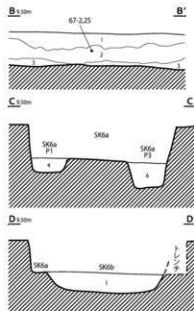
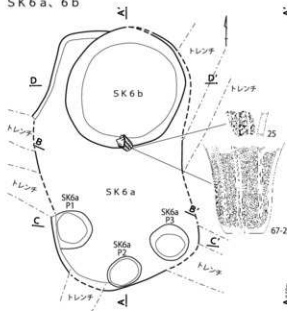


SK 3、5

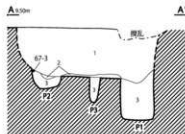
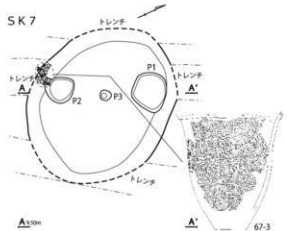
SK 1
1 暗褐色土 ローム小ブロック (φ1cm) ローム粒子多量SK 2
1 暗褐色土 ローム粒子まばらに少 焼土粒子僅か しまりあり
粘性ややあり
2 黒褐色土 焼土僅か しまり弱 粘性なし
ローム少量 焼土僅かに混入する しまり弱
8層中にロームをブロック状に混入する しまり弱
粘性あり
3 暗褐色土
ローム僅か しまりややあり 粘性弱SK 3
1 暗褐色土 (細粒と粗粒、φ2~3mm) 多量
焼土粒子少量 炭化物粒子 しまり強
ローム粗粒少量 焼土粒子僅か 炭化物粒子
2 暗褐色土 ローム主体 暗褐色粒子少量
3 暗褐色土 ローム粒子多量 炭化物粒子僅か しまりあり
4 暗褐色土SK 4
1 暗褐色土 ロームブロック (φ1cm) 少量 ローム粒子多量
焼土粒子僅か
2 暗褐色土 ①層に於けるがロームブロックの混入多量 粒子が細かい0 2m
1m

第57図 縄文時代の小竪穴状遺構と土壌 (1)

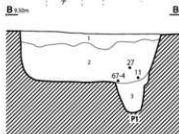
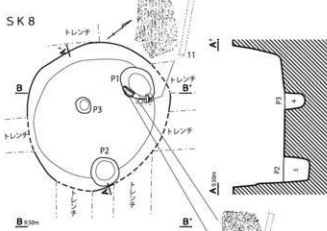
SK 6 a、6 b



SK 7



SK 8



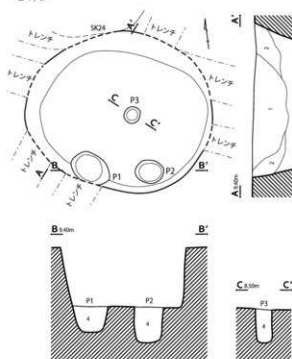
- SK 6 a
- 1 暗褐色土 ローム粒子多量 焼土粒子僅か 炭化物粒子 しまり強
 - 2 黒褐色土 ローム粒子多量 1層よりしまり強
 - 3 褐色土 ローム主体 黒褐色粒子多量
 - 4 極暗褐色土 ローム粒子多量 炭化物粒子少量 焼土粒子僅か しまりあり
 - 5 暗褐色土 ロームブロック (φ3~5cm) 少量 ローム粒子多量 炭化物粒子 しまりあり
 - 6 暗褐色土 ロームブロック (φ3~5cm) 少量 ローム粒子多量 炭化物粒子 しまりあり
- SK 6 b
- 1 暗褐色土 ロームブロック (φ1~5cm) 少量 ローム粒子多量 粘性強 しまりあり

- SK 7
- 1 暗褐色土 ロームブロック (φ1~2cm) ローム粒子多量 焼土粒子僅か
 - 2 暗褐色土 ロームブロック (φ1~2cm) 炭化物粒子
 - 3 暗褐色土 ローム主体 暗褐色粒子多量
 - 4 ロームブロック (φ1cm) 僅か ローム粒子多量
- SK 8
- 1 暗褐色土 ローム粒子多量 焼土粒子少量
 - 2 暗褐色土 ロームブロック (φ3~5cm) ローム粒子多量 焼土粒子僅か
 - 3 暗褐色土 ロームブロック (φ1~2cm) 少量 ローム粒子多量
 - 4 にぶい黄褐色土 ロームブロック (φ3cm 大) 少量 ローム粒子多量 炭化物粒子 しまりあり

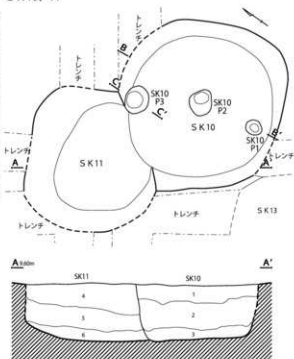
0 2m 1:50

第58図 縄文時代の小竪穴状遺構と土壌 (2)

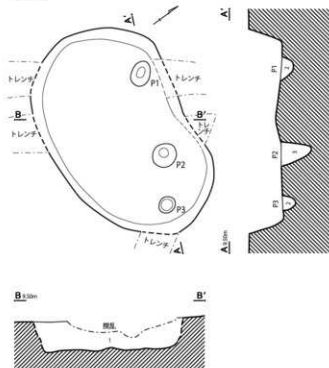
SK 9



SK 10, 11



SK 12



SK 9

- 1 黒褐色土 ローム粒子少量 焼土粒子 しまり弱
- 2 暗褐色土 ローム粒子少量 炭化物粒子 しまりあり
- 3 暗褐色土 ロームブロック (φ3~5cm) 少量 ローム粒子多量 しまりあり
- 4 暗褐色土 ロームブロック (φ2~5cm) ローム粒子多量 炭化物粒子僅か しまり弱

SK 10

- 1 暗褐色土 ローム粗粒子 (φ1~2cm) ローム粒子、焼土粒子少量 しまり強
- 2 暗褐色土 ロームブロック (φ2~5cm) 少量 ローム粒子多量 しまりあり (1層よりややわらかい)
- 3 褐色土 ローム主体 暗褐色粒子多量

SK 11

- 4 黒褐色土 ローム粗粒子 (φ1~2cm) ローム粒子多量 炭化物粒子少量 焼土粒子 しまり強
- 5 黒褐色土 ローム粗粒子 (φ1~2cm) ローム粒子多量 しまり強
- 6 褐色土 ローム主体 黒褐色粒子多量
- 7 暗褐色土 ロームブロック (φ2~4cm) 少量 ローム粒子多量 しまり弱

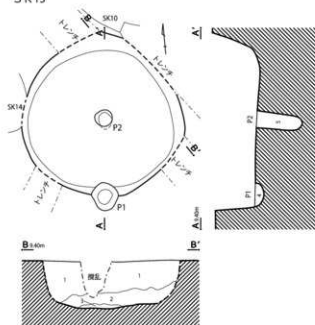
SK 12

- 1 暗褐色土 ローム粒子多量 炭化物粒子僅か しまり強
- 2 暗褐色土 ロームブロック (φ5cm 大) ローム粒子多量 しまり強
- 3 黒褐色土 ロームブロック (φ2~5cm) ローム粒子多量 しまり中々あり

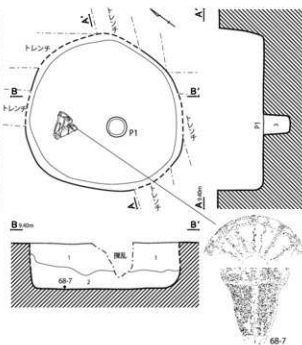
0 2m
1:100

第59図 縄文時代の小竪穴状遺構と土壌 (3)

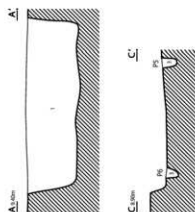
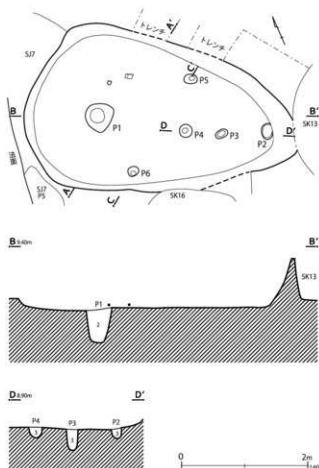
SK13



SK15



SK14



SK13

- 1 暗褐色土 ロームブロック少量 ローム粒子多量 焼土粒子僅か
しまり強
- 2 暗褐色土 ロームブロック(φ3~5cm)少量 ローム粗粒子
(φ1~2cm) ローム粒子多量 しまり強
- 3 褐色土 ローム主体 暗褐色粒子少量
- 4 暗褐色土 ローム粒子少量 しまり強
- 5 暗褐色土 ローム粒子多量 炭化物粒子少量 しまりややあり

SK14

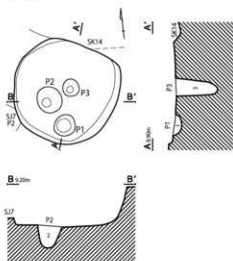
- 1 暗褐色土 ロームブロック(φ1~3cm) ローム粗粒子(φ1~2mm)多量 焼土粒子少量 炭化物粒子 しまりあり
- 2 暗褐色土 1層に似るがローム粒子の混入が少ない
- 3 暗褐色土 ロームブロック(φ1~2cm) ローム粒子極多量
しまり弱

SK15

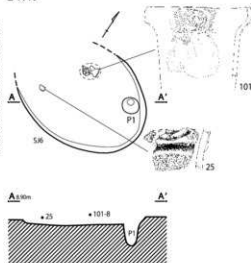
- 1 暗褐色土 ローム粒子多量 焼土粒子僅か 炭化物粒子
しまり強
- 2 暗褐色土 1層と似るがロームブロック(φ2~3cm)少量
- 3 褐色土 ローム主体 暗褐色粒子多量

第60図 縄文時代の小壁穴状遺構と土壌(4)

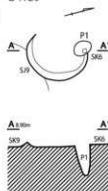
SK 16



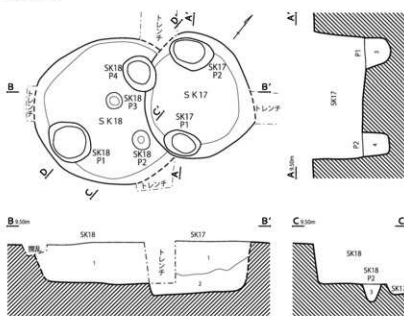
SK 19



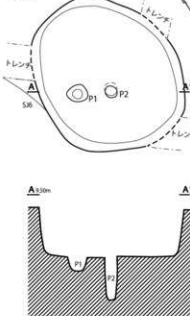
SK 20



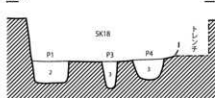
SK 17, 18



SK 21



D 20m



SK 16

- 1 褐色土
- 2 黒褐色土
- 3 暗褐色土

SK 17

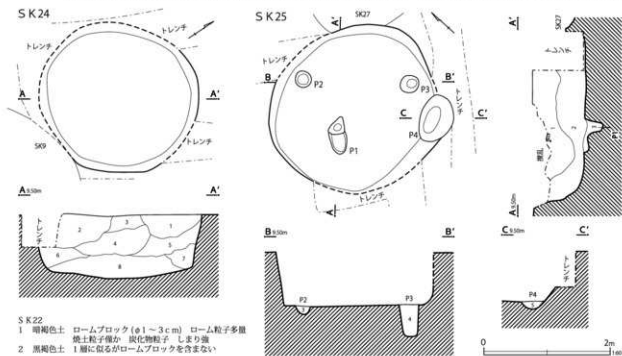
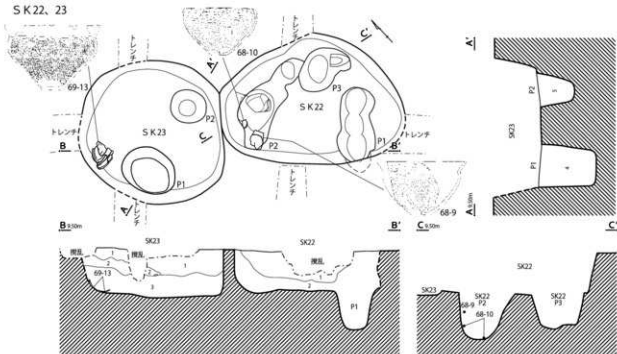
- 1 ローム主体 暗褐色土多量 炭化物粒子僅か
- 2 ローム多量 暗褐色土多量 炭化物粒子少 しまりあり
- 3 ロームブロック (φ1~2cm) 少量
- 4 ローム多量 暗褐色土多量 炭化物粒子僅か

SK 18

- 1 暗褐色土
- 2 暗褐色土
- 3 暗褐色土

第61図 縄文時代の小竪穴状遺構と土壌(5)

SK 22, 23



- SK 22
1 暗褐色土 ロームブロック (φ1~3cm) ローム粒子多量
2 焼土粒子僅か 炭化物粒子 しまり強
3 黒褐色土 1層に似るがロームブロックを含まない

- SK 23
1 暗褐色土 ローム粒子多量 焼土粒子少量 炭化物粒子 しまり強
2 暗褐色土 ローム粒子多量 焼土粒子僅か 炭化物粒子 しまり強
3 暗褐色土 ロームブロック (φ1~2cm) 少量 ローム粒子多量 焼土
4 暗褐色土 ローム粒子少量 炭化物粒子僅か
5 暗褐色土 ローム主体 ローム粒子多量 焼土粒子、炭化物粒子僅か
下半分は褐色土

- SK 24
1 暗褐色土 ローム主体 暗褐色粒子多量
2 褐色土 ローム主体 暗褐色粒子多量
3 暗褐色土 ローム粒子少量 焼土粒子僅か しまり強
4 黒褐色土 ローム粒子少量 焼土粒子 炭化物粒子

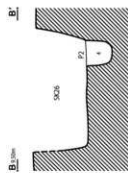
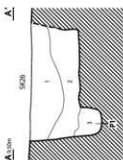
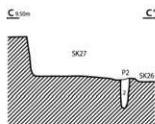
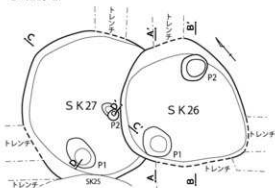
- SK 25
5 暗褐色土 ローム粒子少量 焼土粒子僅か しまり強
6 暗褐色土 ロームブロック (φ1~3cm) 少量 ローム粒子多量 炭化物粒子
7 暗褐色土 ローム粒子多量 炭化物粒子少量
8 暗褐色土 ローム主体 炭化物粒子多量
9 褐色土 ローム粒子多量 炭化物粒子少量 焼土粒子僅か

第62図 縄文時代の小竪穴状遺構と土壌 (6)

垂下する懸垂文や蛇行懸垂文を施文している。29は磨消懸垂文を施文している。地文として16は単節LRの縄文を、19は燃糸文Rを施文している。他は単節RLの縄文を施文している。30～32は曾

利系の深鉢形土器である。30、31は剥落しているが、重弧文土器の口縁部である。33は外反する口縁部が無文となる。34は加曽利E式末葉の土器で、口縁部文様帯はなく、口縁部は狭い無文帯となっ

S K 26、27



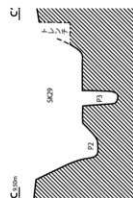
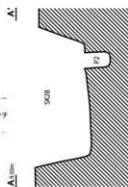
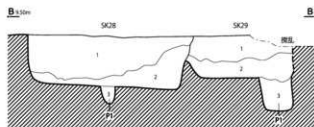
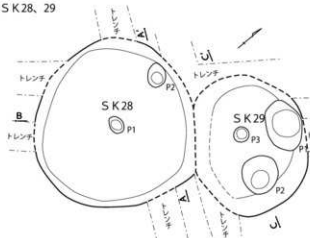
S K 26

- 1 暗褐色土 ローム粒子多量 炭化物粒子少量 炭化物粒子 しまり強
- 2 暗褐色土 ローム粒子少量 炭化物粒子少量 炭化物粒子 しまり弱
- 3 褐色土 ロームブロック (φ5cm 大) 多量 暗褐色土粒子多量 しまりなし
- 4 暗褐色土 ロームブロック (φ2cm 大) ローム粒子少量 炭化物粒子 しまり弱

S K 27

- 1 暗褐色土 ローム主体 ロームブロック (φ1～3cm) 少量 ローム粒子多量
- 2 暗褐色土 炭化物粒子少量 しまり弱
- 3 暗褐色土 暗褐色土粒子多量 炭化物粒子少量

S K 28、29



S K 28

- 1 暗褐色土 ローム粒子多量 炭化物粒子少量 炭化物粒子 しまり強
- 2 暗褐色土 ローム粒子多量 炭化物粒子少量 しまりあり

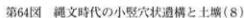
S K 29

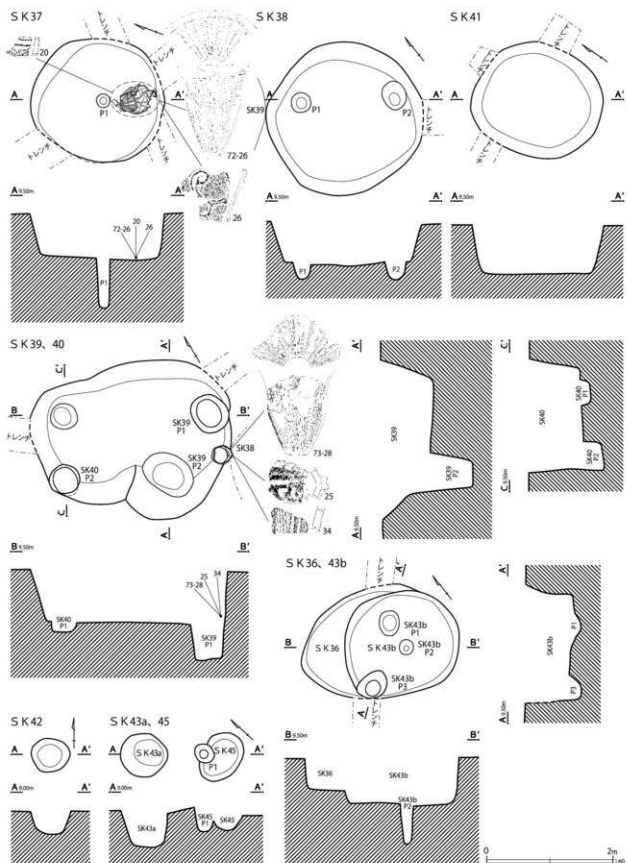
- 1 暗褐色土 ロームブロック (φ1cm 大) 僅か ローム粒子少量
- 2 暗褐色土 炭化物粒子 しまり強
- 3 暗褐色土 1層に似るが色調暗い
- 4 褐色土 ローム主体 暗褐色土粒子少量 しまりなし



第63図 縄文時代の小竪穴状遺構と土壌 (7)

35～38は撚糸文Lを、39は無節Lの縄文を、40は単節L Rの縄文を地文としている。41～43の地文





第65図 縄文時代の小竪穴状遺構と土壇(9)

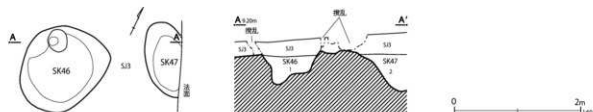
は条線で、43は流水文状に施文している。44～48は深鉢形土器の底部である。44は単節R Lの縄文を、45は単節L Rの縄文が羽状に器面に残されている。49、50は土製円盤である。出土土器の主体となる時期は加曽利E I式である。

第7号小竪穴状遺構出土遺物（第67図3、第77図1～37）

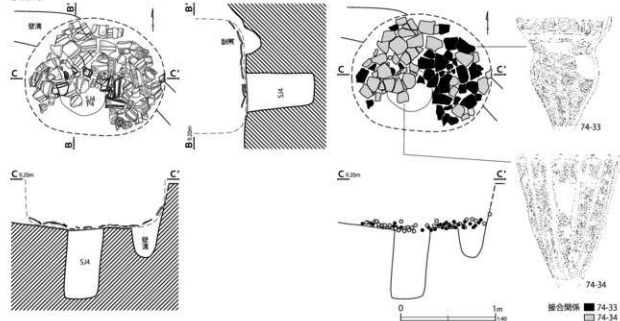
第67図3はキャリバー形の深鉢形土器である。地文はR L単節の縄文で、縦からやや斜め方向に施文している。第77図1～6は阿玉台系、勝坂系の土器である。1、2、6は胎土に金雲母を多量に含んでいる。1、2、4は口縁部で、1は波状口縁の波頂部に扇状把手を貼付するもので、先端には2本の凹線を施している。2は先端が皿状に凹む突起を貼付するもので、縁に刻みを入れてひだ状

にしている。4は降带上に、半截竹管で刺突を施している。3、5、6は胴部で、3は降帯に沿って角押文を施文している。7～21はキャリバー形の深鉢形土器である。7は加曽利E式系の土器である。10、11は頸部が残るもので、胴部との区画は沈線を巡らせている。12は2本1組の降帯で懸垂文を施文している。13～21は沈線で懸垂文を施文するもので、20、21は磨消懸垂文を施文している。地文として20は単節L Rの縄文を、他は単節R Lの縄文を施文している。22～25はキャリバー形以外の器形の深鉢形土器である。22、23は連弧文系の深鉢形土器である。地文は撚糸文で、22の口唇直下は横方向に施文している。24は口縁部が開き無文となる深鉢形土器の口縁部である。25は波状口縁で、波頂部にはボタン状突起を貼付する。

S K 46、47



S K 48



第66図 縄文時代の小竪穴状遺構と土壌(10)

地文単節R Lの縄文である。26～29は地文のみが残る深鉢形土器の胴部である。26の地文は単節R Lの縄文で、27の地文は0段多条L Rの縄文、28の地文は単節L Rの縄文である。29の地文は櫛歯状の条線である。30～32は深鉢形土器の底部である。33は壺状になる土器と考えられる。地文は単節R Lの縄文で、横方向に施文している。34、35は浅鉢形土器である。34は地文が単節R Lの縄文で、横方向に施文している。36、37は土製円盤である。出土土器の時期は、加曾利E I式である。

第8号小竪穴状遺構出土遺物 (第67図4、第78図1～33)

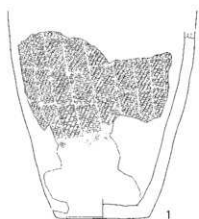
第67図4は浅鉢形土器である。口縁部から肩部にかけて橋状把手を貼付している。第78図1～33は土器破片である。1は勝坂系、2は阿玉台系の深鉢形土器である。1は隆帯上に刻みを施している。3～23はキャリバー形の深鉢形土器である。3～7は古い様相を持つ口縁部から頸部である。3、5、6の頸部は無文帯を持っている。3は頸部と胴部を沈線で区画している。3の地文は燃糸文Lである。4の地文は単節R Lの縄文で、5は単節L Rの縄文である。7は0段多条R Lの縄文を施文している。8～10は新しい様相を持つ口縁部である。8、10の地文は単節R Lの縄文で、9は単節L Rの縄文である。11～23は胴部である。11～21は沈線で、蛇行懸垂文や懸垂文を施文している。16～21は磨消懸垂文となっている。22、23は隆帯で文様を施文する。12は地文として燃糸文Lを、16は無節Rの縄文を、13～15、19、21、22は単節R Lの縄文を、17、23は単節L Rの縄文を、18、20は複節L R Lの縄文を縦方向に施文している。24、25はキャリバー形以外の器形の深鉢形土器である。24は開く無文の口縁部である。25は波状口縁部で、波頂部には渦巻文を施文している。26は曾利系の深鉢形土器の胴部である。27～30は地文のみが残る深鉢形土器の胴部である。27～29の地文は単節R Lの縄文である。30は条線を地文

としている。31、32は深鉢形土器の底部で、単節R Lの縄文を地文としている。33は浅鉢形土器の口縁部の破片である。出土土器は加曾利E I式と加曾利E III式が混在している。

第9号小竪穴状遺構出土遺物 (第67図5、第79図1～43)

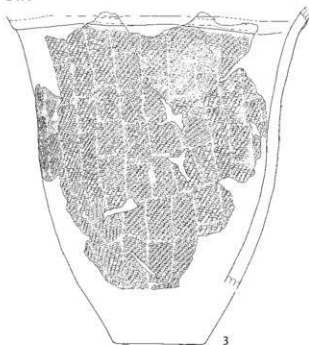
第67図5は深鉢形土器である。地文は単節R Lの縄文で縦から斜め方向に施文している。第79図1～43は土器破片である。1、2、5は阿玉台系の深鉢形土器である。1、2は口縁部で、1は波頂部に鶏冠状の突起を持っている。5は胎土に金雲母を含んでいる。3、4は中峠系の深鉢形土器の口縁部である。6～27はキャリバー形の深鉢形土器である。6～14は口縁部の破片で、13、14は同一個体である。6は突起部分の破片である。突起の頂部は面を持ち、渦巻文を施文している。7、8は口縁部に立体的に隆帯で渦巻文様を施文するものである。地文として7、10、11、13、14は単節R Lの縄文を施文している。8は0段多条L Rの縄文を、12は無節Lの縄文を地文としている。15～17は頸部の破片である。15、16は隆帯で、17は沈線で頸部と胴部を区画している。15、16の地文は単節R Lの縄文で、17は0段多条R Lの縄文である。18～27は胴部である。18～22は沈線で蕨手文やクランク文などを施文するもので、18、19は同一個体である。地文はいずれも単節R Lの縄文である。23～27は2本または3本1組の沈線で、懸垂文を施文している。26、27は磨消懸垂文である。地文は24が単節L Rの縄文で、他は単節R Lの縄文である。28～29、31は連弧文系の深鉢形土器である。地文はいずれも単節R Lの縄文を施文している。31の胎土には多量の金雲母が混入している。32～36は地文のみが残存する深鉢形土器の胴部である。32～34の地文は単節R Lの縄文で、35、36は櫛歯状の条線である。37～40は深鉢形土器の底部である。38の地文は単節R Lの羽状縄文である。39は沈線による懸垂文の一部と、地文である単節

SK3



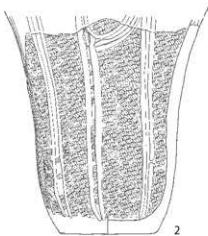
1

SK7



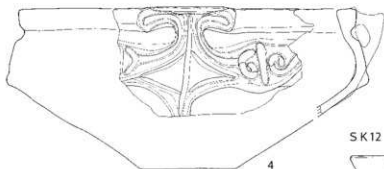
3

SK6



2

SK8



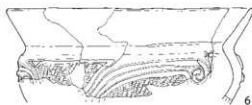
4

SK9



5

SK12

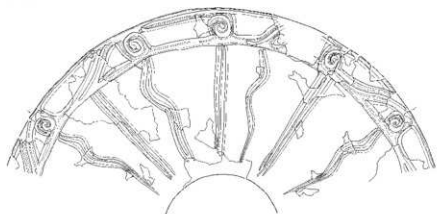


6

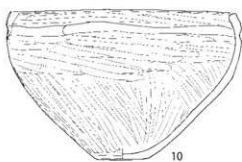
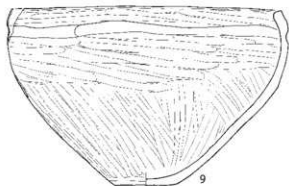


第67図 小竪穴状遺構の出土遺物(1)

S K15



S K22



0 10cm

第68図 小竪穴状遺構の出土遺物(2)

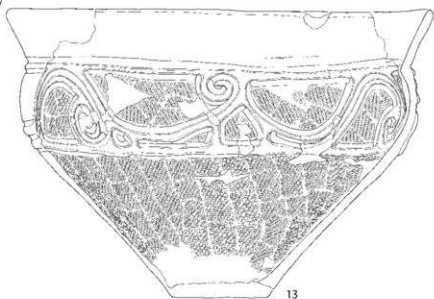
SK23



11

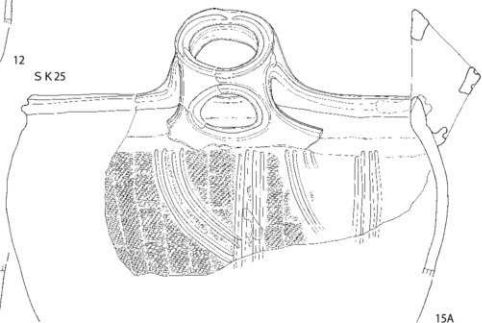


12



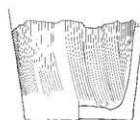
13

SK25

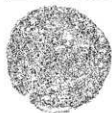


15A

SK24



14

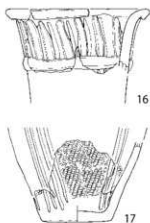


15B

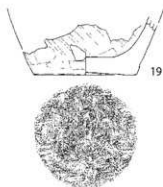
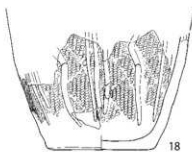


第69図 小竪穴状遺構の出土遺物(3)

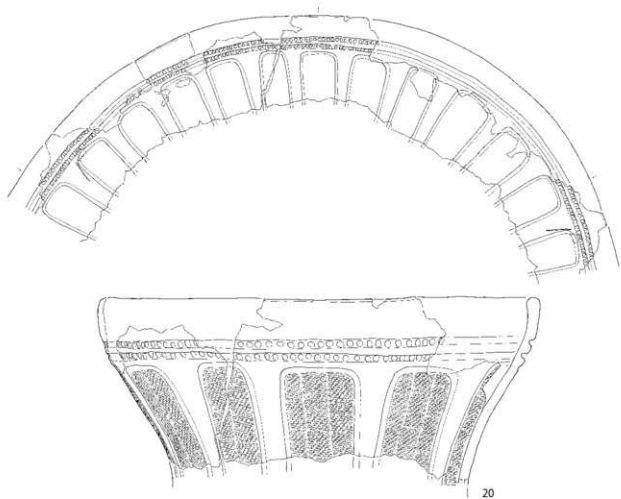
SK26、27



SK28



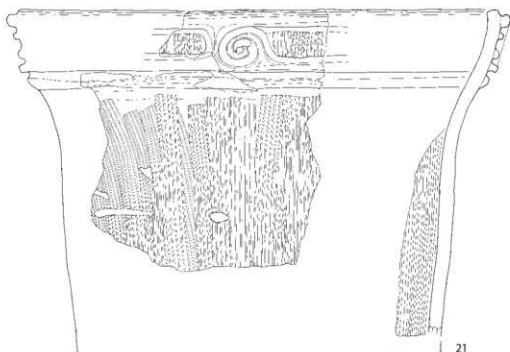
SK30



0 10cm

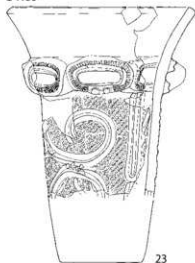
第70図 小竪穴状遺構の出土遺物(4)

S K 30



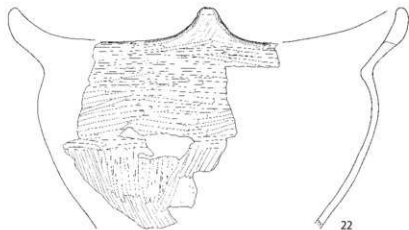
21

S K 35

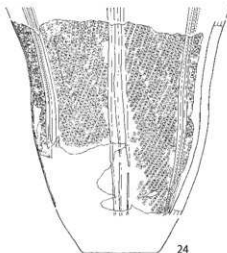


23

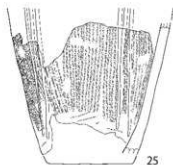
S K 36、43



22



24

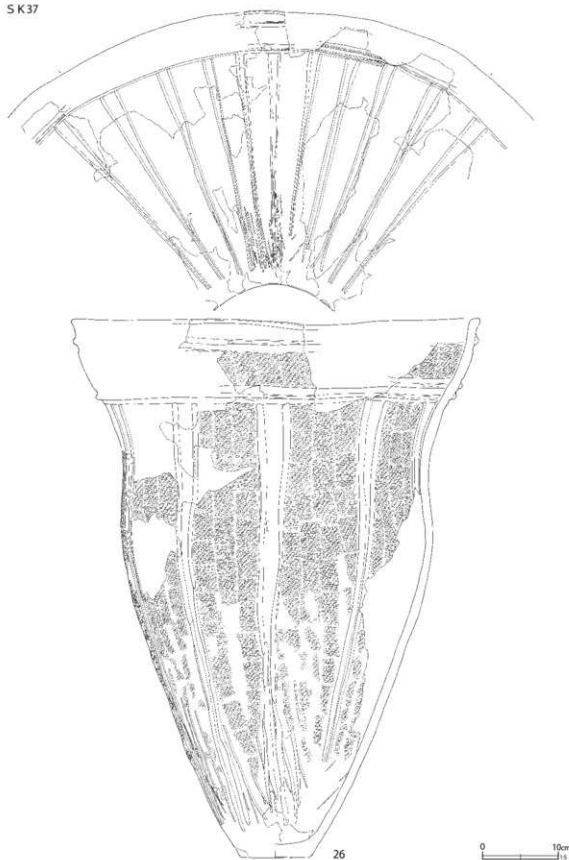


25

0 10cm

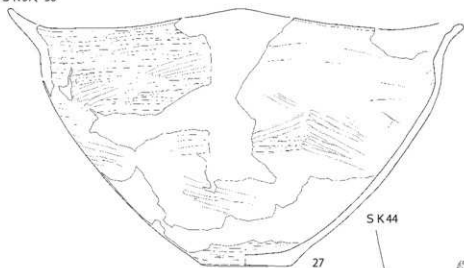
第71図 小竪穴状遺構の出土遺物(5)

SK37

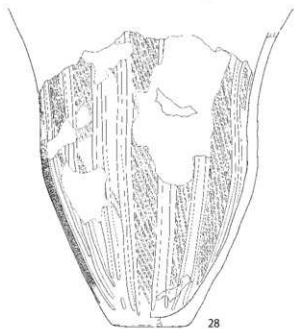
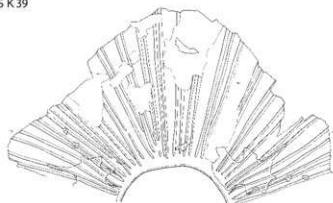


第72図 小竪穴状遺構の出土遺物(6)

S K 37、38



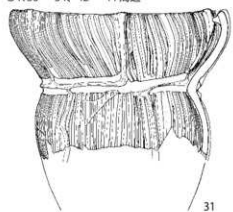
S K 39



S K 44

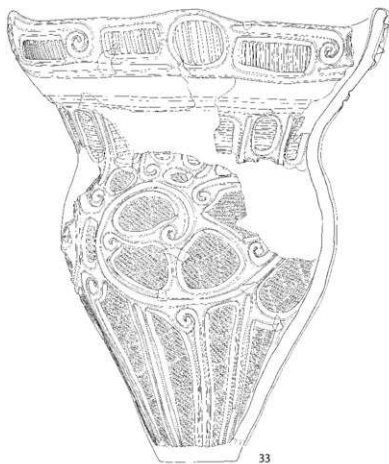
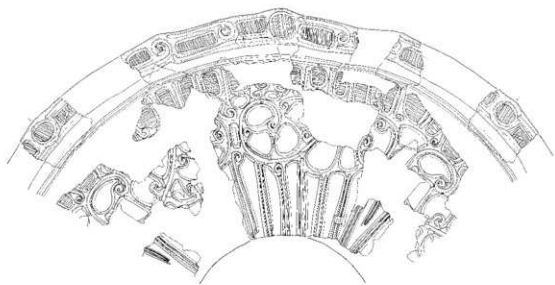


S K 30 ~ 34、42 ~ 44 周辺

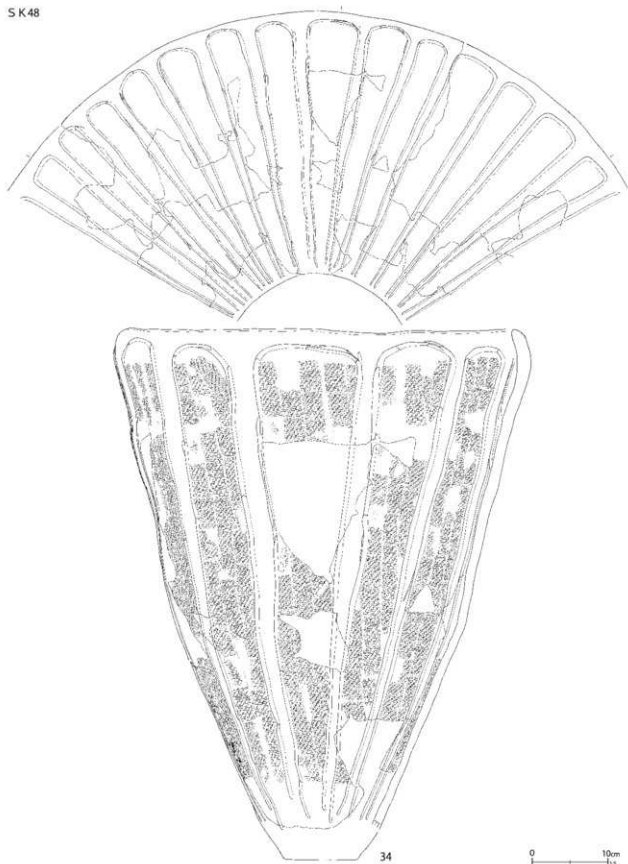


0 10cm 1/4

第73図 小竪穴状遺構の出土遺物(7)



第74図 小竪穴状遺構の出土遺物(8)



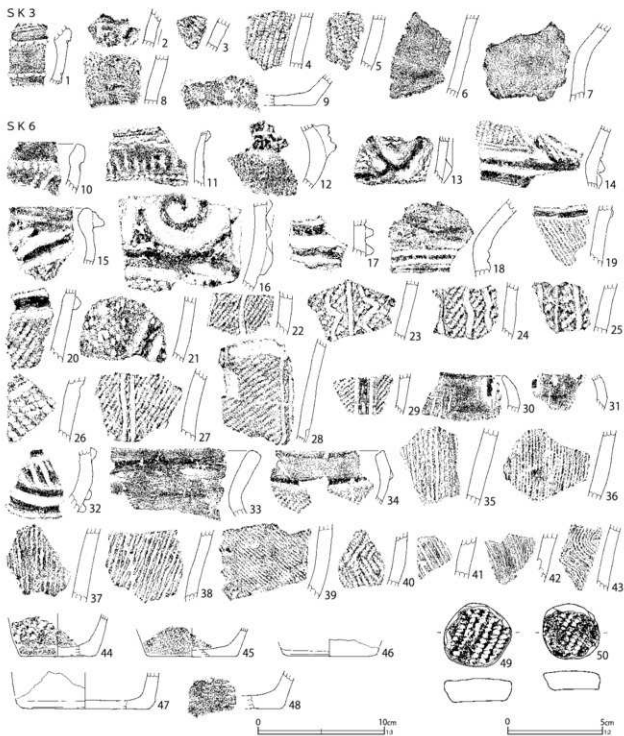
第75図 小竪穴状遺構の出土遺物(9)

R Lの縄文を施文している。41～43は浅鉢形や鉢形土器である。出土した土器の時期は加曾利E I式～E III式期である。

第10号小竪穴状遺構出土遺物 (第80図1～22)

1～5は阿玉台系の深鉢形土器で、1～4の胎

土には多量の金雲母が含まれている。1は波状口縁の扇状把手部分である。地文は単節R Lの縄文である。6～15はキャリバー形の深鉢形土器である。6～9は口縁部の破片である。6は地文である燃糸文Rを口縁部は横方向に、胴部は縦方向に

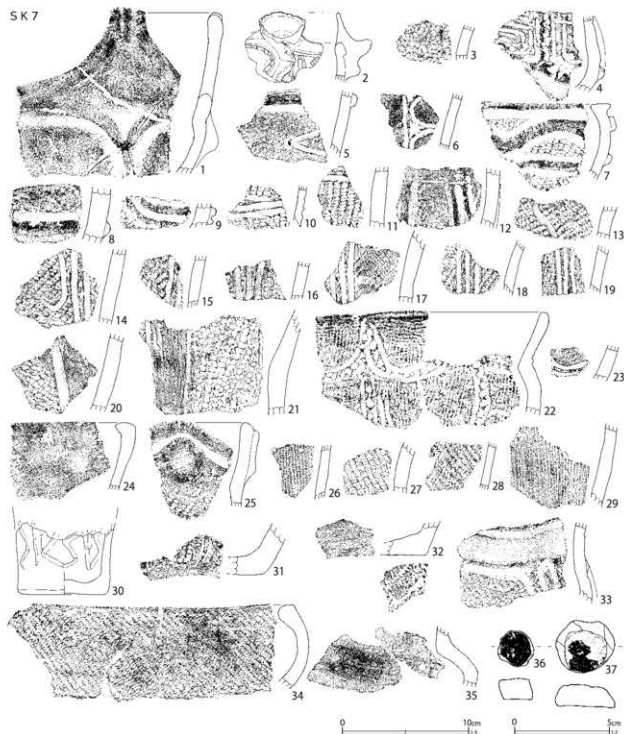


第76図 小竪穴状遺構の出土遺物(10)

施文している。7～9の地文は単節R Lの縄文である。10～15は頸部から胴部である。2本または3本1組の沈線を、懸垂文としている。10～13の沈線間は狭いが、磨消懸垂文である。16、17は連弧文系の深鉢形土器である。16は口唇下に沈線を

巡らせている。地文は条線である。17の地文は単節R Lの縄文である。18は地文のみ残る深鉢形土器の胴部である。単節R Lの縄文を地文としている。19～22は鉢形や浅鉢形土器である。21は地文である櫛間条の条線を、流水文状に施文している。

SK 7



第77図 小竪穴状遺構の出土遺物(11)

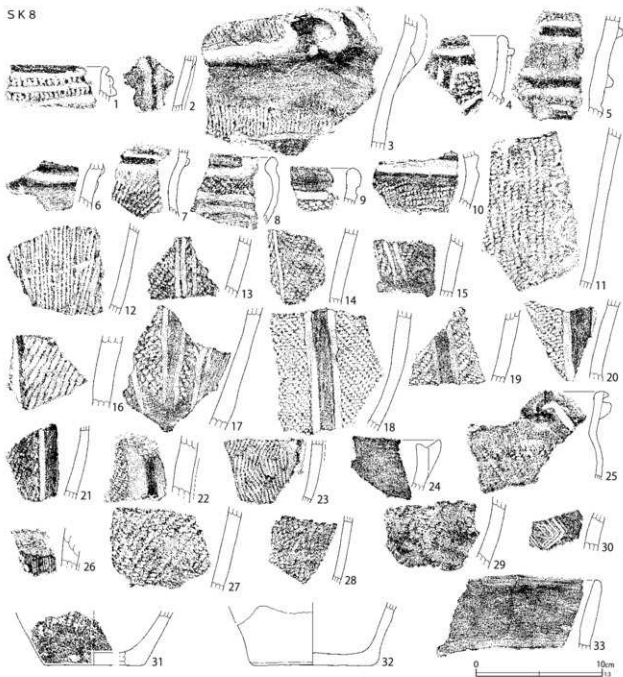
土器が混在しており、詳細な時期は不明である。

第11号小竪穴状遺構出土遺物 (第80図23～49)

24～29、35は阿玉台系、勝坂系の深鉢形土器である。25、35は同一個体の口縁部で、単節L Lの縄文を施文している。26は勝坂系の土器である。23、30～33はキャリバー形の深鉢形土器である。23はメガネ状把手を口縁部に貼付している。地文は燃糸文Lである。30～33は胴部で、沈線による

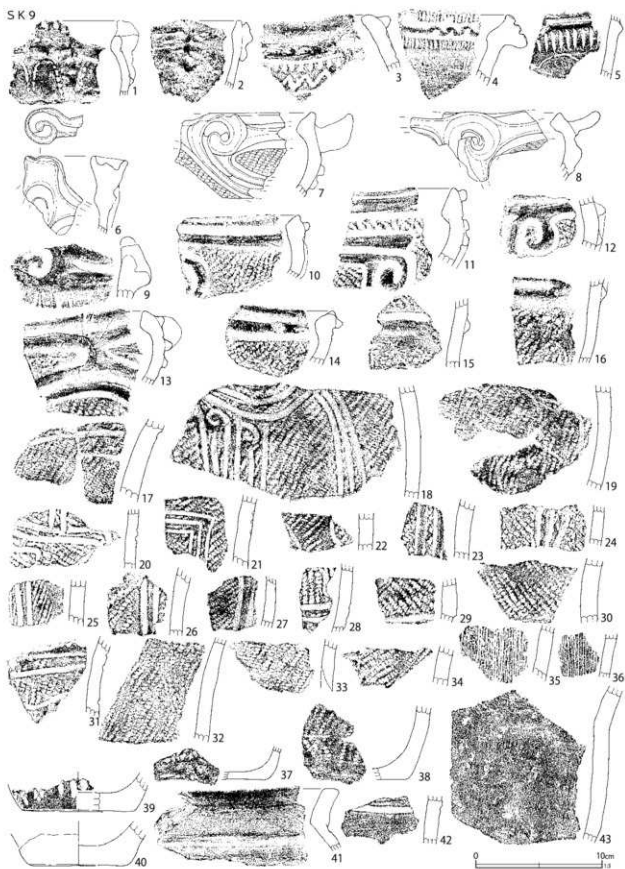
懸垂文を施文している。地文は31、32が単節L Lの縄文、30、33は単節L Rの縄文である。34は無文で口縁部が直線的に外反する器形の土器である。35、36は曾利系の深鉢形土器で、36は口縁部に渦巻文を施文している。37は地文が条線の、キャリバー形の口縁部である。38～44は地文のみを施文している深鉢形土器の胴部で、38は単節L R、39～41は単節R Lの縄文、42は燃糸文R、43、44は

SK 8

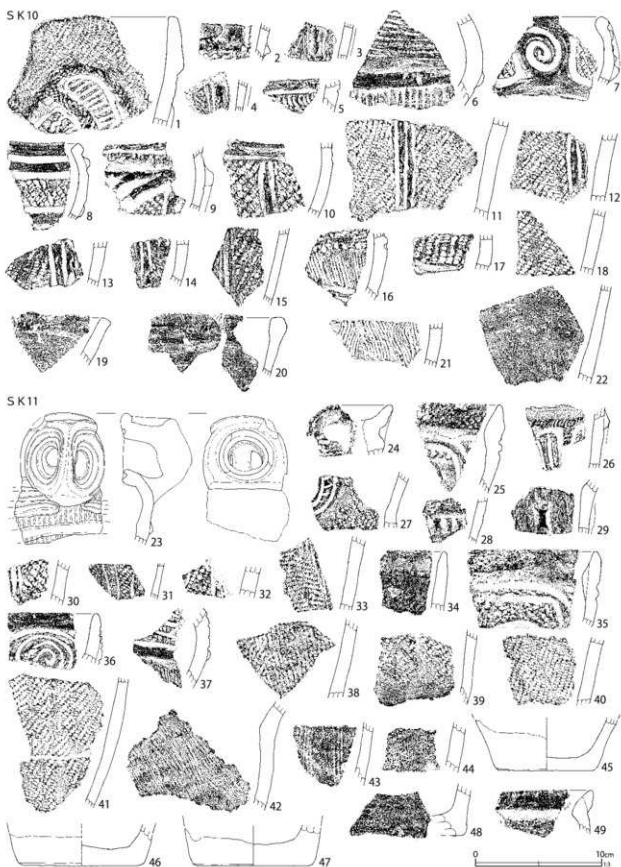


第80図 小竪穴状遺構の出土遺物 (12)

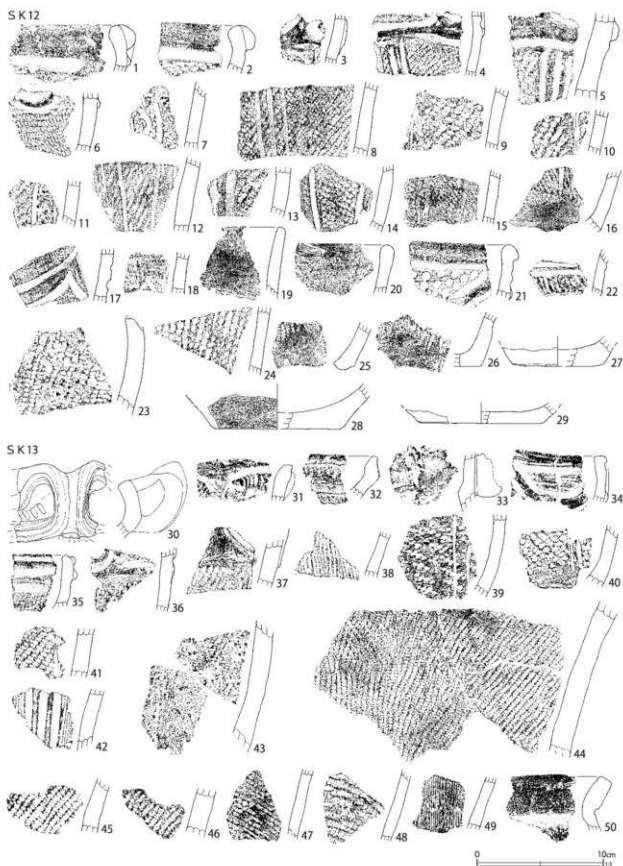
SK 9



第79図 小竪穴状遺構の出土遺物(13)



第80図 小竪穴状遺構の出土遺物(14)



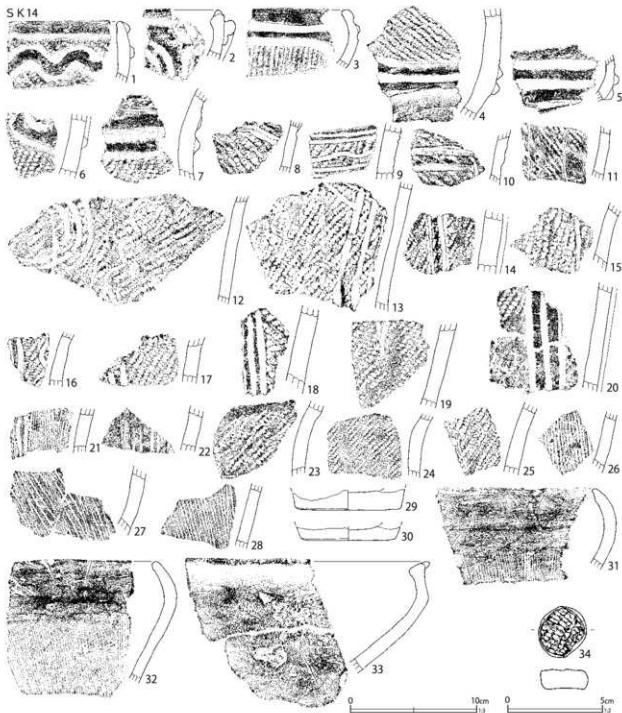
第81図 小竪穴状遺構の出土遺物(15)

条線を地文とする。45～48は深鉢形土器の底部、49は浅鉢形土器の口縁部である。出土土器の主な時期は加曾利E I式と考えられる。

第12号小竪穴状遺構出土遺物 (第67図6、第81図1～29)

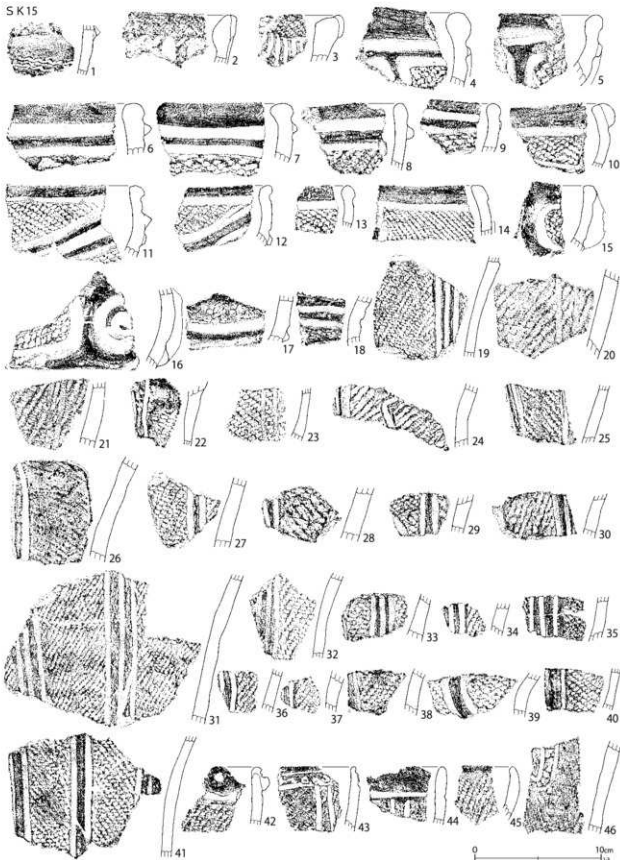
第67図6は浅鉢形土器で、口唇部は文様帯とな

り、隆帯とそれにそった沈線で、渦巻文などを施文している。地文は単節R Lの縄文である。第81図1～29は土器破片である。1～16はキャリパー形の深鉢形土器である。6のみ隆帯で施文している。他は沈線で懸垂文を施文している。地文として2、14は単節L Rの縄文を、3～10、12、13、15



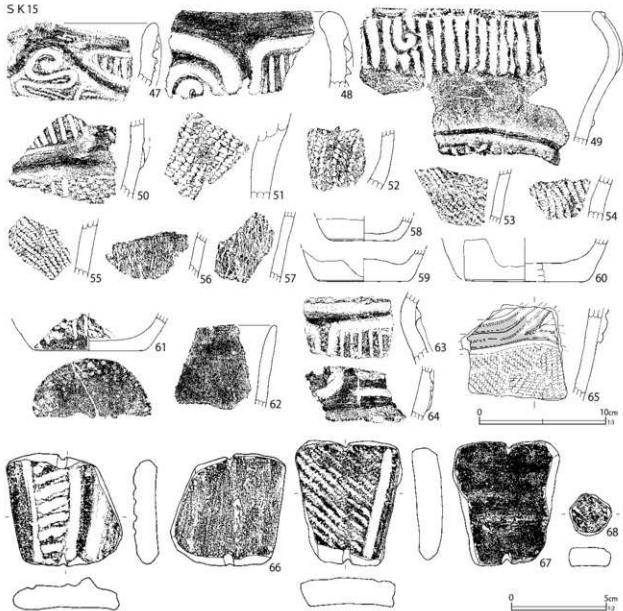
第82図 小竪穴状遺構の出土遺物(16)

S K 15

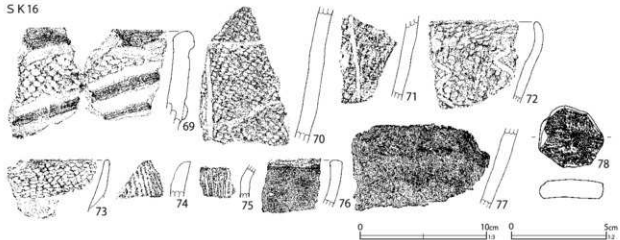


第83図 小竪穴状遺構の出土遺物(17)

SK15

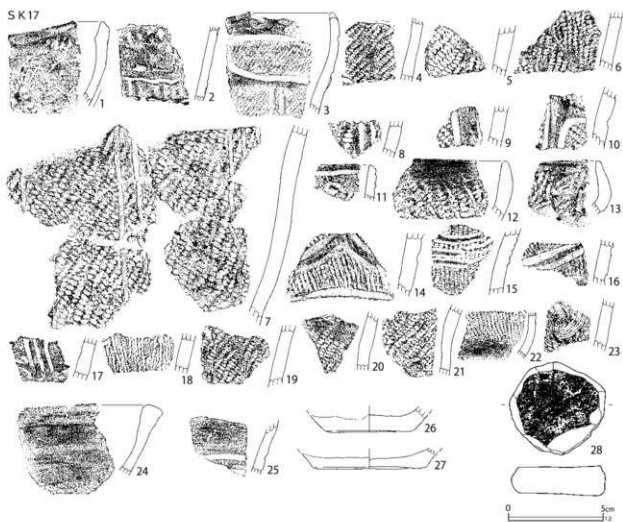


SK16

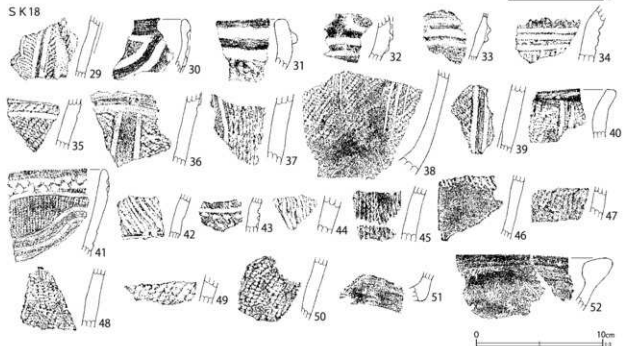


第84図 小竪穴状遺構の出土遺物(18)

SK17



SK18

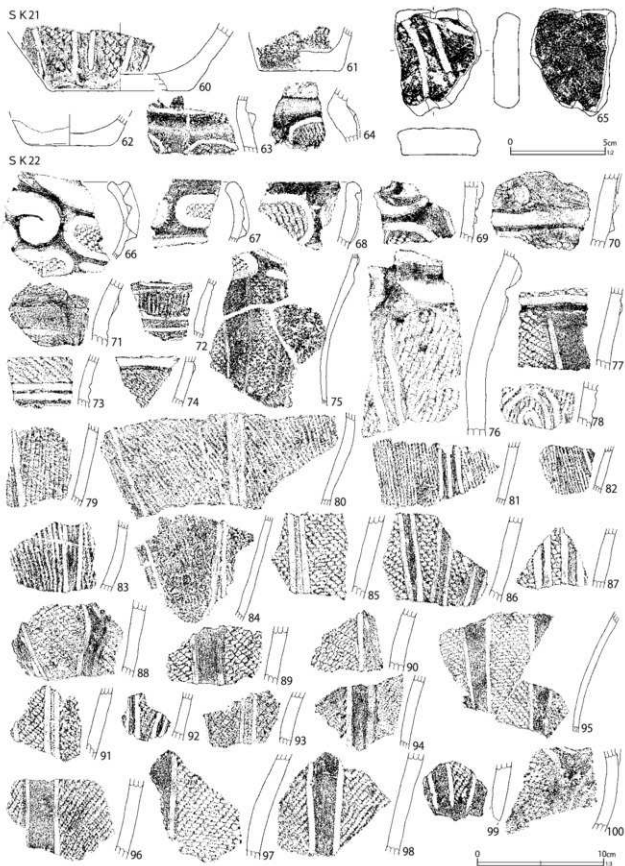


第85図 小竪穴状遺構の出土遺物(19)

SK21

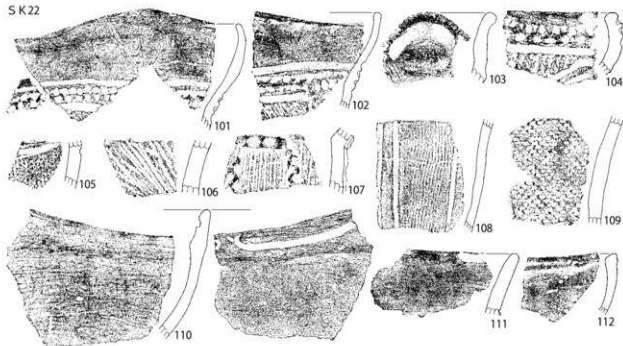


第86図 小竪穴状遺構の出土遺物(20)

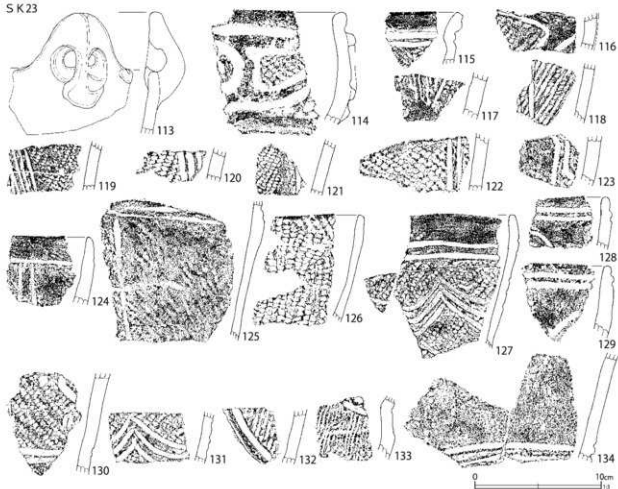


第87図 小竪穴状遺構の出土遺物(21)

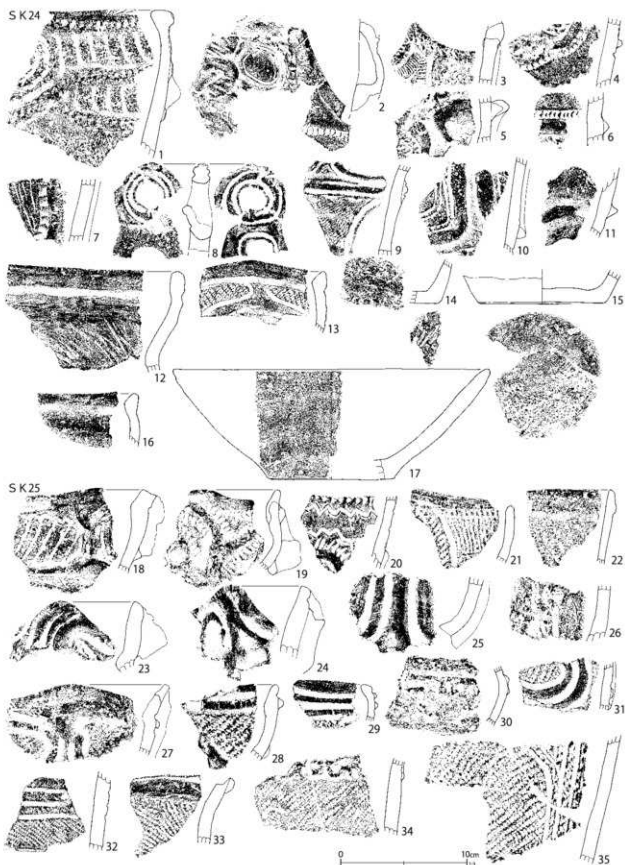
S K22



S K23

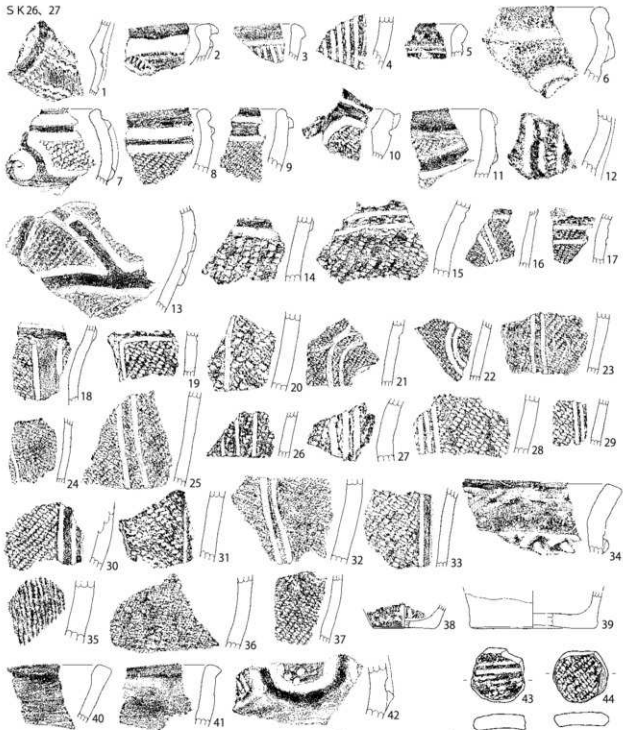


第88図 小竪穴状遺構の出土遺物 (22)

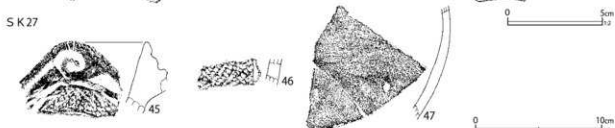


第89図 小竪穴状遺構の出土遺物(23)

S K 26, 27



S K 27



第90図 小竪穴状遺構の出土遺物 (24)

は単節R Lの縄文を施文している。11の地文は0段多条R Lの縄文で、16の地文は撚糸文Lである。17, 18は連弧文系の深鉢形土器である。17の連弧文様内は磨消縄文となっている。17, 18の地文は撚糸文Lである。19, 20は口唇部無文の深鉢形土器である。21は地文が列点文の深鉢形土器の口縁である。22は単沈線状の条線が地文となる曽利系の深鉢形土器の胴部である。23～25は単節R Lの地文のみを施文している深鉢形土器の胴部である。26, 27は深鉢形土器、28, 29は浅鉢形土器の底部破片である。26の地文は単節R Lの縄文である。土器の時期は、阿玉台式から加曽利E I式期である。

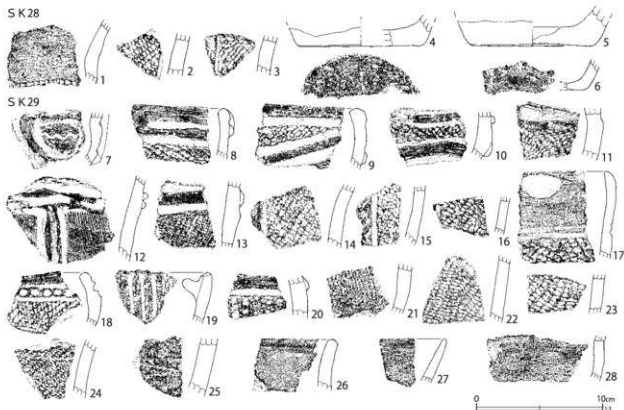
第13号小竪穴状遺構出土遺物 (第81図30～50)

30, 31は勝坂系、32, 33は阿玉台式の深鉢形土器である。30は把手部分である。34～41はキャリバー形の深鉢形土器である。34～37は口縁部から頸部である。34の地文は撚糸文Lで、横方向に施文している。35～37の地文は単節R Lの縄文である。

39～41は胴部で、沈線によって蛇行懸垂文や垂下する懸垂文を施文している。38は撚糸文L、39は単節R Lの縄文を縦位、40は単節R Lの縄文、41は複節L R Lの縄文を地文とする。42は地文が条線となる曽利系の深鉢形土器の胴部である。43～49は地文のみを施文している深鉢形土器の胴部である。44～46の地文は単節R Lの縄文、47は無節L、48は0段多条L Rの縄文、49は条線である。50は浅鉢形土器の口縁部である。出土土器の主体となる時期は、加曽利E I式期である。

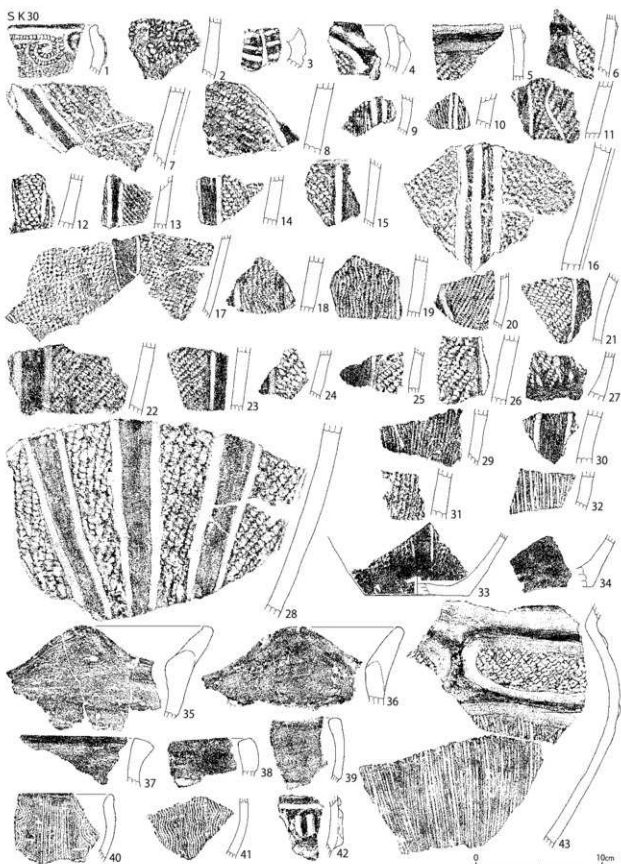
第14号小竪穴状遺構出土遺物 (第82図1～34)

1～20はキャリバー形の深鉢形土器である。1, 14は中峠系に近い土器で、1は口縁部に隆帯を波状に貼付している。地文は単節R Lの縄文である。14は胴部で、垂下する隆帯上には地文である単節R Lの縄文を施文している。2～6は口縁部で、4の頸部は無文帯となっている。地文は3が撚糸文Lである。地文は4, 6が単節R L、5



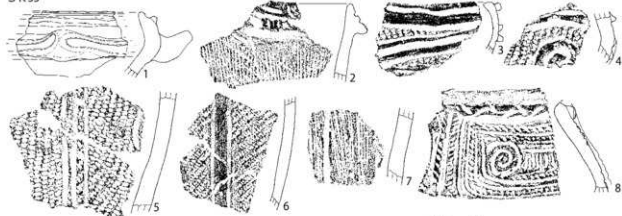
第91図 小竪穴状遺構の出土遺物 (25)

S K 30

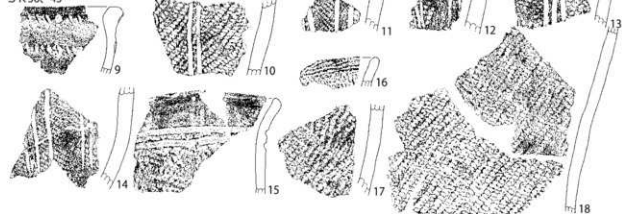


第92図 小竪穴状遺構の出土遺物 (26)

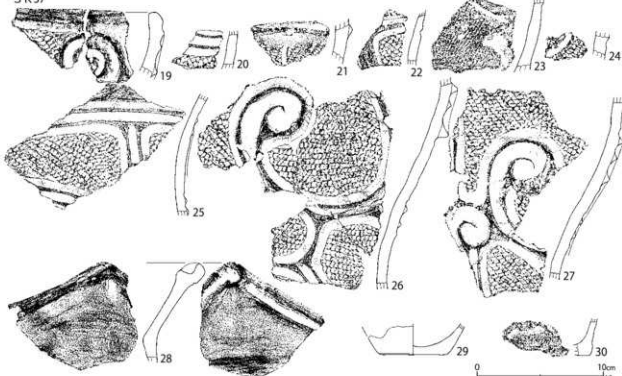
SK35



SK36, 43

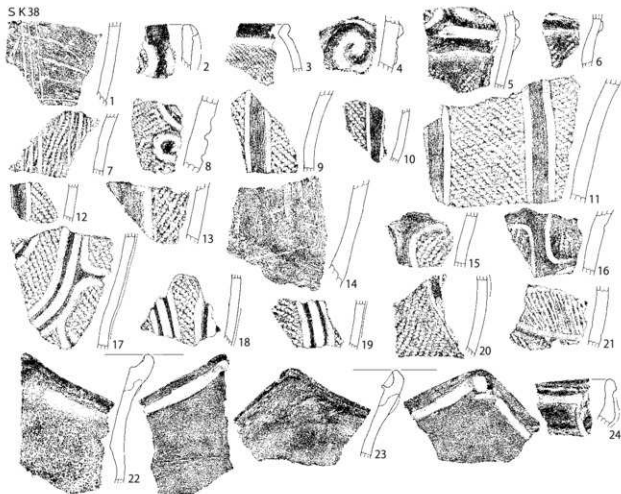


SK37

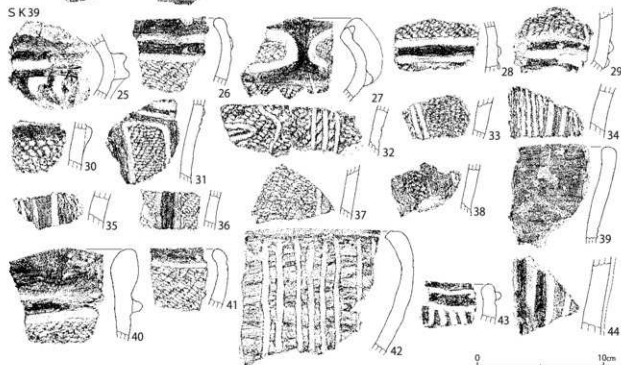


第93図 小竪穴状遺構の出土遺物(27)

S K 38

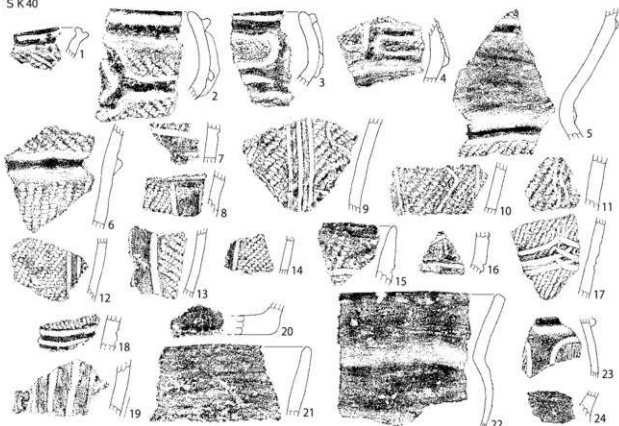


S K 39

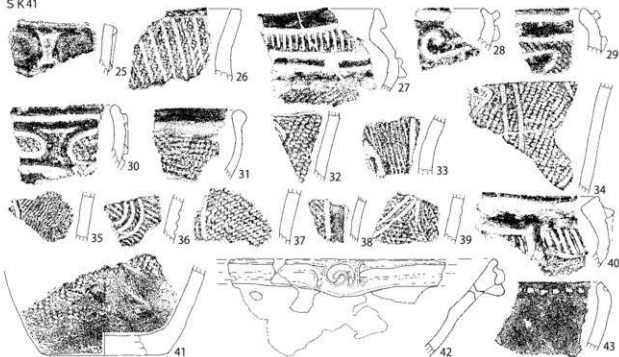


第94図 小竪穴状遺構の出土遺物 (28)

S K 40



S K 41



S K 43b



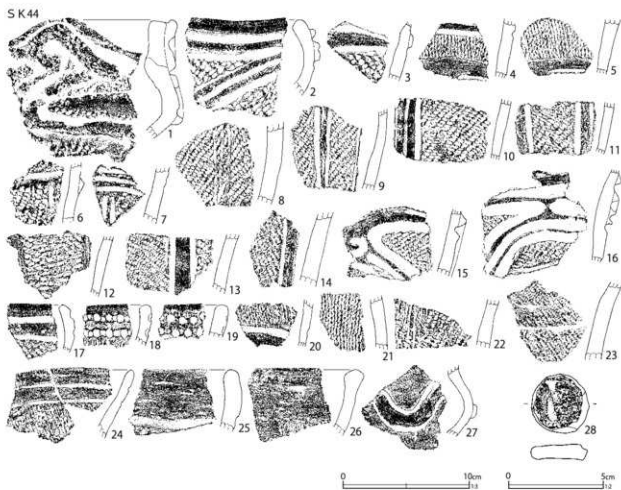
0 10cm

第95図 小竪穴状遺構の出土遺物(29)

は単節L Rの縄文で、4、5は横方向、6は縦方向に施文している。7～10は頸部から胴部である。9は沈線で区画した頸部に、平行沈線文と波状沈線文を施文している。地文は8が無節Lの縄文で、他は単節R Lの縄文を縦方向に施文している。11～20は胴部で、11～19は沈線で渦巻文や懸垂文を施文している。20は隆帯で懸垂文を施文している。地文は18が複節L R Lの縄文で、他は単節R Lの縄文を縦方向に施文している。21、22は地文が条線となる曽利系深鉢形土器の胴部である。23～28は地文のみが残る深鉢形土器である。地文は23～25が単節R Lの縄文、26～28が条線である。29、30は底部である。31～33は鉢または浅鉢形土器の口縁部である。31、32は胴部に条線を施文している。34は土製円盤である。出土した土器の時期は加曽利EⅠ式から加曽利EⅢ式期である。

第15号小竪穴状遺構出土遺物（第68図7、8、第83図1～46、第84図47～68）

第68図7はキャリバー形の深鉢形土器で、口縁部は平縁、胴部には沈線で垂下する懸垂文と蛇行懸垂文を交互に3単位ずつ6箇所施文している。懸垂文は3本1組で施文するが、蛇行懸垂文のうち1箇所のみ2本1組の沈線で施文している。懸垂文の位置に合わせて口縁部の渦巻文を施文している。破損のため確実ではないが、1箇所渦巻文を配していない。2本1組の蛇行懸垂文上の渦巻文を狭い区画内に配している。懸垂文の沈線間は磨消縄文を施文している。地文は単節R Lの縄文で、縦方向に施文する。8は鉢形土器で文様は隆帯とそれに沿わせた沈線によって、楕円形状の区画文を施文している。胴部には単節R Lの縄文を斜め方向に施文している。第83図1～46、第84図47～



第96図 小竪穴状遺構の出土遺物(30)

S K 30~34、42~44周辺



第97図 小竪穴状遺構の出土遺物(31)

65は土器破片である。1～3は阿玉台系や勝坂系の深鉢形土器の口縁である。1は隆帯を貼付し、器面には細かい波状沈線文を施文している。2、3は深鉢形土器口唇部に地文である単節R Lの縄文を横方向に施文している。4～41はキャリバー形の深鉢形土器である。4～17は口縁部である。4～9は口唇下に沈線を巡らせ、その下に隆帯を巡らせている。10～15は口唇部に隆帯を貼付している。地文として、4、9、10、12～15は単節R Lの縄文を、4は横方向に他は縦方向に施文している。5、7、8は複節L R Lの縄文を地文としており、5、7は縦方向、8は横方向に施文している。11、16、17の地文は単節L Rの縄文で、11は縦方向、16は横方向、17は斜め方向に施文している。18、19は頸部から胴部で、地文は単節R Lの縄文を縦方向に施文している。20～41は胴部である。沈線によって蛇行懸垂文や垂下させる懸垂文を施文している。25～41は磨消懸垂文である。31の胎土には金雲母が多量に含まれている。地文として、20、21は0段多条R Lの縄文を縦方向に施文している。22、24、27、31～34、36～38は単節R Lの縄文を地文として、縦方向に施文している。23、25、26、29、35、41の地文は単節L Rの縄文で、縦方向に施文している。39、40の地文は複節L R Lの縄文で、縦方向に施文している。42～44はキャリバー形以外の器形の深鉢形土器の口縁部である。42の波頂部にはボタン状の突起を貼付している。43、44は中期末葉の土器と考えられる。42、43の地文は単節R Lの縄文で、44は単節L Rの縄文で、縦方向に施文している。45、46は連弧文系の深鉢形土器である。地文は単節R Lの縄文で、縦方向に施文している。47～50は曾利系の深鉢形土器である。地文が縄文のものもあるが、ここに含めた。器形はキャリバー形である。47は単節R Lの縄文を、50は複節L R Lの縄文を施文している。49は口縁部に隆帯を縦方向に施文するもので、部分的に渦巻文を施文している。51～57は地文の

みを施文している深鉢形土器の胴部である。51、52は単節R Lの縄文、55は単節L Rの縄文、53、54は0段多条L Rの縄文を縦方向に施文している。56、57は条線と捻糸文を組み合わせて施文している。58～61は深鉢形土器の底部である。61には網代痕が認められた。62は壺状になる土器の口縁部と考えられる。64は浅鉢形土器の肩部である。65は赤彩が器面に残るもので、鉢形土器と考えられる。66～68は土製品である。66、67は土器片鏟である。68は土製円盤である。遺構の時期は第68図7から、加曾利EⅢ式期と推定される。

第16号小竪穴状遺構出土遺物（第84図69～78）

69～71はキャリバー形の深鉢形土器である。69は口縁部で、地文は複節L R Lの縄文を縦方向に施文している。70、71は胴部で、沈線を垂下させて懸垂文を施文している。70の地文は単節R Lの縄文で、71の地文は0段多条R Lの縄文で、縦方向に施文している。72は口縁部文様帯を持たない深鉢形土器で、胴部には蛇行懸垂文を施文している。地文は単節R Lの縄文で、縦方向に施文している。73～75は地文のみを施文している土器で、73は口縁部、74、75は胴部の破片である。73の地文は単節L Rの縄文で、74は捻糸文Rを地文としている。75の地文は条線である。76、77は浅鉢形土器である。77の器面には赤彩の痕跡が認められる。78は土製円盤である。出土土器が混在しているため、遺構の時期は不明である。

第17号小竪穴状遺構出土遺物（第85図1～28）

1、2は阿玉台系の深鉢形土器で、胎土に金雲母が多量に含んでいる。3～10はキャリバー形の深鉢形土器で、胴部には沈線で懸垂文を施文している。地文は9が複節L R L、10が単節L Rの縄文で、他は単節R Lの縄文を施文している。11はバケツ状の器形となる深鉢形土器である。12～16は連弧文系の深鉢形土器である。17は地文が条線となる曾利系の深鉢形土器の胴部である。18～23は地文のみが残る深鉢形土器の胴部である。18の

地文は捺糸文L、23は条線で、他は単節RLの縄文を施文している。24～27は浅鉢形土器である。28は土製円盤である。出土土器が混在しているため、遺構の時期は不明である。

第18号小竪穴状遺構出土遺物（第85図29～52）

29は勝坂系、42は曾利系の深鉢形土器の胴部である。30～39、44はキャリバー形の深鉢形土器である。37が捺糸文Lであり、他の地文は単節RLの縄文である。40は深鉢形土器である。41は連弧文系の深鉢形土器である。45～50は地文のみが残る深鉢形土器の胴部で、51は底部である。52は浅鉢形土器の口縁部である。出土土器が混在しているため、遺構の時期は不明である。

第21号小竪穴状遺構出土遺物（第86図1～59、第87図60～65）

第86図1～59、第87図60～64は土器破片である。1～3は阿玉台系、4は勝坂系の深鉢形土器である。5～38はキャリバー形の深鉢形土器である。5～13は口縁部、14～17は頸部から胴部、18～38は胴部である。胴部の文様は沈線による磨消懸垂文が主体を占め、隆帯で施文するものは24のみである。19～23の地文は捺糸文Lである。20～23は磨消懸垂文を施文している。単節RLの縄文を地文とするものが多いが、9、17、31～34、36は複節LRの縄文を地文とする。39は無文の口縁部を持つ深鉢形土器で、40は口縁部文様帯を持たない深鉢形土器である。波状口縁で、口縁上端に円形刺突文を巡らす。41～46は連弧文系の深鉢形土器である。47～52は地文が条線の曾利系の深鉢形土器で、47、48は口縁部が重弧文と考えられる。52は隆帯が剥落したもので、地文は短沈線を施文している。53～59は地文のみを施文する深鉢形土器の胴部である。60～62は深鉢形土器の底部である。63は有孔罅付土器の器形を持つ土器で、64は浅鉢形土器の肩部である。65は土器片錘である。一部欠損するが、深鉢形土器の胴部の破片を方形状に加工したものと考えられる。上下2箇所に挟りを

入れている。出土土器の主体となる時期は加曾利EⅢ式期である。

第22号小竪穴状遺構出土遺物（第88図9、10、第87図66～100、第88図101～112）

第88図9、10は浅鉢形土器である。9、10は口縁部に1本幅広の浅い沈線を巡らせている。9は器面をミガキ状に丁寧に調整している。内面には一部赤彩が残っている。10は外面の器面はきれいなままだが、内面は器面が荒れている。第87図66～100、第88図101～112は土器破片である。66～100はキャリバー形の深鉢形土器である。口縁部は口唇部と一体化して、隆帯を貼付し、楕円区画文と渦巻文を施文するものが主体である。胴部は沈線によって、磨消懸垂文を施文するものが主体である。78のみ渦巻文を施文している。地文を捺糸文とする79～84も、磨消懸垂文を施文している。地文は複節LRの縄文を施文するものが多い。複節LRの縄文を地文とするものは、66、77、85～88、95である。単節RLの縄文を地文とするものは、67、69、74～76、78、91、92、94、96～99、単節LRの縄文を地文とするものは、68、89、90、100、捺糸文Lを地文とするものは72、80～84、捺糸文Rを地文とするものは79である。0段多条RLの縄文を地文とするものは、73、93である。101～103はキャリバー形以外の深鉢形土器である。101、102は同一個体で、無文の口唇部と胴部は沈線2本を巡らせて区画している。沈線間には円形刺突文を2列施文している。地文は捺糸文Rである。104、105は連弧文系の深鉢形土器である。104は捺糸文R、105は捺糸文Lを地文としている。106～108は地文が条線となる曾利系の深鉢形土器である。106、107は口縁部が重弧文となる土器と考えられる。109は地文である複節LRの縄文のみを施文する深鉢形土器の胴部である。110～112は浅鉢形土器の破片である。110の内外面の口縁部周辺に、赤彩の痕跡が認められる。出土遺物の主体となる時期は加曾利EⅢ式期である。

第23号小竪穴状遺構出土遺物（第69図11～13、第88図113～134）

第69図11は深鉢形土器の口縁部から頸部である。口唇直下に2本沈線を巡らせ、沈線間に不規則に円形刺突を施文している。頸部にも同様に2本沈線を巡らせて胴部と画し、沈線間に不規則な円形刺突を施文している。口縁は無節Lの縄文を斜めに施している。12は深鉢形土器で、底部のみ欠損している。地文のみを施文し、複節L R Lの縄文をやや斜め縦方向に施文している。13は浅鉢形土器である。口縁部から底部直上までの約半分が残存している。直線的に外反する無文の口唇部を持ち、丸みを帯びる肩部を隆帯で区画し口縁部文様帯としている。体部文様帯は半円形状などに区画し、端部は渦巻状に施文している。隆帯に沿ってやや幅広な沈線を施している。地文として胴部全体に単節R Lの縄文を施文し、文様帯内は、斜め横方向や斜め縦方向、文様帯外は斜め縦方向や縦方向に施文する。第88図113～134は土器破片である。器面が荒れているものも多く、123、128、129、134は地文が不明瞭である。113は口縁の波頂部に眼鏡状把手を貼付している。口縁部は無文となっている。114～123はキャリバー形の深鉢形土器で、114～116は口縁部である。117～123は胴部で、沈線による懸垂文を施文している。地文として、114～116、119～121は単節R Lの縄文を、115は横方向に他は縦方向に施文している。117の地文は捺糸文Lで、118は無節L、122は複節L R Lの縄文である。124～126はキャリバー形以外の深鉢形土器である。124、125は無文の狭い口縁部と胴部を沈線で区画している。124、126の地文は単節R Lの縄文である。125は単節L Rの縄文である。127～134は連弧文系の深鉢形土器である。地文として127、131は単節R Lの縄文を、130は単節L Rの縄文を、132、133は捺糸文Lを施文している。比較的残存状態の良い第69図13から、加曽利EⅢ式の前段階と考えられる。

第24号小竪穴状遺構出土遺物（第69図14、第89図1～17）

第69図14は深鉢形土器の胴下半から底部で、地文条線のみ施文する。地文は粗雑で、無文部分を残している。内面の底部から胴下部外面に被熱が認められるが、底面には見られなかった。第89図1～3、7は隆帯に刻みを施す勝坂系で、4～6、10、11は阿玉台系の深鉢形土器である。10、11の胎土には金雲母が含まれている。8、9、12は勝坂末葉の深鉢形土器で、8は把手である。9は胴部に単節R Lの縄文を施文している。12の器面には擦痕状に調整痕を残している。13は加曽利E式末葉の深鉢形土器である。14、15は深鉢形土器の底部である。16、17は浅鉢形土器である。出土土器の主体となる時期は勝坂末葉である。

第25号小竪穴状遺構出土遺物（第69図15A、B、第89図18～35）

第69図15A、Bは同一個体であるが接合しなかったため、A、Bに分けて図示した。鉢形土器の口唇から胴部である。口縁には橋状把手を貼付し、口縁には橋状把手と連結させて立体的な突帯を巡らせて胴部と区画している。胴部には2本1組の沈線文を2組施文し、垂下させる懸垂文とそれにつながるように半弧線文を交互に施文している。地文は単節R Lの縄文で縦方向に施文している。器面の剥落が著しい。剥落部分の観察から、口縁部の隆帯を貼付した後、胴部の地文を施文していたことがわかる。第89図18～35は土器破片である。18～22は勝坂系や阿玉台系の土器である。18の胎土には金雲母が含まれている。23～34はキャリバー形の深鉢形土器である。23～26は突起部分の破片である。27～31は口縁部、32は頸部、33、34は頸部から胴部である。27、29、30の器面は剥落や風化が著しい。28、31、34の地文は単節R Lの縄文、32、33の地文は単節L Rの縄文である。35は第69図15と同一個体である。土器の主体となる時期は、15から加曽利EⅠ期と考えられる。

第26、27号小竪穴状遺構出土遺物（第70図16、17、第90図1～44）

重複遺構で、分離できなかったものを一括した。第70図16は深鉢形土器の口縁から胴上部である。区画内に貼付した隆帯の左側にのみ沈線を施文している。17は深鉢形土器の胴下部から底部が残存している。地文は単節R Lの縄文で、縦方向に施文している。第90図1～42は土器破片である。1～5は勝坂系、阿玉台系の土器で、3～5は末葉の土器である。6～33はキャリバー形の深鉢形土器である。18、23、30～33は沈線間に磨消懸垂文を施文している。地文は、12は不明瞭、24は無節Lの縄文、31は複節L R Lの縄文、他はすべて単節R Lの縄文である。9は横方向に、他は縦方向に施文している。34は外反する無文の口縁部を持つ土器で、頸部に隆帯と交互刺突を施文している。33～37は地文のみを施文する深鉢形土器の胴部である。35は摺糸文R、36、37は単節R Lの縄文を地文としている。38、39は深鉢形土器の底部である。40～42は浅鉢形土器である。第90図43、44は土製円盤である。

第27号小竪穴状遺構出土遺物（第90図45～47）

第90図45～47は、土器破片である。45は波状口縁部の波頂部である。地文は単節R Lの縄文で、横方向に施文している。46は深鉢形土器の胴部で、地文は単節R Lの縄文である。47は浅鉢形土器の胴部である。第26、27号土城の出土土器には、時間差は認められるが、明確に区分はできず、時期は不明である。

第28号小竪穴状遺構出土遺物（第70図18、19、第91図1～6）

第70図18、19は深鉢形土器の胴下部から底部である。胴部には沈線で3本1組の垂下する懸垂文と1本の蛇行懸垂文を交互に施文している。懸垂文の施文は粗雑である。地文は単節R Lの縄文で、斜め方向に施文している。19は胴部が無文で、底部に網代痕が部分的に認められる。第91図1～6

は土器破片である。1は阿玉台系の深鉢形土器で、頸部に結節沈線文を施文する。2、3は深鉢形土器の胴部で、沈線による懸垂文を施文する。2の地文は単節R Lの縄文、3の地文は単節L Rの縄文である。4～6は深鉢形土器の底部である。4は底部に網代痕が認められる。出土土器は少ないが、第70図18から加曽利E I 1式期である。

第29号小竪穴状遺構出土遺物（第91図7～28）

7は阿玉台系の深鉢形土器で、胎土に金雲母が含まれている。8～11、13～16はキャリバー形の深鉢形土器である。地文は8の無節Lの縄文以外は単節R Lの縄文である。9、10は横方向、他は縦方向に施文している。17は口縁部が無文で、胴部には単節R Lの縄文を施文している。18は連弧文系の深鉢形土器で、波状口縁である。単節L Rの縄文を地文として横方向に施文している。12、19、20は地文を条線とする曽利系の土器である。19は重弧文の口縁部分である。21～24は深鉢形土器の胴部である。21は摺糸文L、他は単節R Lの縄文を地文としている。25は無文である。26～28は浅鉢形土器である。時期は確定できなかった。

第30号小竪穴状遺構出土遺物（第70図20、第71図21、22、第92図1～43）

第70図20は大型の深鉢形土器で、胴部の括れ部分より上部が残存している。胴下半部は故意に打ち割って、埋設したと考えられる。口唇は幅の狭い無文となっており、胴部とは2列の沈線を巡らせて区画し、沈線内には円形刺突を施文している。胴部は逆U字状文を11単位沈線で施文し、その内側を単節R Lの縄文を縦方向に充填している。沈線はいずれも幅広く浅く施し、何度もなぞり返している。胴部の文様は幅の狭い文様が2単位あるが配置上の問題とも考えられる。第71図21は大型の深鉢形土器の口縁から胴部の破片である。隆帯で区画した口縁には、楕円区画文とその間に渦巻文を施文している。地文は条線で曽利系の土器である。22は浅鉢形土器の口縁から胴部である。波

状口縁である。口唇部は狭い平坦面を持ち、その部分に端部が渦巻く沈線文を施している。口縁部分を中心に赤彩が残存している。第92図1～43は土器破片である。1、3は勝坂系、2は阿玉台系の深鉢形土器である。4～28はキャリバー形の深鉢形土器である。7、8、16は胴部に隆帯で文様を施しており、7、8は大型渦巻文を施すると考えられる。他の胴部は沈線で文様を施し、9～12以外は磨消懸垂文を施している。地文として4、5、11、19～28は単節R Lの縄文を、6～8、12、13、15、18は単節L Rの縄文を、9、10は捻糸文Lを、16は0段多条L Rの縄文を施している。29、30は条線が地文となる曾利系の深鉢形土器の胴部である。沈線で懸垂文を施している。31、32は地文のみ施する深鉢形土器の胴部で、31は単節R Lの縄文を、32は条線を地文としている。33、34は深鉢形土器の底部である。35～43は浅鉢ないしは壺形土器である。43は肩部に文様帯を持ち、肩部は地文として単節R Lの縄文を横方向に、胴部は条線を縦方向に施文している。遺構の時期は加曾利Ⅲ式期である。

第35号小竪穴状遺構出土遺物（第71図23、第93図1～8）

第71図23は深鉢形土器である。口縁は頸部から外反する。頸部には突帯状の楕円区画文を6単位施したと推定した。立体的に貼付した楕円区画の隆帯上には、沈線文や円形刺突文、キザミなどを施している。胴部には沈線に対向する渦巻文や対向U字文などを施文している。地文は0段多条R Lの縄文を縦方向に施している。第93図1～8は土器破片である。1、2は中峠系の深鉢形土器の口縁である、3～6はキャリバー形の深鉢形土器である。5は3本の沈線による垂下する懸垂文と1本の沈線による蛇行懸垂文を交互に施文している。6は磨消懸垂文を施文している。3の地文は単節L Rの縄文で、他は単節R Lの縄文である。7は地文が条線となる曾利系の深鉢形土器の胴部

である。8は浅鉢形土器の肩部である。時期は、勝坂式末から加曾利EⅢ式と考えられる。

第36、43号小竪穴状遺構出土遺物（第71図24、25、第93図9～18）

分離が困難なため、一括して図示した。第71図24、25は、キャリバー形の深鉢形土器の胴部である。24、25は3本1組の沈線による懸垂文を垂下させ、24の地文は複節R L Rの縄文、25は施文が粗雑で地文は捻糸文Lである。第93図9～18は土器破片である。9は阿玉台系の深鉢形土器の口縁部である。10～14はキャリバー形の深鉢形土器の胴部である。15は口縁が無文となる土器である。16～18は地文のみが残る深鉢形土器である。16は捻糸文Rを地文としている。時期は第71図24、25から加曾利EⅠ式期である。

第37号小竪穴状遺構出土遺物（第72図26、第93図19～30）

第72図26は、キャリバー形の深鉢形土器である。大型で、口縁部文様帯は隆帯で区画する。胴部は沈線による2本1組の磨消懸垂文を9単位施文している。正面部分の胴下部には複数の細い沈線が残り、その上に地文を施しているものもあることから、下書きのように使用したものが消されず残ったとも考えられる。沈線文は何度もなぞり返している。地文は単節R Lの縄文で縦方向に施文するが、口縁と胴上部4段目位までは節や条が大きく、4段目以下は節が小さくなる。施文タイミングによると考えられる。第93図19～30は土器破片である。19～27はキャリバー形の深鉢形土器であるが、25～27は微隆起伏の隆帯で、大小の渦巻文を施文している。地文として19、25～29は複節L R Lの縄文を、20は複節R L Rの縄文を、21、23、24は単節R Lの縄文を、22は単節L Rの縄文を施文している。28は浅鉢形土器の口縁部で、口唇部と内面の一部に赤彩の痕跡が認められる。29、30は深鉢形土器の底部である。遺構の時期は、第72図26から加曾利EⅢ式期である。

第37、38号小竪穴状遺構出土遺物（第73図27）

遺構確認時の遺物で、帰属が明確にできなかったため、両遺構名を冠して一括した。第73図27は浅鉢形土器で、4単位の間隔やかな波状口縁を持ち、口唇直下内面に幅広の沈線を巡らせている。

第38号小竪穴状遺構出土遺物（第94図1～24）

第94図1～24は土器破片である。1は阿玉台系の深鉢形土器の胴部である。2～20はキャリバー形の深鉢形土器である。7～16は沈線で文様を施文するが7以外は沈線間が磨消縄文となっている。17～20は微隆起状の隆帯で大型渦巻文などを施文すると考えられる。地文として2、3、12は単節R Lの縄文を、5～8、13～16、20は単節R Lの縄文を、9～11、17～19は複節L R Lの縄文を施文している。21は連弧文系の深鉢形土器である。地文は捺糸文Lである。22～24は浅鉢形土器の口縁部である。主体は、加曾利EⅢ式期である。

第39号小竪穴状遺構出土遺物（第73図28、第94図25～44）

第73図28は口縁部を欠損するキャリバー形の深鉢形土器である。胴部には磨消懸垂文を18単位垂下させるが、2単位で1組とすれば9単位と考えられる。単位間の磨消が1箇所見られる。地文は捺糸文Lであるが、斜め方向に施文しており、単節などの縄文の施文効果をねらったとも考えられる。括れ部周辺に剥離が集中している。第94図25～44は土器破片である。25～38はキャリバー形の深鉢形土器である。34～38は磨消懸垂文を施文している。地文として26～29、31～33、36～38は単節R Lの縄文を、30は複節L R Lの縄文を、34、35は捺糸文Lを、38は無節Lの縄文を施文している。27、28は横方向に、他は縦方向に施文している。39、40は口縁部無文の深鉢形土器である。40は頸部に隆帯を巡らせ、胴部と区画している。地文は単節R Lの縄文である。41は連弧文系の深鉢形土器で、地文は単節R Lの縄文である。42～44は曾利系の深鉢形土器である。42は口縁部の文様は沈

線を施文している。遺構の時期は、第73図28から加曾利EⅢ式期と考えられる。

第40号小竪穴状遺構出土遺物（第95図1～24）

第95図1～24は土器破片である。1は中峠系の深鉢形土器の口縁部である。地文は無節Lの縄文である。2～14はキャリバー形の深鉢形土器である。2～4は口縁部である。5は頸部無文帯を持っている。8～14は沈線で胴部に懸垂文を施文している。8、12～14は磨消懸垂文である。地文として2～6、8～12、14は単節R Lの縄文を、13は複節L R Lの縄文を、2、6の口縁部は横方向に、他は縦方向に施文している。15はバケツ状の器形となる深鉢形土器で、地文は単節R Lの縄文である。16～18は連弧文系の深鉢形土器で、16は単節R Lの縄文、17は単節L Rの縄文、18は捺糸文Lで施文されている。19は曾利系の深鉢形土器の胴部である。20は、深鉢形土器の底部破片である。21、22、24は鉢形土器、23は壺状の器形と考えられる。22～24は赤彩の痕跡が認められる。土器は定期的に混在している。

第41号小竪穴状遺構出土遺物（第95図25～43）

第95図25～43は土器破片である。25は阿玉台系、26は勝坂末葉の土器と考えられる。26の地文は単節R Lの縄文である。27は中峠系の深鉢形土器の口縁部である。地文は単節R Lの縄文である。28～39はキャリバー形の深鉢形土器である。29は口縁部文様帯の隆帯を剣先状に施文している。胴部に磨消懸垂文を持つのは34、38である。地文として29～32、34、35は単節R Lの縄文、33は捺糸文、36は0段多条L Rの縄文、37は複節L R Lの縄文、38は単節L Rの縄文、39は無節Lの縄文を施している。口縁部のうち、29、30は横方向に施文している。40は曾利系の深鉢形土器の口縁部である。41は底部で、単節R Lの縄文を地文として施文している。42、43は浅鉢形土器の口縁部である。42は口唇直下に面を作り出し、沈線で文様を施文している。表面にわずかに赤彩の痕跡が認められる。

出土土器の主体となる時期は加曾利EⅠ式である。

第43号小竪穴状遺構出土遺物（第95図44～46）

第95図44～46は土器破片である。いずれも小破片である。44には結節沈線文を施文している。46は単節RLの縄文を地文として施文している。

第44号小竪穴状遺構出土遺物（第73図29、30、第96図1～28）

第73図29は深鉢形土器の胴下半部である。地文は、単節RLの縄文を縦方向に施文している。30は器台の台部分である。第96図1～27は土器破片である。1～16はキャリバー形の深鉢形土器である。1は波頂部分である。6～14は沈線で胴部に懸垂文を施文するもので、9～14は磨消懸垂文を施文している。15、16は隆帯で大型の渦巻文を施文している。地文として1、2、6～11は単節RLの縄文を、3、13、14は単節LRの縄文を、4、5は撚糸文Lを、12は無節Lの縄文を、15、16は複節LRの縄文を施文している。2は横方向に施文している。17～20は連弧文系の深鉢形土器である。地文として17は0段多条LRの縄文を、18は条線を、20は撚糸文Lを施文している。21～23は地文のみを施文する深鉢形土器である。21の地文は撚糸文Lである。22は単節RLの縄文の間に、撚糸文Lを縦方向に帯状に施文しており、視覚的には撚糸文が懸垂文状となっている。23の地文は単節LRの縄文である。24は鉢形土器、25～27は浅鉢形土器である。第96図28は土製円盤である。

第48号小竪穴状遺構出土遺物（第74図33、第75図34）

第4号住居跡の覆土内で検出した小竪穴状遺構である。調査当初には、当該遺構と第4号住居跡の覆土の差を識別できなかったが、2個体分の土器片が平らに敷き詰められて検出したことから、第4号住居跡の覆土内に第48号小竪穴状遺構が構築されたと考えた。敷き詰められていた土器は、土器表面を上に向けており、復元によって底部を欠いた2個体分であることがわかった。第4号住

居跡を廃絶し、埋没した後に、覆土を掘り込んで小竪穴状遺構を構築し、更に墓壇に転用したと考えられる。なお、住居跡の柱穴部分を避けるようにして、土器片を配置しているように見える。

第74図33はキャリバー形の深鉢形土器で、底部が欠損している。口縁部は緩やかな4単位の波状口縁である。口縁部文様、胴部文様ともに隆帯と沈線によって施文している。胴部最大径付近に大型の横S字文を2単位施文する。そして端部を渦巻状にし、S字文内の空白部分に円形区画文を充填し、区画文間に渦巻文を施している。横S字文と、その下部の区画文内には単節LRの縄文を施文している。文様は沈線を主体として描出し、沈線は幅広く何度もナデ返している。第75図34は底部を欠損する深鉢形土器である。胴部に逆U字状の区画文を沈線で13単位施文している。沈線は複数回なぞり返しており、部分的にごく浅い箇所がある。施文はやや粗雑である。区画文内は単節RLの縄文を縦方向に充填しているが、施文しない部分や、擦り消しているような部分がある。区画文の外側は口縁、胴部ともに磨消し状に器面を丁寧に調整し、特に胴部については磨き状に調整している。33、34は両者の破片がモザイク状に敷かれており、同時期の所産と考えられる。33は大木系、34は加曾利E系の深鉢形土器で、いずれも底部を欠損しており、遺構は墓壇と推定される。時期は加曾利EⅢ式期である。

第30、43b、44号小竪穴状遺構、第31、32、33、34、42、43a号土壇出土遺物（第73図31、32、第97図1～25）

第73図31は深鉢形土器の口縁から胴上部である。胴部は、垂直に下りる懸垂文と蛇行する懸垂文を交互に施文している。曾利系の土器である。32は胴部に地文のみ施し、底部付近は器面調整を幅広く施している。地文は燃りの緩い節の大きな単節RLの縄文を縦方向に施している。第97図1～25は土器破片である。1～19はキャリバー形の深鉢形土器である。1～8は口縁部で、2、3、5

第20表 小竪穴状遺構出土石器観察表 (第98,99図)

番号	器種	石材	長さ/cm	幅/cm	厚さ/cm	重さ/g	備考
1	石鐮	チャート	1.5	1.8	0.4	0.9	SK14
2	石鐮	チャート	2.7	[1.6]	0.4	1.3	SK38
3	石鐮	珪質頁岩	[2.7]	[1.6]	[1.2]	2.6	SK30
4	スクレイパー	黒曜石	2.8	[1.5]	0.5	1.8	SK 9
5	石鐮	チャート	2.9	2.5	0.8	4.8	SK39 P. 2
6	石鐮	チャート	3.5	2.8	1.3	9.9	SK 8
7	スクレイパー	頁岩	6.9	4.5	0.8	31.1	SK24
8	軽石	不明軽石製品	[3.0]	[4.3]	1.7	5.6	SK30
9	打製石斧	黒色頁岩	[5.8]	[4.1]	1.5	42.7	SK28
10	石鐮	砂岩	8.5	6.4	2.3	183.9	SK24
11	打製石斧	頁岩	[4.0]	[3.5]	1.7	24.5	SK24
12	打製石斧	頁岩	[5.5]	3.7	[2.3]	53.3	SK24
13	打製石斧	緑泥片岩	[7.8]	[5.9]	1.8	84.2	SK44
14	打製石斧	ホルンフェルス	9.7	4.4	2.0	116.8	SK 4
15	磨石	安山岩	[5.8]	[4.7]	[4.0]	132.0	SK30 被熱
16	磨石	安山岩	[7.5]	7.4	6.3	455.7	SK29 被熱
17	敲石	緑泥片岩	[12.8]	4.7	4.1	350.4	SK30~32・42~44
18	敲石		9.2	4.9	2.7	223.3	SK24 磨斧からの転用
19	石皿	安山岩	[5.8]	[8.3]	[4.4]	290.7	SK14
20	石皿	安山岩	[8.8]	[6.0]	6.7	328.4	SK11
21	石皿	安山岩	[8.7]	[8.1]	4.7	154.9	SK30

は古い様相を持つが、他は加曽利EⅢ式以降の土器と考えられる。1、4、9～18の胴部の懸垂文は10,11以外は磨消懸垂文となっている。1の口縁部は隆帯を波状に施文している。地文として、1、2、4、6～9、11～15,17は単節Lの縄文を、3、5、16,18は単節L Rの縄文を、10は摺糸文Rを、19は無節Lの縄文を施文している。口縁部である5～7は横方向に施文している。20は外反する口縁部が無文となる深鉢形土器である。21は連弧文系の深鉢形土器、22は曽利系の深鉢形土器である。23～25は浅鉢形土器である。

第4号小竪穴状遺構出土石器 (第98図14)

14はホルンフェルス製の打製石斧である。装着部と刃部に部分的に摩耗が見られる。

第8号小竪穴状遺構出土石器 (第98図6)

6はチャート製の石鐮である。肉厚な剥片を素材とする。断面は三角形である。

第9号小竪穴状遺構出土石器 (第98図4)

4は黒曜石製のスクレイパーである。刃部の位

置、形状から削器と判断した。一部が欠損する。

第11号小竪穴状遺構出土石器 (第99図20)

20は安山岩製の石皿である。欠損している。

第14号小竪穴状遺構出土石器 (第98図1、第99図19)

1はチャート製の石鐮である。無茎で持ちが浅い。入念に加工している。両側縁が内湾する。19は安山岩製の石皿である。扁平礫を利用している。皿部は平坦である。

第24号小竪穴状遺構出土石器 (第98図7、10、12、第99図18)

7は頁岩製のスクレイパーである。礫面を持つ大型剥片を素材としている。刃部の位置、角度から削器と考えられる。10は砂岩製の打欠石鐮である。大きめな扁平礫を使用している。11は頁岩製の打製石斧である。装着部には部分的に摩耗が見られる。12は頁岩製の打製石斧である。両側縁に敲打痕が見られる。18は敲石である。磨製石斧から転用した敲石であると判断した。上下端部、側

縁の一部は敲打で潰れた後、使用により摩耗している。

第28号小竪穴状遺構出土石器 (第98図9)

9は黒色頁岩製の打製石斧である。風化が激しく剥離が不明瞭であった。

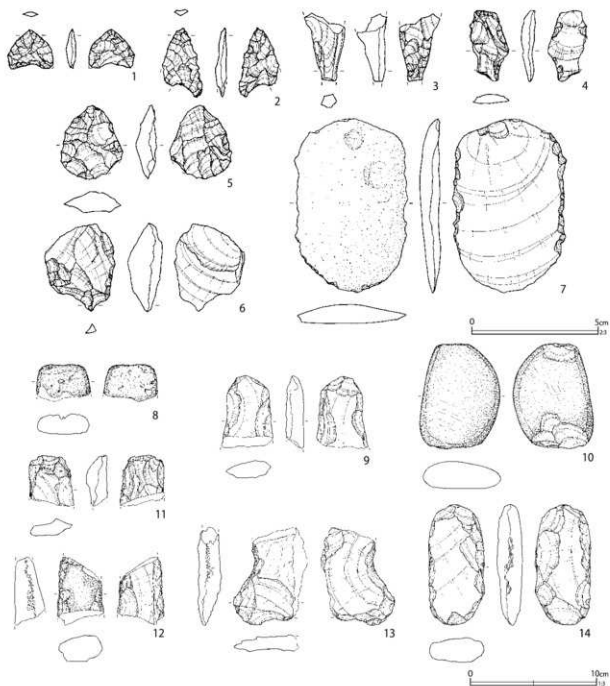
第29号小竪穴状遺構出土石器 (第99図16)

16は安山岩製の磨石である。上端部は敲打で潰

れた後、摩耗している。平坦面はわずかに擦痕が見られる。平坦面の中央は敲打で凹んだ後、使用により摩耗している。被熱により赤色化している。

第30号小竪穴状遺構出土石器 (第98図3、8、第99図15、21)

3は珪質頁岩製の石錐である。錐部は短く、断面形はレンズ状に近い。8は軽石製の不明製品で



第98図 小竪穴状遺構の出土遺物 (32)

ある。下半部を欠損する。15は安山岩製の磨石である。被熱により赤色化している。平坦面は平滑に摩耗している。21は安山岩製の石皿である。皿部は「U」字状に凹んでいる。

第38号小竪穴状遺構出土石器（第98図2）

2はチャート製の石鏃である。無茎で抉りの深いものである。入念に加工している。

第39号小竪穴状遺構出土石器（第98図5）

5はチャート製の石鏃である。個々の剥離面が大きく、粗雑な印象を受ける。未製品の可能性も

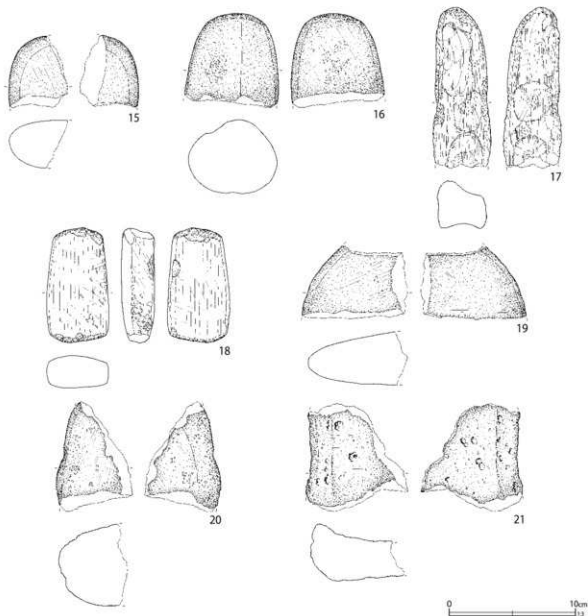
ある。

第44号小竪穴状遺構出土石器（第98図13）

13は緑泥片岩製の打製石斧である。両側縁の抉り部に敲打痕が見られる。刃部は部分的に摩耗している。

第30、43b、44号小竪穴状遺構、第31、32、42、43a号土壌出土石器（第99図17）

17は緑泥片岩製の敲石である。棒状鏢を使用している。周縁部と平坦面は敲打によって潰れ、平坦面は摩耗している。



第99図 小竪穴状遺構の出土遺物 (33)

(5) 土壌 (第57～65図)

調査時に土壌と命名した50基の遺構の中で、37基を小壁穴状遺構としたので、残り13基を用途不明の土壌と判断した。

土壌出土の土器を第100図～104図に示した。

土壌とした遺構の中には、遺物が比較的多く出土する第1号、2号、31号土壌などがある。ただし、これらは小壁穴状遺構とは異なり、単独で完形品が出土するのではなく、時期が異なる破片が多数混在する状況を示している。あるいは、第1号、31号土壌では遺物が底面より20cm程度高い位置で出土しており、流れ込みの様な状況を呈している。

第1号土壌出土遺物 (第100図1～4、第102図1～23)

第100図1は深鉢形土器で、口縁部に隆帯と沈線で渦巻文や栴檀文様を施文している。地文は撚りの細かい撚糸文Rを縦方向に施文している。中峠系の土器と考えられる。2も深鉢形土器で、文様は頸部と区画する沈線文の一部が残るのみである。地文は撚糸文Lをやや斜め縦方向に施文している。底径は6cmである。3は地文である単節RLの縄文を施文している。4は地文である撚糸文Rのみを施文している。第102図1～23は土器破片である。1～19は深鉢形土器の破片で、20～23は浅鉢形土器の破片である。7、9～11は同一個体のキャリバー形土器で、地文である撚糸文Lの施文後に、隆帯で区画文や口縁部文様を施文している。19の底面には網代痕が認められる。23の器面には孔を両側から貫こうとした痕跡があるが、貫通はしておらず位置もずれている。出土した土器のおもな時期は加曾利EⅠ式古段階である。

第2号土壌出土遺物 (第100図5～7、第103図1～25)

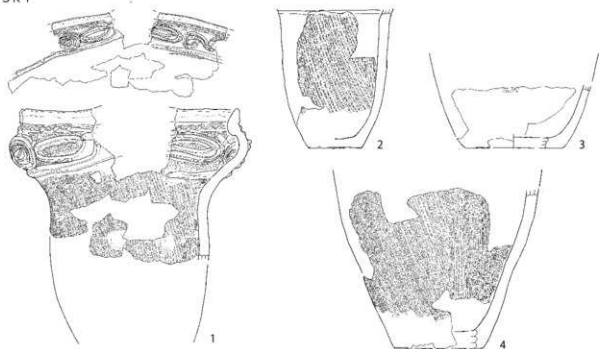
第100図5～7は器形が復元できた土器である。5はキャリバー形の深鉢形土器で、口縁部から胴上半部が残存している。隆帯で区画した口縁部文

様内には、渦巻文などを施文している。胴部には懸垂文を2本1組の沈線で垂下させ、沈線間を磨り消している。懸垂文を10単位施文すると推定した。地文は複節RLの縄文で縦方向に施文している。推定口径は36cmである。6はキャリバー形の深鉢形土器の一部である。口縁部には隆帯と沈線によって渦巻文を施文し、その間に栴檀区画文を施文している。栴檀区画文内には短沈線を縦方向に施している。地文は単節LRの縄文である。7は浅鉢形土器の胴部から底部が残存するものである。第103図1～25は出土した土器破片である。1～3は勝坂系の深鉢形土器で、隆帯上には刻みを施している。4～13はキャリバー形の深鉢形土器である。胴部には沈線によって垂下する懸垂文を施文している。14は口縁部文様を持たない深鉢形土器である。15は外反する無文の口縁で、深鉢形土器である。16は15の土器の頸部と考えられる。17は連弧文系の深鉢形土器である。18～22は地文のみが残る深鉢形土器の破片である。23～25は浅鉢形土器である。第2号土壌の時期は、第100図5～7などの加曾利EⅢ式土器が、覆土上面から出土している。これらは、第2号住居跡を壊して作られた土壌に属すると考えられるが、遺構は確認することはできなかった。土壌に属する土器は、第103図1～3であると考えられ、時期は勝坂式末葉と考えられる。

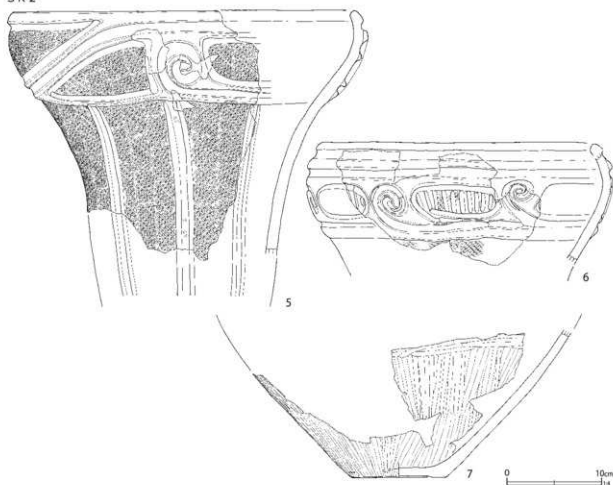
第19号土壌出土遺物 (第101図8、第102図24、25)

第101図8は口縁から胴部が残存している。器形はキャリバー状だが、胴部はずん胴である。口縁部は隆帯によって渦巻文などを施している。胴部は粗い器面調整のみが残り、頸部周辺に節の大きな単節LRの縄文を地文として施文している。口縁部も地文があったと考えられるが器面が荒れており明確ではない。第102図24、25は深鉢形土器の破片である。24は阿玉台系で、25は勝坂末葉の土器片である。第101図8から土壌の時期は加曾利EⅠ式古段階と考えられる。

SK 1



SK 2



第100図 土壌の出土遺物(1)

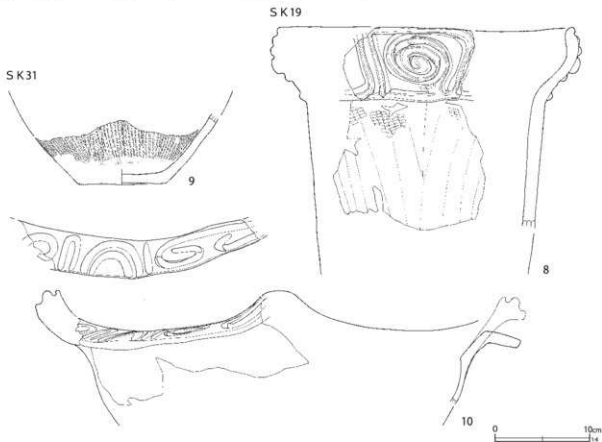
第21表 土壌一覧表(第57～66図)

旧名称	新名称	グリッド	平面形	長軸方位	長軸×短軸/m	深さ/cm	重複遺構
SK-1	SK-1	G-9	楕円形	N-19°-E	1.66×0.93	19	
SK-2	SK-2	G-9-10	円形	N-42°-W	1.53×1.43	15	SJ1・2(新)
SK-5	SK-5	B-6	円形	N-7°-W	0.93×0.89	77	SK3新旧不明
SK-19	SK-19	D-6	楕円形?	N-74°-W	1.80×(1.56)	10	SJ6新旧不明
SK-20	SK-20	D-6	楕円形?	N-17°-E	0.95×(0.57)	7	SJ8(新)SJ6と新旧不明
SK-31	SK-31	D-6・7	楕円形	N-27°-E	1.22×0.78	119	SK30新旧不明
SK-32	SK-32	D-6	円形?	N-69°-E	(0.78)×0.72	57	SK44新旧不明
SK-33	SK-33	D-6	不整形	N-11°-W	1.53×0.85	13	
SK-34	SK-34	D-6	楕円形	N-87°-W	0.83×0.69	141	
SK-42	SK-42	D-6	円形	N-82°-W	0.62×0.53	35	
SK-43	SK-43a	D-6	円形	N-43°-W	0.75×0.70	55	
SK-45	SK-45	D-6	楕円形	N-84°-W	0.84×0.49	37	
SJ3FSK-2	SK-47	F-9	楕円形	N-35°-W	1.18×0.55	52	SJ3(新)

第31号土壌出土遺物(第101図9、10、第104図1～15)

第101図9は胴下半から底部が残存するもので、燃糸文Lの地文のみを施文する。10は浅鉢形土器で、外側に屈曲した面上には半円や渦巻文などを沈線で施文している。第104図1～15は土器破片

である。1～12は深鉢形土器の破片である。そのうち1～8はキャリバー形の深鉢形土器で、胴部には磨消懸垂文を施文している。9は連弧文系の深鉢形土器の口縁部である。13～15は浅鉢形土器の破片である。遺構の時期は加曾利EⅢ式古段階である。



第101図 土壌の出土遺物(2)

第32号土壌出土遺物 (第104図16～20)

第104図16～20は土器破片である。16～18は深鉢形土器で、17、18は磨消懸垂文を施文している。20は浅鉢形土器の胴部である。19は後期前葉の土器片である。土壌の時期は加曾利EⅢ式期と考えられる。

第34号土壌出土遺物 (第104図21～35)

第104図21～35は土器破片である。21は土器の突起部分で、勝坂末葉の深鉢形土器である。22は隆帯を舌状に貼付するもので、中峠系の深鉢形土器である。23～29はキャリバー形の深鉢形土器の

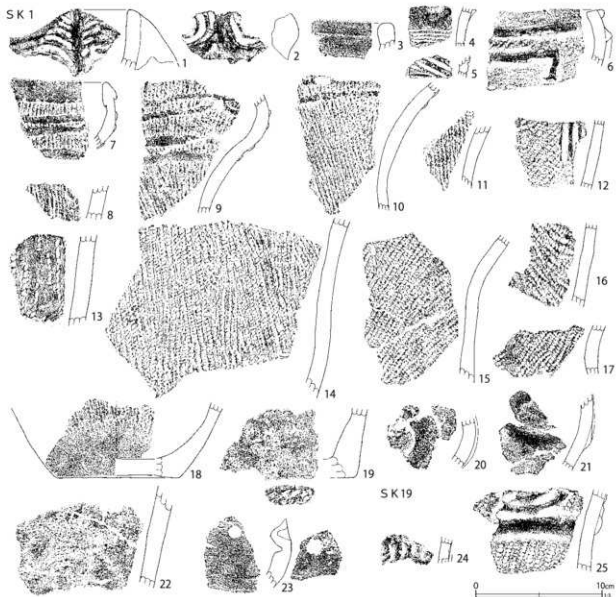
口縁から胴部で、胴部には磨消懸垂文を施文している。29、30は連弧文系の深鉢形土器で、33は曾利系の深鉢形土器である。34、35は浅鉢形土器である。土器の多くは加曾利EⅢ式古段階である。

第42号土壌出土遺物 (第104図36～39)

第104図36～39は土器破片である。全てキャリバー形の深鉢形土器の破片である。沈線によって、懸垂を施している。加曾利EⅢ式に相当すると考えられる。

第47号土壌出土遺物 (第104図40～43)

40は連弧文系の深鉢形土器の頸部で、沈線内に

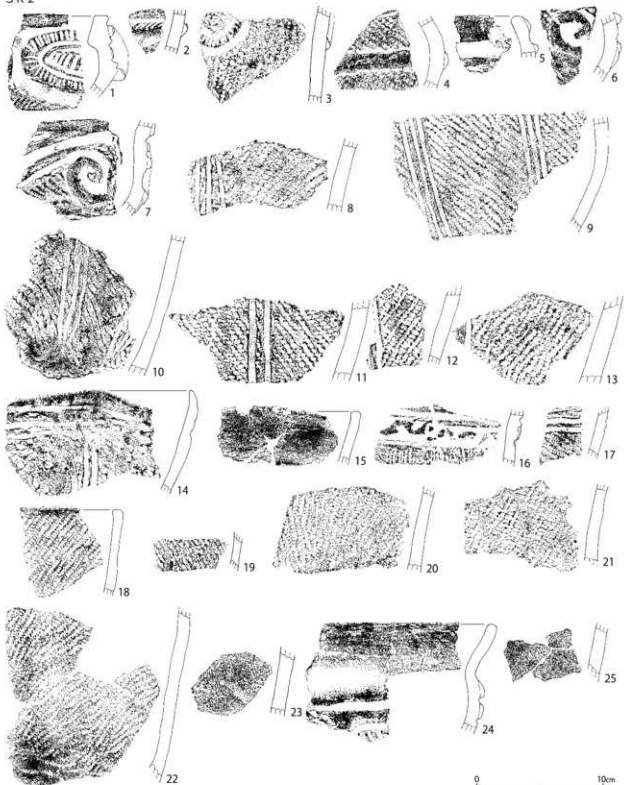


第102図 土壌の出土遺物 (3)

円形の刺突文を施している。41、42はキャリパー形の深鉢形土器である。43は深鉢形土器の胴部で、

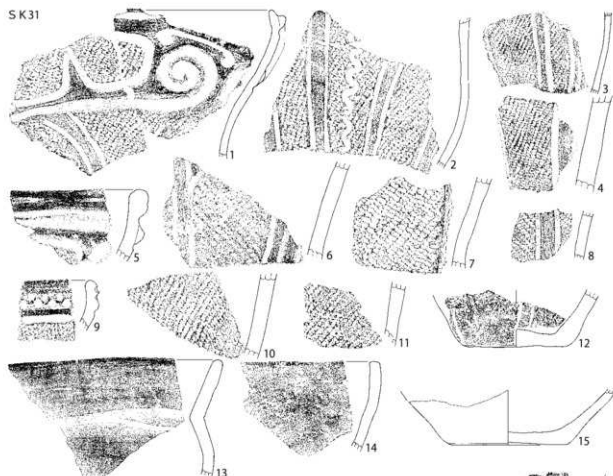
無文である。土器の時期は加曾利EⅢ式古段階である。

SK 2

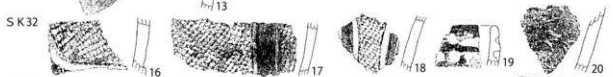


第103図 土器の出土遺物(4)

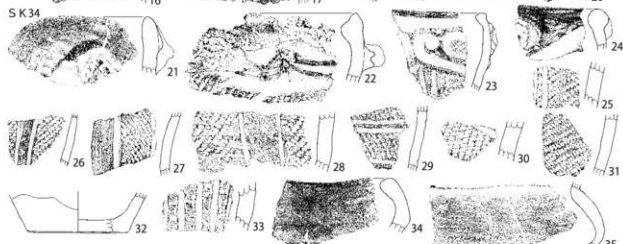
SK31



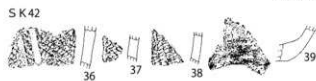
SK32



SK34



SK42



SK47



0 10cm 1/3

第104図 土壇の出土遺物(5)

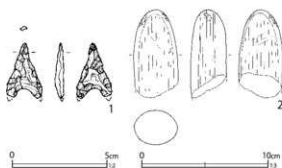
(6) ビット

浅間下遺跡からはビットを18基検出しており、これらは縄文時代の可能性が考えられる。

遺物は石器が少量出土した。第105図にビット出土遺物を、第22表に観察表を示した。

1は、黒曜石製の石鏃である。一次剥離面を残して加工し、被熱により全体が発砲している。

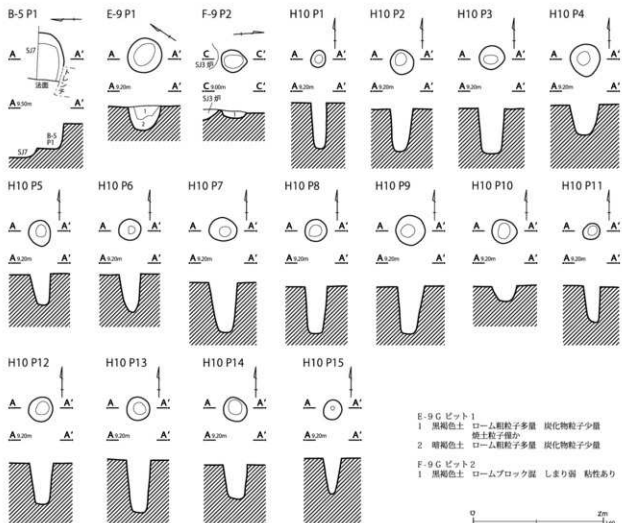
2は、磨製石斧である。乳棒状で、全面整形により光沢が見られる。



第105図 縄文時代のビット出土遺物

第22表 ビット出土石器観察表(第105図)

番号	器種	石材	長さ/cm	幅/cm	厚さ/cm	重さ/g	出土位置	備考
1	石鏃	黒曜石	2.2	1.4	0.4	0.7	H-10 P11	
2	磨製石斧		[7.1]	3.5	2.9	113.6	H-10 P14	



第106図 縄文時代のビット

(7) グリッド出土土器 (第107～109図)

第1群土器 (第107図1～13)

前期の土器群を一括する。

第1類土器 (第107図1～12)

繊維を含む土器を一括する。1～3は花積下層式の可能性がある。1の口唇部には刻みを施している。1、2ともに器面には擦痕が認められる。3は単節R Lの縄文を施文している。4は岡山式土器、5～12は黒浜式土器である。12は単節と無節を折り合わせた原体で施文している。

第2類土器 (第107図13)

繊維を含まない土器を一括する。13は貝殻腹縁文を施文する土器で、興津式土器である。

第2群土器 (第107図14～32、第108図33～51、第109図52～65)

中期の土器群を一括する。

第1類土器 (第107図14～21)

中期中葉の阿玉台式土器、勝坂式土器を一括する。14～18は阿玉台式土器で、いずれも胎土に金雲母を含んでいる。14は口縁の扇状の突起部分である。15は結節沈線文を施文している。16は口唇部に結節沈線を施文している。17、18は橢圓状条線を波状に施文する。19、20は勝坂式との折衷的な土器である。21は勝坂式土器である。

第2類土器 (第107図22～28)

勝坂式終末から加曾利E式初頭の土器群を一括する。22は把手部分である。24、25は隆帯上に単節R Lの縄文を施文している。26は曾利系の土器である。27、28は中峠系の土器で、27の口縁には把手部分が剥落した痕跡がある。28は隆帯を立体的に張り出させるもので、張り出し部分には沈線文を施文している。27の地文は燃糸文Lである。28の地文は単節R Lの縄文である。

第3類土器 (第107図29～32、第108図33～51、第109図52～65)

中期後葉の土器を一括する。29～49はキャリバ一形の深鉢形土器で、29～31、40、41は加曾利E I

式、他は磨消縄文から、加曾利E III式と考えられる。地文として29、30、33、34、37、40、41、43、44、48、は単節R Lの縄文、31、45、46は複節L R Lの縄文、32、39は無節Lの縄文、35、49は複節R L Rの縄文で施文している。36、42は燃糸文Lを地文としている。50、51は口縁部文様帯を欠く土器である。50の地文は単節R Lの縄文で、51の地文は複節L R Lの縄文である。52～57は連弧文系の深鉢形土器である。地文として52、57は燃糸文Lを、53は条線を、54、55は単節R Lの縄文を、56は複節R L Rの縄文を施文している。58～63は曾利系の深鉢形土器で、いずれも重弧文系統の土器である。58は格子状の隆帯と円形浮文を貼付している。64、65は深鉢形土器以外の器形の土器で、64は壺状の器形と考えられる。

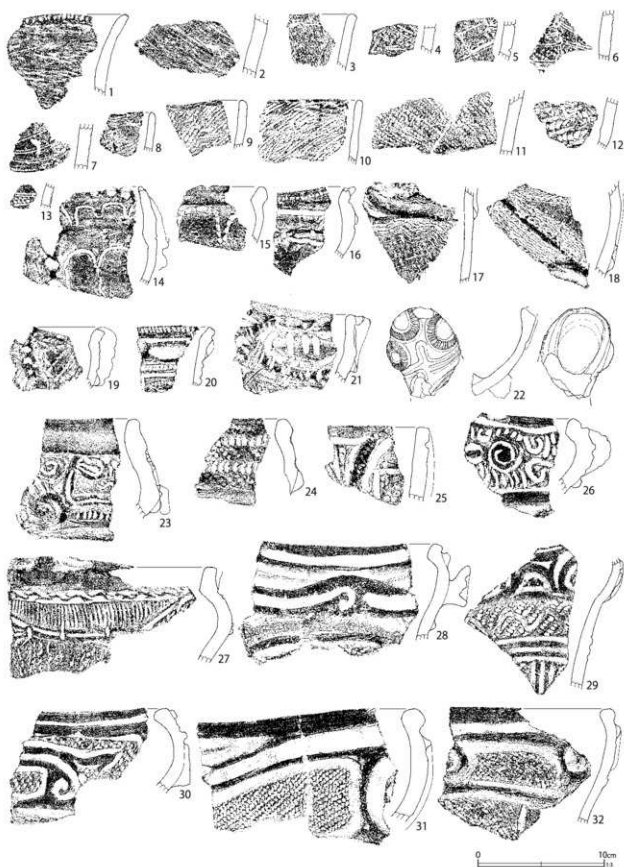
第3群土器 (第109図66)

後期前葉の土器を一括する。66は口縁部の破片で、内面も施文が認められる。薄手の深鉢形土器の口縁部で、堀之内2式土器である。

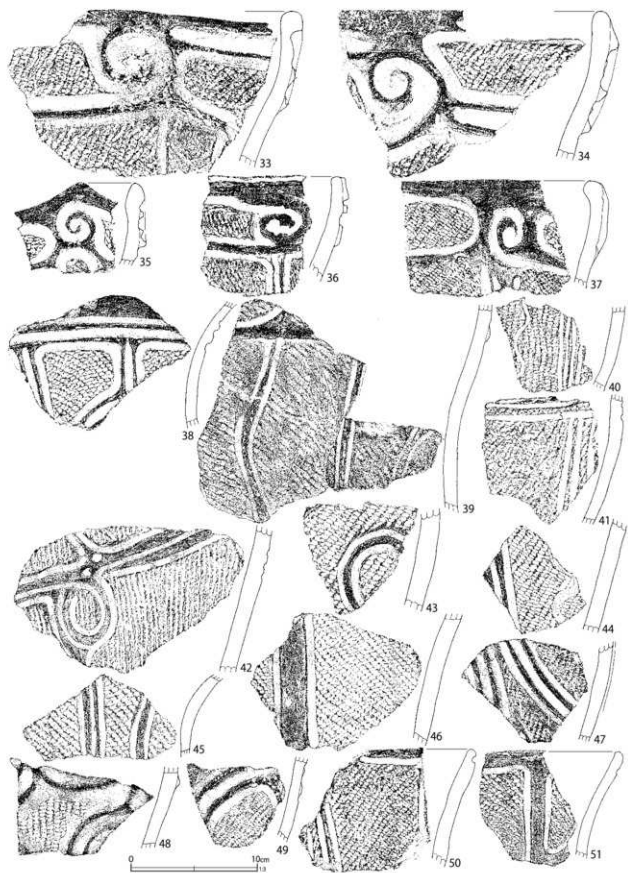
土製品 (第109図67～74)

第109図67～74は土製品である。67は土偶の右腕の破片である。完形なら15～16cm前後の土偶になると思われる。肩の正面から背面および腕の側面は、角押文による沈線を施文している。腕はやや内湾して下垂する。肩上面の背部よりには、わずかに磨耗した痕跡が見られる。色調は肌色にちかい褐色、胎土は密で砂粒をほとんど含まず、焼成は良好である。腕の形態、角押文による沈線を施していることなどから、中期阿玉台Ⅲ式期の土偶と考えられる。当該期の土偶は出土例が少なく、県内では、春日部市の花積台耕地遺跡から角押文で施文した土偶顔面の破片が見つかったのみである。

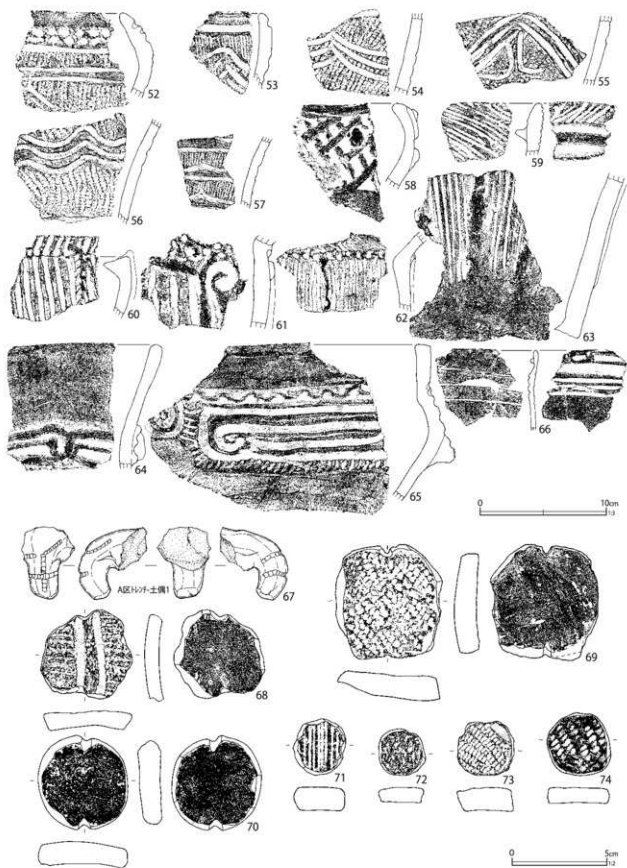
68～70は土器片、71～74は土製円盤である。



第107図 グリッド出土遺物(1)



第108図 グリッド出土遺物(2)



第109図 グリッド出土遺物(3)

(8) グリッド出土石器 (第110、111図)

第110図1は頁岩製の尖頭器である。木葉形で細身、両面加工形で断面形はレンズ状を呈する。

2～12は石鏃である。2は黒曜石製で無茎、緑辺のみを加工している。3はチャート製で無茎、粗雑なつくりである。4はチャート製で無茎、剥離は精緻である。5はチャート製で無茎、粗雑なつくりである。6はチャート製で無茎、粗雑なつくりである。未製品の可能性もある。7はチャート製で無茎、粗雑なつくりである。製作途中で廃棄したものであろう。8はチャート製で、欠損により形状は不明である。粗雑なつくりである。9はチャート製で無茎、大きく粗雑なつくりである。10はチャート製で無茎、かなり大型で重く、未製

品の可能性もある。11は黒色頁岩製で無茎、離面が不明瞭である。12はチャート製で肉厚、大型の剥片を素材とする。粗雑なつくりである。未製品の可能性もある。

13、15は石匙である。13はチャート製の縦型石匙である。15は黒曜石製で、横型石匙である。摘み部は明確で左右対称と考えられる。刃部の角度が急斜度で、加工も大きく特徴的である。

14はチャート製の石錐である。錐部は短く、摘み部は見られなかった。断面は菱形に近い。

第111図16、17は磨製石斧である。16は定角式、全面整形によって光沢が見られる。刃部は敲打によって潰れた後、摩耗している。17は定角式、断

第23表 グリッド出土石器観察表(第110、111図)

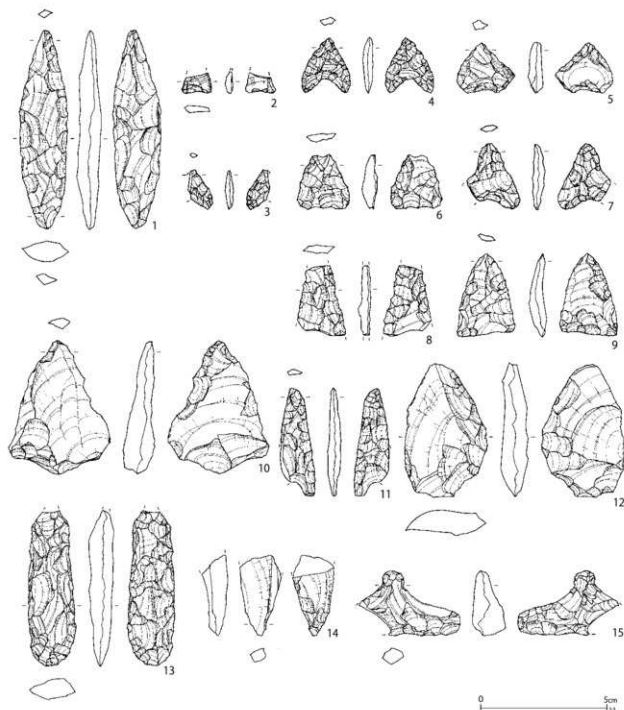
番号	器種	石材	長さ/cm	幅/cm	厚さ/cm	重さ/g	備考
1	尖頭器	頁岩	7.9	1.9	1.0	14.3	C-6-4
2	石鏃	黒曜石	[0.8]	1.2	0.3	0.3	A区トレンチ70
3	石鏃	チャート	1.6	[0.9]	0.3	0.4	G-8-4
4	石鏃	チャート	2.2	1.9	0.4	1.3	A区トレンチ3
5	石鏃	チャート	2.0	2.3	0.6	2.3	E-7
6	石鏃	チャート	2.2	2.1	0.6	2.5	A区トレンチ37
7	石鏃	チャート	2.6	[2.1]	0.5	2.0	G-9
8	石鏃	チャート	[2.7]	[1.9]	0.5	2.2	A区トレンチ25
9	石鏃	チャート	3.3	2.3	0.7	3.9	A区トレンチ53
10	石鏃	チャート	5.3	4.0	1.3	19.1	D-6-4
11	石鏃	黒色頁岩	4.2	[1.4]	0.5	2.7	A区トレンチ23
12	石鏃	チャート	5.3	3.3	1.1	18.4	D-6-3
13	石匙	チャート	[6.1]	1.9	1.0	12.3	B区トレンチ
14	石錐	チャート	[3.2]	[1.6]	[1.0]	3.2	A区トレンチ70
15	石匙	黒曜石	2.5	[4.0]	1.3	7.9	C-5-2
16	磨製石斧		[10.5]	5.5	3.2	326.4	A区トレンチ40
17	磨製石斧		[4.7]	4.1	[2.1]	59.3	D-5-2
18	打製石斧	緑泥片岩	9.7	5.8	1.9	133.3	F-8-2
19	打製石斧	安山岩	[8.5]	7.8	2.8	185.9	E-6-2
20	磨石	安山岩	[6.3]	7.7	4.5	311.4	A区トレンチ24
21	磨石	安山岩	6.1	5.6	4.5	212.1	A区トレンチ38
22	磨石	閃緑岩?	[5.8]	[6.8]	4.7	240.1	A区トレンチ20
23	敲石	砂岩	[7.4]	4.7	4.3	218.3	A区トレンチ57
24	石皿	安山岩	[8.1]	[8.4]	[4.6]	300.0	G-9-1
25	石皿	緑泥片岩	[8.2]	[8.8]	[1.7]	174.6	A区トレンチ69
26	石皿	安山岩	[9.8]	[8.3]	[6.6]	409.2	D-6-4

面は隅丸長方形である。刃部は刃こぼれによって摩耗している。基部が欠損する。

18, 19は打製石斧である。18は緑泥片岩製で分銅形、両側縁の挟り部に敲打痕が見られる。刃部と装着部の全面に摩耗が見られる。19は安山岩製で短冊形、側縁に部分的に敲打痕が見られる。上

半部が欠損する。剥離が不明瞭である。

20～22は磨石である。20は安山岩製で平坦面は平滑である。平坦面の中央は敲打によって潰した後、使用によって摩耗している。上端部も敲打によって潰した後、摩耗している。下半部が欠損する。21は安山岩製で円形礫を使用している。平坦



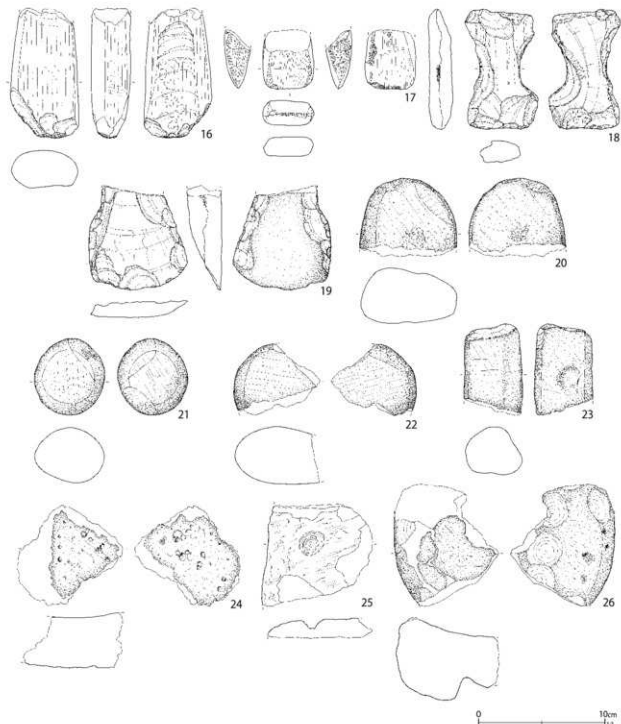
第110図 グリッド出土石器(1)

面はわずかに擦痕が見られる。上端部の一部が敲打によって潰れている。一部に赤色顔料の付着が見られる。22は閃緑岩製で上端部を敲打の後、摩耗している。平坦面は平滑に摩耗している。

23は砂岩製の敲打石である。上端部は欠損後敲打

している。下半部は欠損する。

24～26は石皿である。24は安山岩製で皿部はわずかに凹んでいる。25は緑泥片岩製で漏斗状の凹穴が見られる。26は安山岩製で皿部はわずかに凹んでいる。漏斗状の凹穴が多数見られる。



第111図 グリッド出土石器(2)

2. 古代の遺構と遺物

(1) 住居跡

第8号住居跡 (第112図)

第8号住居跡は、A区中央西よりのD-6グリッドで検出した。住居跡の南西側は調査区外に存在のため、調査が及んでいない。他住居跡との重複関係は、第6号、9号住居跡を壊していた。

平面形態は隅丸方形で、規模は主軸長推定3.9

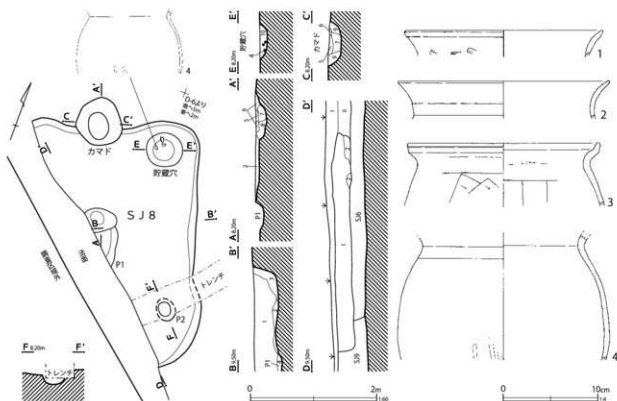
m、副軸長推定3 mで、深さ約40cm、主軸方位はN-18°-Wである。

カマドと貯蔵穴は北側コーナー付近で検出し、貯蔵穴内からは、4の甕上半部が出土した。

時期は、出土遺物から8世紀後半から9世紀初頭と考えられる。

第24表 第8号住居跡出土遺物観察表(第112図)

番号	種別	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	残存	焼成	色調	図版	備考
1	土師器	小型甕	(20.8)	[2.9]	—	BCDE	5	普通	橙	51-2-1	
2	土師器	甕	(22.2)	[4.0]	—	ABDEG	5	普通	橙	51-2-2	
3	土師器	甕	(20.0)	[6.7]	—	CDEFG	10	普通	橙	51-2-3	
4	土師器	甕	—	[13.3]	—	ABEFGJ	15	普通	橙	51-2-4	No.2



- 1 耕作土 黒色土 しまりなし
2 旧表土層 平安時代の表土層か? 黒色土 しまり、粘性弱

S J 8 (D-D')

- 1 黒色土 ロームまだらに僅か しまりあり 粘性弱
2 黒色土 焼土 (φ1~2mm) しまりあり 粘性弱

S J 8 (B-B')

- 1 黒褐色土 ローム粗粒子 (φ1~2cm) 少量 ローム粒子多量 焼土粒子 しまり強
2 黒褐色土 ローム粗粒子多量 焼土粒子 炭化物粒子僅か ややしりあり
3 黒褐色土 ローム粗粒子多量 焼土粒子少量 炭化物粒子僅か しまり強
4 黒褐色土 ロームブロック (1×5cmの扁平) 少量 ローム粒子多量 炭化物粒子僅か

カマド

- 5 暗褐色土 焼土、焼土ブロック多量 しまりあり 粘性弱
6 暗褐色土 焼土部分的に多量 しまりあり 粘性弱
7 暗褐色土 焼土 ローム粒子 しまりあり 粘性ややあり
8 暗褐色土 焼土 ローム粒子僅か しまりあり 粘性ややあり
9 黒褐色土 焼土僅か ローム少量 しまりあり 粘性ややあり

貯蔵穴

- 10 黒褐色土 ロームブロック、ローム粒子やや多量 焼土粒子、炭化物粒子僅か しまりあり 粘性弱

第112図 第8号住居跡、出土遺物

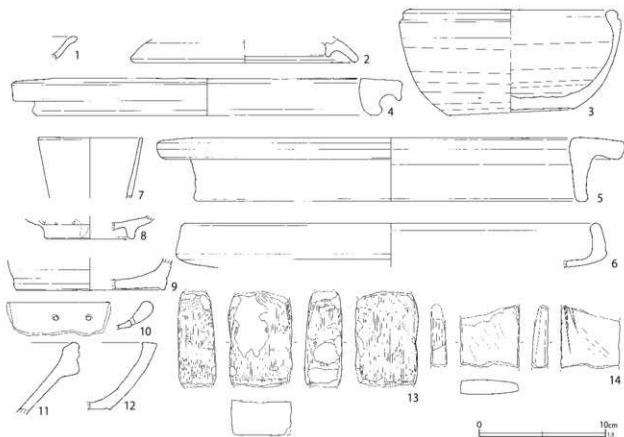
3. 中近世の遺構と遺物

(1) 遺物 (第113図)

中世、近世の遺構は調査区内からは検出できなかったが、遺物が若干出土した。

第113図1は瀬戸美濃系の陶器で、内外面に鉄釉を施す反皿である。大窯第3段階に相当し、16世紀後半の製品である。2と3は組み合うと考えられる土師質土器の蓋付鉢である。2は破片、3はほぼ完形で胎土を精選している。胞衣(エナ)容器であろう。年代は19世紀以降である。4、5は19世紀以降の瓦質土器の竜鐔である。鐔部に顕著な煤付着が認められる。6は土師質土器の焙烙で、底部丸底でシワ状の痕跡が見られる。胎土は精良で角閃石が大量に含まれる。年代は19世紀以降である。7は肥前系磁器の猪口で、外面に楼閣山水文を染付し、口唇部には口鏝を施す。19世紀

中葉から後葉の肥前製品である。8は瀬戸美濃系陶器のいわゆる菊皿で、内外面とも灰釉を施す。17世紀後半の製品である。9は瀬戸美濃系陶器の徳利と思われる。外面は釉を拭き取った痕跡が認められる。18世紀前半から中葉の製品である。10は土師質土器の焙烙で、胎土は精良で硬質、補修痕と思われる二次的な穿孔が一對認められる。19世紀の製品である。11は堺明石系の陶器搥鉢の口縁部である。内面にはスリ目を施す。19世紀前葉の製品である。胎土はやや粗で砂質である。12は瓦質土器の焙烙である。底部は平底でシワ状痕跡が認められる。体部は内外面とも良くナデ調整している。19世紀代の製品と考えられる。13、14は砥石である。



第113図 中世、近世の遺物

V 調査のまとめ

(1) 集落の消長

浅間下遺跡の縄文時代の遺物は、今回の第4次調査区域内では、前期前葉の花積下層式期から、後期前葉の堀之内2式期までの範囲で検出されている。だが、主体を占める遺物は中期後半の加曽利EⅠ式期と加曽利EⅢ式期のものであり、その他の時代の遺物は少量である。

縄文時代の遺構は、住居跡と小竪穴状遺構が主体であるが、この中で、住居跡は加曽利EⅠ式の古い段階が主体を占め、一部が加曽利EⅢ式期のものである。調査範囲が集落の全体に及んでいないため、全体像は不明であるが、おそらく、加曽利EⅠ式期直前段階からはじまり、加曽利EⅠ式期で安定的に居住が開始され、加曽利EⅢ式期まで継続したものであろう。ただし、加曽利EⅡ式期の状況については、未調査部分もあり不明瞭である。また、加曽利EⅢ式期と考えられる第3号住居跡の比較的大型の土器は、覆土中に掘り込まれた小竪穴状遺構に由来する可能性も考えられる。

一方、小竪穴状遺構は、加曽利EⅠ式と加曽利EⅢ式が含まれ、主体は加曽利EⅢ式である。

なお、ここで小竪穴状遺構としたものは、下総台地で典型的に見られるものである。調査時には、小竪穴状遺構と、その他の土壌が一括して土壌として命名されていたものであるが、ある程度の大きさを持ち、円形で壁の立ち上がりが垂直に近く、底面にピットを持つことを特徴とするものである。小竪穴状遺構の用途については、貯蔵穴とする考え方が一般的であるが、その一部は墓墳とも考えられている。

浅間下遺跡の集落は、その立地条件から、基本的には下総台地(東関東)に見られる当該期の集落と同様な特徴を示しているが、関東中央部(秩父山地とこれに接続する、丘陵、台地、および大宮

台地とこれに接する荒川低地、中川低地)でも見られるように、加曽利EⅠ式期に安定的に居住が行われ、加曽利EⅢ式期に廃絶される、提点的意味を持った環状集落であったと考えられる。そして集落に安定的に居住が開始された時点から、住居の環状配置が意識されると共に、廃絶された住居跡と重複しながらも、環状の内側に貯蔵のための小竪穴状遺構が掘削されたと考えられる。

根茎類は低温に弱く、冬場に放置すると低温によって腐敗するため、地表面に比べると温度が安定しており、決して氷点下にまで下がることのない地下の小竪穴状遺構に大量に保存していたものであろう。環状を呈する集落の内側という立地は、獣の食害から貯蔵食料を守るためには好都合のものと考えられる。

縄文時代中期後半でのこのような集落の在り方から、食糧の主要部分として堅果類と根茎類が考えられるが、その中で根茎類の効率的な利用が一つの契機となり、環状集落が成立し、維持できたと推定することが可能となる。

その一方で、加曽利EⅢ式より新しい土器がほとんど出土しないことから、当該期に根茎類に依拠した生活が、何らかの理由で打撃を受けた事が推定できる。

その結果、浅間下遺跡の集落も他の集落同様に、根茎類に大きく依拠していたであろう生活が立ちゆかなくなり、加曽利EⅢ式期を最後に解体したと観ることができよう。

(2) 土器敷きの土壌(小竪穴状遺構)

第4号住居跡の壁際から見つかった土器敷きの遺構(旧称:第4号住居跡内土器集中、新称:第48号小竪穴状遺構)は、底部を欠いた深鉢二個体の破片が、遺構の底部付近に敷き詰められたも

ので、類例がわずかに見られるものである。

注目されることは、二個体の土器の系統が異なっている点である。これは、第48号小竪穴状遺構が墓域に転用されたと考えた場合に、被葬者の出自との関連が想定されると共に、関東地方の加曽利E式系統と南東北地方の大木及び曾利式系統の並行関係を議論する際に重要な資料となるものである。

(3) 浅間下遺跡が提起する問題

集落の消長を議論する際に、問題となる土器編年上の重要な課題がある。

浅間下遺跡の集落は、加曽利EⅠ式期直前から開始され、加曽利EⅢ式期まで継続して、その後途絶えたように見えるが、時間的に両型式の間に位置する加曽利EⅡ式の遺構が、かならずしも明確には検出されていない。同様の傾向は、埼玉県内の他の環状集落でも視ることができる。

近年の埼玉県内を中心とした縄文時代中期後半の土器編年では、1980年代の編年に比べれば、加曽利EⅠ式と加曽利EⅢ式の捉え方が異なっており、実質的に加曽利EⅡ式と呼べる土器の捉え方が難しくなっている。集落の消長を議論する際に、特定の型式が他の型式に比べて著しく時間幅が異なっていた場合、本来は一定の規模で継続していた集落が、その時期に急激に凋落するように見えてしまう。通常、各型式の存続期間がかならずしも等価でないことは、自明の前提であると言うものの、加曽利EⅡ式と呼べる

土器の範囲が、研究者によって大きくずれて設定されているとすれば、集落が同規模で継続されていたとしても、加曽利EⅡ式期の住居跡の実体把握に支障を来す恐れがある。集落の消長を議論する際には、少なくとも各型式に対して、大まかな継続時間の目安を示す必要があろう。

加曽利EⅡ式がどのような範囲の土器を含み、どこで前後型式と区別されるのか、あるいは、どの程度の時間幅を占めるのか、共通の認識が十分であるとは言えない状況の中では、集落の消長を詳細に議論することに一定の困難が伴う。

更に、他地域との並行関係についても、同様なことが考えられる。加曽利EⅡ式の範囲が異なる理由の一つに、磨消縄文の成立をもって加曽利EⅢ式の開始とする考え方がある。つまり、南東北地方の大木9式に磨消縄文が見られることから、磨消縄文の要素で大木9式と加曽利EⅢ式の並行関係を合わせるという考え方が背景にあるように思われる。

今回検出された、第48号小竪穴状遺構の底面付近に敷き詰められていた2個体の土器は、良好な一括資料であり、出土状況は異なるものの、他の遺跡でも同様な共伴例が複数見られることから、今後、大木系統と加曽利E系統の並行関係について、より詳細に議論する際の重要な資料になると考えられる。

いずれにしても、今回の調査によって、集落論の基本的な要件や、地域間の並行関係に対しての、重要な資料が明らかになったと言える。

参考文献

- | | | |
|-------|------|---|
| 金澤文雄 | 1988 | 『浅間下遺跡 第1地点・第2地3』庄和町浅間下遺跡調査会 |
| 金子直行 | 1996 | 『加曽利E式土器』『日本土器辞典』雄山閣出版 |
| 長谷川清一 | 2005 | 『浅間下遺跡第3次／香取廻遺跡第2、5次／愛宕遺跡第2次／馬場遺跡範囲確認調査』庄和町文化財調査報告 第14集 |
| 細田 勝 | 2008 | 『加曽利E式土器』『総覧 縄文土器』アム・プロモーション |